
お騒がせトレーナー珍道中

陣名 S O S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お騒がせトレーナー珍道中

【Nコード】

N5352H

【作者名】

陣名SOS

【あらすじ】

「彼女になつてくれ!」「嫌っ!」軟派撃沈率100%の男、カイト。ホウエン地方のとある美少女に連続72回振られたカイトは、彼女を諦め新天地シンオウ地方へ。マサゴタウンのナナカマド研究所で生活費を稼ぎながら彼女が出来る事を夢見て今日も奮闘する。

プロローグ（前書き）

序盤のみシリアス風。徐々に壊して行きます。

ブローグ

一匹のポケモンが、木の間を縫うように疾走していた。深い闇で保護色となるはずの黒い毛並みには浅くない傷が多数走り、常に鋭い眼光も今は影を潜め狩られる立場に甘んじている。

自分は群れのリーダーだ。それが何故ただの人間に追い詰められているのか。

“10まんボルト”での牽制も、“にらみつける”や“とおぼえ”での脅しも意味を成さない。

枝を、葉を踏みしめ倒れたポケモンに地を踏む音が少しずつ迫ってくる。

誇りにかけて屈するわけには行かない——黒のポケモンは全ての力を振り絞って立ち上がろうとした。

「まだ立てる……リーダーだけあって耐久力も高いようだが……ルカ“かげうち”」

もう一度、気力のみで立ち上がった黒のポケモンを、影から伸びた槍が貫く。

地響き。今度こそ、黒き獣はその身を地面に横たえた。

倒れたその身に赤と白のツートンカラーが迫る。モンスターボールと呼ばれるカプセルがぶつけられ、黒のポケモンはカプセルの中に封じられてしまった。

「『レントラー』 捕獲完了だ」

そしてポケモンを吸い込んだカプセルボールはその場から音もなく消えた。

第一話／封印ポケモンの話

「助かった、ありがとうルカ」

「ミヨーン」と鳴くルカ。種族名はミカルゲ、封印ポケモンに分類されたゴーストポケモンだ。

その身体はゴースト種同様、ノーマル格闘の技を無効化し、ゴースト種の苦手とするエスパー技も無効化する。ゴースト／あくという珍しいタイプ構成のミカルゲに弱点は存在しない。

紫色の身体には緑の蛍光も混ざり、縦に伸びたり横に伸びたり。ただミカルゲ種が他のゴーストポケモンと異なる点、要石がミカルゲ種の枷となっている点だ。

ミカルゲの伝承が一つ、カンナギタウンに伝わっている。

『ゆうれいポケモンだ』

かのすがたをみたおとこはいった

あくまポケモンよ

かのすがたをみたおんなはいった

ばけものポケモンだ

かのすがたをみたひとびとはくちぐちにのしった

ののしられたポケモンはいった

わたしがなにをしたのか

わたしはここにいただけだ

しかしおまえたちはわたしをきよぜつした

きよこうのつみをおしつけた

それはおまえたちのごうだつみだ

あるときののしられたポケモンはひでりをおこした

ひとびとはしょくりようとみずをうしなった

あるときののしられたポケモンはおおあめをふらせた

ひとびとはいえとなかまをうしなった

ひとびとのなかからひとりのしょうじょがいけにえとしてポケモンにささげられた

ポケモンはしょうじょにとうた

なぜわたしをきよぜつしたのか

しょうじょはこたえた

あなたさまのおちからがおそろしかったのです

あなたさまのおちからでわたしたちはたべものをみずをすむいえをうしなしました

それをおこしたあなたさまのおちからをさらにこわがりました

そしてそれをしずめるためにかぞくをうしなつたわたしがいけにえにされました

ポケモンはこうかいしました

さいしょはおまえたちがわるかった

しかしわたしもおまえたちにひどいことをしてしまった

どちらもわるいのだ

なぜたがいひどいことをしてしまったのだろう

しょうじょはかなしそうにポケモンをながめるだけでした

ポケモンはじかんのかみとくうかんのかみにすべてをもどしても

らうようにたのみました

しかしじかんのかみもくうかんのかみもきいてはくれませんでした

にんげんはじごくじとくなのだ

じかんのかみはいいました にんげんはじぶんかってなのだ

くうかんのかみはいいました

ポケモンはうったえました

にんげんのつみはおおきいです

しかしそれはれきしをつみかさねたにんげんたちのあかしなのですから、
わるいところもあればいいところもある
しょうじょはそれをわたしにおしえてくれました
わたしがにんげんたちのつみをひきうけます
わたしがにんげんたちのつみをせおいます
だからもどしてください
すべてをもとにもどしてください
じかんのかみもくうかんのかみもなにもいいませんでした
かわりにそばのかんじょうのかみがいいました
あなたがにんげんのつみをせおうならあなたをふういんしないとい
けない

ポケモンはこたえました

わたしをふういんしてください

わたしのつみとにんげんたちのつみごと

わたしをふういんしてください

そしてしょうじょのかぞくをいきかえらせてください

わたしがころしてしまつたしょうじょのかぞくを

かんじょうのかみはそれをりょうしょうしきおくのかみいしのか
みとともににんげんたちのところをかえました

じかんのかみもくうかんのかみもポケモンのねがいをききいれす
べてをもとにもどしました

そしてかんじょうのかみによりポケモンはかなめとなるいしにつ
ながれとうにふういんされました

ポケモンはすべてのつみをうけいれいまもねむっている『逸話
の類いであることは既に判明している。』

近年発見されたプラズマポケモンロトム同様、ミカルゲは『タマ
ゴ』が発見されている。伝説ポケモン全てにおいてタマゴが見つか
っていないのだ。

幻ポケモンに置いては回遊ポケモンマナフィとメタモンをペアに
した場合海洋ポケモンフィオネのタマゴが見つかるらしいのだが

かんせん前例が少ないので詳細は不明。

このルカ——ミカルゲはタマゴから孵ったポケモンである。そんな逸話に当てはまらない、なんとも好奇心旺盛で人懐っこい。

伝承なんて関係ない、ルカはルカ。伝承で伝わるミカルゲ伝説とは関係ないんだ。

ちなみにこのミカルゲ……かなり薄いんだが何故だろう。しかも108.0kgもある、ネンドールと同じ重さ。大きさはアゲハントと同じくらいなのにな。

「ミヨーン」

「ん？ ああ、ポケナビか」

ポケナビ、ポケモンナビゲーター。ハウエン地方デボンコーポレーションが発売しているトレーナーサポートアイテム。ハウエン地方出身者にとってはポケッチよりも使いやすい。青いボタンの部分がチカチカ点滅しているのは、エントリーコール——通話機能のしるしである。

「はい」

『成果の方はどうだ？』

「レントラー捕獲完了しました。ポケモンセンターを経由後、研究所に送られるはずです」

『うむ、ご苦労。今日は戻って来てくれ』

「はい、分かりました」

通信を終了しポケナビの電源を切る。ナナカマド博士、それが今通話の相手で雇主でもある。

「戻れ、ルカ」

ミカルゲをクイックボールに納める。そのボールを腰に取り付け、マサゴタウン方向に足を向ける。

——その瞬間、一匹のポケモンが近くの草むらから踊り出た！

第二話／謎の少女

「トゲ……チック？」

草むらから飛び出して来たお腹に幾何学模様のある天使の様な姿——記憶に間違いがなければトゲチックである。

「チィッ」

舌打ちじゃなくてトゲチックの鳴き声だからな！

鳴き声の後にトゲチックの周りに葉っぱがフワフワと浮かびだし、フワフワと浮かび出しィ！？

“マジカルリーフ”！

必中技で“つばめがえし”や“スピードスター”同様知名度はそこそこ。絶対に避けられないのでいくら素早いテッカニンやマルマイン、プテラでも完全に避けすることは不可能だ。

「避けるっ」って言われてポケモンが避けれるのは運良く相手が技を外すか“かげぶんしん”等で回避率を上げている時ぐらいである。必中技に対しては意味ないが。さてどうやって防ごうかな……スピードスターならルカで無効に出来るんだけどな……マジカルリーフだしな……そう考えている内にマジカルリーフの予先が完全にこちらを向いていた。

よし、これを使おう。常にポケットに忍ばせている『けむりだま』である。厄介な相手は煙に巻く……昔からの常套手段だ、意味違うけど。そのまま実践してるけど。発生した煙幕が蔓延し姿が隠れる。出来るだけ気付かれないように――

シュパパパッ

必中技を避けるなんて無理でした！

正確には避けたんだけどね！ 何枚か掠ったからね！
ツーと頬や腕に小さな裂傷、傷口が赤く染まる。

「ズバー」

「そうそうズバー――ってズバットオ！？」

奴らに気をつける。奴らの前に滴る生き血なんて見せた日にゃ……
…全部吸い取られるのさ！

逃げる！ まだ死にたくない！ 吸血死なんて御免だ！

「チィッ」

再びトゲチックの鳴き声、それとズバ子（♀みたい）頭に噛み付くんじゃねえ！

ちゅーちゅー吸うな！ それはマウスとウマウスでちゅーちゅーした事のない野郎（俺含む）に対する皮肉だな！？ あ、気が遠くなつて来た……。

パンと空気が弾けた。視界に焼け付く青い光、必中技“でんげきは”がズバツトの目を確実に捉えていた——のだが。

「あだだだだだだだっ」

噛み付かれてるのに電撃を喰らったら俺も痺れるよね。常識的に考えても。

しかしこのトゲチック、急にマジカルリーフで攻撃して来たと思ったら、俺を助けたり（結果的にさらなるダメージを受けたが）何をしたいんだろう。

あれか、実はこのトゲチック俺が昔助けたトゲピーが進化したとか？

現実：そもそもトゲピーを助けていません。

「チイツトゲツ！」

でんげきはの構え。

えーとこれは恐らく……

「俺に向けて撃つ気かあ！」

「トゲエ」

正解らしい。ならば逃げる！ そうだ、ムツクル・ムクバードの巣があるシンジ湖に逃げ込もう！ 餌付け済みだし。 チュドンチユドンと愉快的な擬音と共に撃ち込まれるでんげきは。それを危ない気に躲す。タイプ一致でないのが幸いだが、状況は全然幸いじゃない。シンジ湖に突入した途端、ムクバードとムツクルが現れたまではないんだ…… “ゆびをふる” で電気技“ほうでん” が出て、ムクバードとムツクル達全員麻痺で動けないとかどういう状況だあ！ 冷静に分析すると特性『てんのめぐみ』だから仕方ないんだけどね！

「ドーミラー！ “ジャイロボール” ！」

不意打ちと言う言葉はこういう時に使うのだと感心した。背後から高速回転したコイン型ポケモン、分類名青銅ポケモンドーミラーのジャイロボールがトゲチックを弾き飛ばした。

「トゲ……クが……に居るなら……は近くに居る……」

赤い髪の銀色の服を来た少女。十代後半、つまり同年代。よく聞
けよ、同 年 代の美少女だ！ それもミニスカだ！

つまりだ……口説くに決まってるだろ！

「お嬢さん名前は？」

「だれあなた？」

「俺はマサゴタウンのカイトです！ 綺麗なお嬢さん！」

「あ、はいはい。そーゆーのいいから、このトゲチックのトレーナ
ー知らない？」

「知りません」

「じゃ、いいわ。どっか行っちゃって」

撃沈。無念過ぎる……せめて名前だけでも……！

「クチート“かえんほうしゃ”！」

「現れたね！ マーキュリー！」

熱い熱い熱いあつつい！ 燃えてる！ 燃えてるよ今の俺！

「フッ……俺に触ると火傷するぜ……」

「ドミラージャイロボール！」

「クチート“かみくだく”！」

真っ向からぶつかりあう鋼と鋼。接触により火花が散る——燃えてる俺はスルーされた。

プシュー

ふう……餌付けしていたコダックが水中から“みずてっぽう”で消火してくれた。ありがとう。

「かみなりのキバ」！」

上手い！ 鋼とエスパーを併せ持つドーミラーだが、特性によって地面技か炎技に強くなる。鋼にもエスパーにも等倍である電気技は賢い選択だ。相手の特性が『ふゆう』ならかえんほうしやに切り換えた方がいいが。大きな第二の口でドーミラーを咥え込むクチート。その牙が強く放電する。

「ドーミラー“チャージビーム”！」

これ又上手い。純鋼タイプのクチートに等倍ダメージを与えられるのは電気か水。しかもチャージビームは特攻上昇追加効果もある為、次の攻撃にも備えやすくなる。

クチートの口内で激しくぶつかる2種の電撃、2体は同時に弾け飛び互いのトレーナー側まで後退を余儀なくされる。今の攻防の隙を突いてクチートのトレーナ、白いニット帽に赤いマフラーを巻

いた少女がトゲチックをボールに納めた。気付かなかったがこちら
も美少女である。年下過ぎるけどね！ どうみても十代前半だし。

「この子はバトル用じゃないのよ！」

「バトル用でないポケモンを持つてる方がおかしいわ」

バトル用じゃないならコンテスト用だろうか。マジカルリーフも
でんげきはもコンテストなら上手く魅せられるからな……。――

しかしバトル用外のポケモンに追い詰められたのか、俺。

「クチートかえんほうしゃ！」

「ドーミラーチャージビーム！」

今度は遠距離戦、灼熱と電撃が混ざり合い相殺爆発。さて、こち
らに飛び火しない内に撤退撤退（木の裏に）。

「かえんほうしゃ！」

「かえんほうしゃの一点張りじゃ芸がないわ……ドーミラー“じん
つうりき”！」

空間婉曲……迫る火炎を無理やり四散させてしまった。エスパー
タイプを持つからこそ出来る芸当。かなりレベルの高いバトルだ。
録画装置を持てれば良かったぜ！ そうすれば際どいスカート少
女達の際どい動画が撮れたんだけどな。いや、バレたら即存在が

消される可能性が高いからしなくて正解か。

「ふふっ——“トリックルーム”！」

「させない！ かえんほうしゃ！」

ニット帽少女の方は先程からかえんほうしゃの連打である。

かえんほうしゃの直撃——奇跡的にそれを耐え切った。特性はやはり『たいねっ』か！

炎ダメージを等倍に押さえてトリックルームの発動。銀服少女・ニット帽少女・ドーミラー・クチートを包むように発生する特別な空間、あの中では素早さが遅ければ遅い程早く行動出来る。

クチートより素早さの遅いドーミラーはクチートより早くなる。

「これで終わり……チャージビーム！」

太い電撃光線がクチートに迫る。今までの使用で特攻上昇の追加効果が出てたのだから、二度の使用時よりも遥かに強化されていた。

「クチート“まもる”！」

上手い。“まもる”は通常の攻撃より早く発生する、それはトリックルームの影響を受けない。つまり、チャージビームを確実に防げるのだ。

緑の障壁がチャージビームを無効化する……が、まもるには弱点

もある。使用する度に成功確率が減って行くのだ。

「それは焼け石に水……もう一度チャージビーム！」

「もう一度まもる！」

「チャージビーム！」

「まもる！」

「チャージビーム！」

「まもる！」

まもるTUEEEEEEE！すでに8分の1まで確率下がってるのに……。

そしてその攻防終了後にトリックルームは消え去った。適用時間が切れたのだ。

「クチート！ かえんほうしゃ！」

全てのチャージビームを防ぎ、トリックルームと言う枷も無くなり無防備なドミラーに灼熱を吐き突ける。いくら『たいねつ』と言えど一度直撃を受けかみくだく・かみなりのキバのダメージが堪った身体では耐えられなかったようだ。

「戻りなさいドミラー」

ドミラーをボールに戻す赤毛美少女。そして腰についた二つめ

のボールを手を取った。

「行きなさいブニャット」

虎猫ポケモン、ブニャット。進化前のニャルマーとギャップ有り過ぎな外見が何人ものコーディネーターやブリーダーを狂わせた……らしい。

実際は進化したらしたで愛嬌があるのでなんだかって可愛がられるポケモンである。ニャルマーとの共通点は体色と螺旋状の尻尾ぐらいである。それぐらい変化が激しい、体型とか体型とか顔つきとか。

「戻ってクチート」

一方黒髪美少女の方も消耗したクチートをボールに戻した。さあ、何を出す——？「サーナイト！」

抱擁ポケモンサーナイト。一部でカルト的人気があり、トレーナーにとっても忠実な頼れるポケモンだ。

「ブニャット“シャドークロー”！」

“サイコキネシス”で牽制！」

第二回戦開始。見掛けとは裏腹の猛スピードで切り付けるブニャットを、念導力でいなし接近を許さない。

サーナイトは特殊攻撃の撃ち合いに強いポケモン、ブニャットはフットワークを活かした奇襲を得意とするポケモン。ここまで行動範疇の違うポケモンが対峙するのがポケモンバトルであり、その面白さでもある。

「サーナイト！ “ 10まんボルト” ！」
「ブニャット “ とんぼがえり” ！」

電灼が完成系に至る前にブニャットの虫属性のタックルがサーナイトを吹き飛ばし、ブニャットはボールへ。代わりにズバットが出て来た。

「サーナイト！ そのまま攻撃！」

ズバットよりかは素早いサーナイトが完成した電撃を放つ、効果抜群。地面に落下したズバットを戻して赤毛美少女は再びブニャットを繰り出した。

「シャドークロー！」
「 “ きあいだま” ！」

身軽さできあいだまの軌道から消えたブニャットが、背後からサーナイトを切り裂く。

効果抜群。ヤバいねー。サーナイト物理防御は低いからなー、物理アタッカーとのタイマンはリフレク鬼火サポートがないと厳しいんでない？

「サーナイト！ もう少しだけ頑張って！」

「終わりよ！ シャドークロー！」

シャドークロー決まったー！ 勝者赤毛美少女！ …… とは行かないんだよなあ。

二度目のシャドークローはサーナイトを直撃する寸前に止められていた。赤い刃を持つこおろぎポケモン、コロトックによって。

そしてさらに上空から鋭い爪をした猛禽ポケモンムクホークが、水中からは青い身体のアヒルゴルダックが現れる。

餌付けするのに苦労したけどな！

美少女のピンチだ、助けないわけにはいかないだろう。

いや赤毛美少女も好みなんだが簡単に切り捨てられたし、それなら二ツト帽少女を助けて好感度を上げておこう。

「コロトック、シザークロス！」 「フニャー！？」

「ブニャット！」

コロトツクの刃で切り裂かれ弾き飛ばされるブニャット。

野生ポケモンが言うことを聞くはずがない？

チツチツチ……野生ポケモンと言っても強者には従うものさ！

俺？ あー、うん強者だよ、強いよ？ レベル100のサイドンの言う事効かせられるよ？

すみません、無理です。マルノームが俺の限界です。 ちなみにコロトツク達はレントラー同様この辺りの群れのリーダーである。餌付けにかかる金半端無いけど。

「ムクホーク！ “インファイト”！ ゴルダック“ハイドロポンプ”！」

足爪と翼を器用に使い連打を仕掛けるムクホーク。そしてムクホークの引き際を狙つての水流。なんてコンビネーションだ。

指示を出した俺も驚きだぜ。とあるコロボーシ・ムツクル・コダックを冗談半分に鍛えたり遊んだりしてたらさ……結構なレベルまで育っちゃって、進化しちゃって。今じゃ群れ率いてる、ポケモンってやつぱりすげー。

しかも正義感が他のポケモンより強いなのって、自身が弱かった頃を知ってるから今は良いリーダーをしているみたいだ。

ちなみにブニャットは……ありや、戦闘不能か。強過ぎだぞ、お前達。

「あたしの邪魔しないでよ！」

「じゃあ付き合ってくれ」

「意味わかんないわよ!？」

「結婚してくれ」

「意味分かるけど嫌に決まってるでしょ!」

やだやだ、人を顔で判断するとか。

「顔云々の前にあたしの邪魔をしたからよ!」

「邪魔をしなければ結婚してくれたんだな!？」

「なんでそうなるのよ!」

怒った美少女って良いよね!　グツと来る。

「それにあたしはアカギ様一筋よ!」

「俺はキミ一筋だ!」

「もうやだこいつ……」

大丈夫。キミの意見は尊重するぞ。

「マーキュリー覚えてなさいよ!　絶対に後悔する事になるんだから!」

「私は後悔なんかしていない!　間違ってるのはあなた達の方よ!」

「どっちでもいいから結婚してくれ」

「あなたは黙ってなさい!」

「静かにしてて」

「はい」

ムクホーク、コロトック、ゴルダックが慰める様に鳴いた。本当に良い奴等だ……群れのリーダーやってなきゃ手持ちに迎えたいぐらいだ。

「あたしはアカギ様の為に何でもする！ 邪魔をしたらただじゃ済まないからね！」

完全に俺を無視した赤毛美少女はユンゲラーを出し、“テレポーター”で消えた。

「ありがとうな、コロトック、ムクホーク、ゴルダック」

彼らの羽や頭を軽く撫で、群れに戻る様に指示を出す。ムクホークはトゲチックが麻痺させたムツクル達のリーダーだが、麻痺はそろそろ解けている頃合だから大丈夫だろう。

「あの」

ニット帽少女の声。赤毛美少女がいない今、話しかける対象は彼女のサーナイトか俺くらい。しかし手持ちであるサーナイトに他人行儀的な言い方はないだろうから、俺？

「近くのポケモンセンターまで案内して頂けませんか？」

▼▼▼

マサゴタウンポケモンセンター

「はい、お預かりします」

三つのボールが乗ったトレイをジョーイさんが受け取る。サーナイト、トゲチック、クチート之物だろう。ちなみにジョーイさんは来る度に口説こうとはするが、寸前で踏み止どまる。

理由はラッキー、初めて彼女を口説いた時の“かわらわり”は今でもトラウマだ。

「じゃ、俺帰るわ」

そう言い残しセンターを出る。さっきレントラーを捕獲した様に俺の仕事はポケモンの捕獲^{ゲット}である。ポケモンゲッターと呼んでくれ。あ、ポケモンハンターじゃないからな！

研究用や愛玩用のポケモンを捕獲するのであってポケモンなら野生・トレーナー問わず奪うポケモンハンターとは違うんだからね！
依頼ポケモンが稀少種なら依頼断ってるからね？ 稀少種に手を

出すと密猟だからジュンサーさんに捕まるし。

不定期なその仕事では食べていけないので今はナナカマド研究所で雇われ研究員をやっている。給料良いし俺インドア派だからピツタリなんだよね、この仕事。今回の様に捕獲の仕事もあるが、主な物はデータを纏めたり研究所のポケモンを世話したり。男ばかりだから華やかさが無いのが欠点なのだけね。

「ただいまー」

「お疲れです」

研究所に戻ると赤い帽子を被ったコウキ少年が迎えてくれた。

第三話 / 助手の少年

赤い帽子を被った少年、名をコウキ。

俺が雇われる前から、無償で研究所で働いている少年だ。真面目で愛想も良く作業能率も抜群。ナナカマド博士も無償で働いてくれる彼に御褒美代わりにポケモンを与えた。各地方の初心者用ポケモン、俗に言う御三家の一体ナエトルが彼のパートナーとなり、今はハヤシガメに進化。彼の他の手持ちピッピ・ユンゲラーに劣らずの実力にまで成長している。

「レントラー捕獲完了、明日の仕事は？」

「明日の仕事は特にないです」

なら明日は研究所で、このコウキと一緒にデータ整理とポケモン達の世話である。久々にゆっくりとした時間を過ごせそうだな。

「その代わりに……博士が先月クロガネ炭鉱博物館に預けた、『たてのカセキ』と『ずがいのカセキ』の再生が終わったとの連絡があったので受け取りに行つて下さい」

「転送して貰えないのか？」

「はい、稀少種である化石ポケモンを守る為の安全上措置だそうです」

タテトプスにズガイドス。たてのカセキとずがいのカセキから再生される、カセキポケモン達。その稀少性は高く、並のポケモン以

上に密猟者に狙われやすい。

それを見越しての措置なのだろう。しかしクロガネシティまでは……自転車で往復三日と行った所か。

「分かった。明朝、クロガネシティに向けて出発する」
「お願いします」

そして今度はパソコンに向かうコウキ少年。レントラーのデータを記録中だ。

「あ、ナナカマド博士が部屋に来て欲しいそうです」
「了解」

博士の私室はこの研究所に備え付けだ。扉にはお孫さんおじいちゃん特製と手作りカードが付けられていて、和む。
軽くノックして、中の博士に呼び掛ける。

「ナナカマド博士。カイトです」
「入りましたまえ」

コウもてのおじいさん、この人が雇い主のナナカマド博士である。
しかし、

「いつも思うのですが、このデカデカと張られたポスターはどうにかなりませんか」

「ならん」

「ですよー……」

皆に慕われるいい博士。ただ一つ困る事。部屋にコトブキテレビの音楽番組で活躍中、人気絶頂アイドルユニット、ミル＆マイのポスターが張られている事だ。博士曰く孫を見ているようで応援したくなるそうだ。

「それで御用は？」

「うむ。コウキ、ジュンと順調にポケモン図鑑を所有するトレーナーは決まっていたのだが……」

ジュンとはコウキのライバル的存在の少年で、ヒコザルと図鑑を受け取るなり旅に出てしまったせっかちな少年だ。トバリのジムリーダーに勝利してからは、ちよくちよくフタバタウンに帰って来てるみたいだが。

「三人目の図鑑を所有する者が決まらない……ですか」

「その通りだ。それならばお前にこの図鑑とポツチャマを託そうと思ってな」

シンオウ御三家、水担当のポツチャマ。売れ残りだ。コウキがナエトル、ジュンがヒコザルを選んだ為にただ一人研究所残り。近く

にいるナエトルはハヤシガメへ進化し、ジュンのヒコザルもモウカザルに進化したと聞く。自分だけ成長出来ない事に歯痒さを感じていたのは確かだろうな。

「わかりました。図鑑とポツチャマを受け取り——」
『だ、ダメだよ！ 何を言っただってここは通せない！』
『強情ですね。サーナイト、サイコネシスで拘束して下さい』
『うっ』

どつと湧く冷や汗。

「な、何の騒ぎだ？」
「出ておいで、ポツチャマ」
「チャマ！」

ボールから飛び出したペンギンポケモン。どうせなら今から襲来する少女から守って欲しいが、戦闘経験皆無なポツチャマでは無理だろう。

有無を問わずに開かれる扉。 トゲチックが舞い、クチートが構える。

シンジ湖で赤毛美少女と戦闘を繰り返していた、ニット帽の美少女。

「ポケモン図鑑を頂きに参りました」「なんだねキミは？ 名乗りもせずにポケモン図鑑を渡せとは」

「無礼なのは承知です。ポケモン図鑑を頂きたいのですが」

「図鑑は渡せんよ。たった今、このカイトに渡した所だ」

「ではそちらの方。図鑑を渡してはくれませんか？」

静かなる威圧。シンジ湖の時とは比べ物にならない程……黒い。怖いとか恐ろしいとかあるんだろうけど、視覚的に真っ黒に見えるのは気のせいだと思いたい。

「ポチャ！」

ペンギン空気読め。そう突っ込みたい。少女はポツチャマなど眼中にいれず博士と俺を威圧する。な、なんてプレッシャーだ！

相手は可愛い少女なのに背後に別の何か——ヨノワールやムウマージが見える気が。

「ポチャ！ ポツチャマ！」

抗議するポツチャマを上手く使い、このプレッシャーを逸らせないか——そうだ！

「ポツチャマ“バブルこうせん”！」

「チャマ！」

室内照明を反射する水色の泡弾。
それを途切れる事なく少女に向かって吐き出す。

「クチート、かえんほうしゃ」

クチートの第二口から発せられる火炎がバブルと衝突、相反する
水と火は混ざり合い水蒸気へ昇華する。
そう、水蒸気が煙幕代わりになる！

「ポチャポチャ！」

「来いポツチャマ！」

どんなもんだい！ と誇らしげなポツチャマを抱えて部屋の窓か
ら脱出。

ドンパチやって影響の無い所——マサゴ海岸に向かった。

▼▼▼

「逃がさない……サーナイト！ きあいだま！」

林中を逃げ回っていると言つのに、正確にこちらを狙うサーナイ

トのエネルギー弾。

そして研究所を出たお陰（？）か、被っていた猫が崩れ落ちた。

「ポツチャマ！」

「ポチャ！」

「あくび”だ！”

バブルこうせんとは違う、微睡みの気泡をばら蒔く。

「トゲチック、”しんぴのまもり”！」

「トゲエ！」

サーナイト、クチート、そしてトゲチックを淡い緑光が包む。

今放った紫色の気泡はそのオーラの前に割れて消し飛んでしまう。これでいよいよ不味くなって来た。向こうには接近戦も遠距離戦もこなせるクチート、高出力の特殊アタッカーサーナイト、補助と必中技を使いこなすトゲチックとかなり分が悪い。ポツチャマだけでどうにか出来る問題ではない。

「クチートかえんほうしゃ！」

「林中で炎技を使うな！ ポツチャマ”あまごい”だ！」

こんな時の為に、わざマシン使っていて良かったと本気で思う。ぽつぽつと振り始める雨。徐々に雨が勢いを増して、かえんほう

しやは鎮火。そしてこの雨を利用して距離を稼ぐ！

「ダアーシユッ！」

「ポーチャッ！」

インドア派だが敏捷性は並じゃない！ 体力と持久力ないけどな！

「ぜえ……ぜえ……」

「ポチャ……ポチャ……」

薫る潮風。マサゴ海岸に着いたー！

「ポチャー！」

そついや成り行きで連れて来たけどどうしよう？

「ポチャ？」

お前の事だお前の。

ポツチャマを連れていくにしても、あの少女に凶鑑を狙われている状況で連れて行くのは……。

「クチートかえんほうしゃ！　サーナイトきあいだま！　トゲチックでんげきは！」

ぎゃあ！　黒娘（くろこ）真つ黒な娘の意、主にオーラの意味で襲来！？

「ピッピマジカルリーフ！　ユンゲラーサイコネシス！　ハヤシガメ“エナジーボール”！」

灼熱・電撃・波動の三属性を遮る様に横から放たれた必中の木の葉、念導力の塊、生命エネルギーの弾丸。
全てがぶつかりあい相殺爆発。救世主降臨。

「絶対にキミに凶鑑は渡せないよ」

赤い帽子を被ったコウキ少年が、ニット帽少女にそう告げた。「凶鑑は素姓の分からない、怪しい人間が持つべき物じゃない」
「ですから無理を承知で言っているのです」

また猫被り始めた。

「なら」

不意に発言した俺に対し、コウキ少年とニット帽少女がこちらに視線を向ける。

「バトルで決めてくれないか？ コウキが勝てば図鑑は俺の。キミが勝てば図鑑はキミの、引き分けの場合はナナカマド博士に返却」

「カイトさん、それは」

「わかりました」

「彼女は了承した。コウキ、お前がやらないなら俺がポツチャマとやるけど？」

疲れるから嫌だけど。こう告げれば、コウキのトレーナー本能を刺激出来る事を俺は知っている。

「……わかりました」

「バトル形式は2対2のダブルバトル、審判は俺がやるっ」

「戻ってトゲチック」

ニット帽少女は、バトル用でないと言ったトゲチックをボールに戻した。

「休んでくれユンゲラー」

対するコウキは、相手の鋼タイプとエスパータイプの組み合わせで、ユンゲラーが力を発揮出来ないと思抜きボールに戻した。

「クチートとサーナイト対ピッピとハヤシガメのバトル……始め！」
「チャマ！」

ノリノリだなポツチャマ。

号令と同時に、ポケモン達に指示が飛ぶ。

「クチートはハヤシガメにかえんほうしゃ！ サーナイトはピッピにきあいだま！」

先手を取ったのはニット帽少女。どちらもピッピ・ハヤシガメの弱点を上手く突いている。

「ピッピ“ちいさくなる”！ ハヤシガメ“かげぶんしん”だ！」

ハヤシガメが何体もの残像を残しつつ、半円状に分身を広げる。それに目を奪われたサーナイトは、きあいだまを当てるべき対象である小さくなったピッピを見失った。

同時にクチートも翻弄され、かえんほうしゃは分身の一体を消すに止どまった。

「下よ、サーナイト！」
“コメットパンチ”だ！」

少女の指示よりも早く、サーナイトの真下を取った状態で元の大
きさに戻るピッピ。その右腕には神秘的なパワーが集中している。

「クチート！ ピッピに“かみなりのキバ”！」
「ハヤシガメ！ クチートに“ばかぢから”だ！」

放電する牙がピッピを妨害する前に、気合いのオーラを纏ったハ
ヤシガメのタツクルがクチートを撥ね飛ばす。

同時にピッピの拳が、サーナイトを真下から打ち上げた。

「はっばカッター」！ マジカルリーフ！」

手数に物を言わせ、さらに畳み掛ける。鋭利なはっばと不思議な
色の鋭い葉が混ざって、クチートとサーナイトを狙う。

「10まんボルトとかえんほうしゃで焼き払って！」

少女の指示が届き、クチート第二の口から業火が、サーナイトの
腕に高圧電流が纏わりつき、雷幕となって広がる。

「コメットパンチ！ エナジーボール！」
「かみくだく！ 10まんボルト！」

悪VS鋼。電気対草。どちらも技の属性的に言えばコウキが有利、しかし少女のクチートとサーナイトのパワーはそれを上回った。
コメットパンチをもっともせず、ピッピの身体に噛み付き、エナジーボールを紙の様に貫いて電撃がハヤシガメを直撃。

「クチートかえん——」
「そこまでだ！ ピッピ・ハヤシガメ戦闘不能！」

かえんほうしゃで追い討ちしようとした少女を止めるには、これしかなかった。

ハヤシガメ・ピッピのダメージは、見るからに大きい。そこにかえんほうしゃなど受けたら、命の危険性が出て来る。ハヤシガメにとって炎は致命的だ。

「カイトさん、僕はまだっ——」
「ポツチャマ、黙らせろ」
「ポチャー」
「あれ……なんか急に眠く……」

あくびで眠らせるとは、なかなか手際良くなって来たじゃないか。

「ほら、この図鑑はキミのものだ」
「当然よ」

だから猫が崩れるの早いつて。

「ポチャ！」

「ん？ どうしたんだポツチャマ」

「ポチャ！ ポチャポチャ！」

「ハハハ！ 何言ってるか全然分かんねーや！」

ドスッ

……“は……たく”……。

「ポーチャ！ ポツチャマ！」

「どうしたの？」

「チャマ！」

「ク、クチイ？」

「チャマ」

「クチクチ」

「……あなた、私と一緒に来たいの？」

「ポチャ！」

「ダメだ！」

コウキ復活。

「約束だから図鑑はキミにあげる……けどポツチャマは信頼を置くトレーナーじゃないと——」

コウキがバブルこうせんを受けて吹っ飛んだ。

「ポチャポーチャ！」

「い、いくらポツチャマがキミに懐いたって行かせるわけには——」

「はいはい、そこまでだ。俺達トレーナーはポケモンの意志を尊重するものだろ？」

「で、でも——」

「ポツチャマも彼女の元でなら成長出来ると思ったんだよ。お前のナエトルやジュンのヒコザルのようにな」

「……………」

伊達にコウキより長く生きてない。コウキに足りないのは経験だな、こういう事もあるんだと割り切れるようにならないと。

「ポツチャマ。辛い事もあるだろうが……お前が選んだ道だ、頑張れよ」

「ポチャ！」

よしよし。ポツチャマの頭を軽く撫でてやると、別れの饞別の様につついてきた。コウキの脛にも同様の動作をし（痛かっただろうな、涙滲んでるし）、彼女の足下へ行った。

「ポツチャマを頼むよ」

「……手持ちポケモンには優しくします」

他のポケモンはどうなんだろう。まさか暴力を振るうわけではないだろうが。

「行きますよ、サーナイト、クチート……ポツチャマ」

「サア」

「クチイ」

「チャマ！」

さーて俺はどうやってナナカマド博士を誤魔化そうかねー……コウキは衝撃が大きくて役に立ちそうにないし。

ま、ポツチャマの幸せそうな顔を見れたんだ。よしとするか。

▼▼▼

ナナカマド研究所（ナナカマド博士の私室）

帰還した俺がポケモン図鑑を持たず、ポツチャマを連れていない理由を博士は一発で見抜いた。まだ話してないのに。

やはりこの老人、ただ者ではない。

「うむ。ヒコザルとポツチャマも旅に出たのだ、コウキお前も旅に出て見てはどうだ？」

「はい……ハヤシガメ達と一緒に、シンオウ地方の全てを自分の目で見て、耳で聞いて、手で感じてみたいと思いました……」

ガチガチの研究員タイプの少年がここまで考えを変えたのって……
…やっぱ俺のせい？

「うむ、頼むぞ。お前がそのポケモン図鑑を完成させてくれる事に期待しているぞ！」

「はいっ！」

コウキが旅立つならコウキの後任俺じゃね？ 給料アップ？

あー、でも明日から出張扱いでクロガネシティまで行かないといけないんだった。仕方ない、今日は素直に家に戻って準備をしよう……。

「カイト」

「はい？」

「コウキを頼むぞ」

……え？



「行きましょう、カイトさん」
「……………はあ」

元気一杯なコウキと対照的に、俺のテンションがた落ち。コウキが各道路や洞窟に生息するポケモンを調べたい！なんて言うから自転車で行けなくなった。徒歩だとコトブキシティでの宿泊込みで……えーと、一週間はかかるか。
好奇心旺盛なのは悪い事ではないが、もう少しTPOを考えてだな。

「あ、ビーダルですよ！ この辺じゃ進化系はなかなかいません！」

本当にどうなることやら。

第四話／人が集う幸せの町（前書き）

注意：本文中にポケモンの一人称心理描写部分が存在します。嫌悪感を抱かれる方はここでお戻り下さい。

第四話／人が集う幸せの町

「意外と早くコトブキシティに着いたな」

「そろそろお昼の時間ですから、ポケモンセンターに向かいましよう」

このペースなら自転車程の早さでなくても、直ぐに着くかもしれない。

「あ、ジョーイさんを口説くのは辞めて下さいね」

ちい！ 先手打たれた！

「じゃ、行くか」

「くれぐれも口説かないで下さいね」

「分かったよ！」

どっちが保護者だか分かりやしない。

▼▼▼

コトブキシティポケモンセンター

「ようこそポケモンセンターへ」

「結婚して下さいブルア！」

コ、コメットパンチ……！

「ピッピ、ご苦労様。この子達の回復お願いします」

「はい、承りました」

コウキはピッピとハヤシガメ、ユンゲラーのボールを預けて、俺の足を持って食堂方向に引き摺って行く。

おい、やめろ！ 熱い！ 摩擦で禿げる！

「少し禿げても大して変わりません」

こいつ……ここまで毒舌だったか？

▼▼▼

ポケモンセンター（食堂）

「ふー、食べた食べた」

「それじゃ、僕はピッピ達を受け取って来ます」

「ヘーイ」

「ヘイガニの鳴き真似はもう少し高く……」

「今はボケてねえよ!？」

「あはは、じゃあ行つて来ます」

堅物少年が随分軽口叩く様になつたな……いや、元はこんな感じで、研究所での姿は自分を押さえ付けていたのかもしれない。
ナナカマド博士と言う、コウキが尊敬する人物の間近で働くのだから。

さて、俺は借りた部屋に戻つて昼寝でもするかね。

▼▼▼

ポケモンセンター宿泊施設の一室

「……zzz」

『止めて下さい!』

『動くんじゃないぞお前等! 動いたら俺のスピアーがこいつに風穴を開けるぞ!』

……何事？

『テメエらのポケモン全部ボールに入れて寄越しやがれ！　さもな
いと……！』

『私はどうなつても構いません！』

俺が寝てる間に何があつたんだ？

『そこのガキイ！　今度妙な動き見せたら、今度こそこの女は串刺
しだからな！』

『くっ……！』

何々、コウキも動けないの？

部屋からそつと出て廊下を匍匐前進、階段から伺うとスキンヘッ
ズの男がスパアーでジョーイさんを人質に取っている構図。そして
それを囲む集団——コウキを含むトレーナー達だが、ジョーイさん
と言つ人質が居るせいで誰も手が出せないようだ。

馬鹿じゃないだろうか？　直にジュンサーさんも来るだろうに。

『おいコラ！　聞こえてるか警察共！　何かしやがったら刺し殺す
からな！』

ジュンサーさんも手が出せないのか。てか、コウキ絶対頭から俺
の事抜け落ちてるよな？

誰一人、俺の事を『居ない』と認識している。……警察ならさ、レポートで二階から忍び込めるだろ。指揮官がダメなんだな、きつと。

(……ルカ！)

腰のクイックボールを展開し、ミカルゲを解放する。命じるのはただ一言。

(スピアーに……かげうちだ)

ドスッ

命じてから一秒も経ず、スピアーの影から黒槍が伸びて突き刺さっていた。耐久力の低いスピアーは一撃で瀕死。

「な、なんだあ！？ どうしたスピアー！？」

「今だ！ 伸し掛かれハヤシガメ！」

スピアーが倒れたのをキツカケにコウキがボールを展開。ハヤシガメが飛び掛かり、男の上に覆い被さる。

それに触発され、他のトレーナー達も自分のポケモンをボールから出す。フローゼル、ハブネーク、ブーバー、ゴーリキー、カクレ

オンなど。

「全員突撃！」

さらにウインディ、アリアドスなどが扉からなだれ込んで来て男は呆気なく御用となった。

「戻れ、ルカ」

クイックボールにミカルゲを戻す。寝足りない。それに出て行ったら何か聞かれそうだ。うん、部屋ですっと寝ていて気付かなかった事にしよう。「腹減ったー……」

結局夕食の時間まで寝てしまったのだが、コウキが帰って来た様子がない。少年トレーナーお手柄とか言う感じで取材されたり。

「食堂に行くかー」

そう思い立ち、扉を開けた瞬間だった。

「カイトさん」

「うおったあ！」

視界一杯にコウキが広がり、仰天した俺は飛び退いた勢いでベツトの支柱に頭を強打。

痛い！ 目から星が出る程な！

「ったー……で何だ、夕飯なら今摂りに行こうかと」

「いえ、そうじゃなくて……ありがとございました」

……俺、コウキに何かしてやったっけ？ 誕生日に何か渡した記憶はないし、研究所では逆にこっちが感謝する程世話になっている。年下に世話される俺も俺だが。

「……？」

「何でそんな本気で分からないような顔をしているんですか……」

だって本当に分からないから。感謝されるような事したっけかな……。

「さっきのスピーアですよ！」

「俺、ずっとこの部屋で寝てただけだ」

「で、でも！ ゴーストタイプでかげうちが使えるようなポケモンは——」

「ムウマージやカクレオンでもかげうちは使えるさ」

「で、でも……」

カクレオンを持つトレーナーが居た事を、コウキは知っている。
だからこそ、この意見に反論できない。

「それにな、コウキ。俺は非常に腹が減っている。夕食を摂らせて欲しいんだが」

「ふえ？ あ、はい、確かにそろそろ夕食の時間ですね！ 行きましょうか」

▼▼▼

ポケモンセンター（食堂）

「なあ」

「はい」

「なんだこの状況」

「なんでしょうね」

コウキの頭上にルリリ。

「カイトさんの頭上にはププリンですか」

食堂に、通称ベイビィポケモンと呼ばれる種類のポケモンが至る所で遊びまわっていた。

ブビィ、エレキッド、ムチュール、ピィ。

ソーナノ、ピンク。そして今俺の頭上のプリン、コウキの頭上のルリリの計8匹。

「取りあえず捕まえるか」

「そうですね」

頭のルリリをヒョイと降ろし俺に渡すコウキ。

10分後

「おいコウキ。むしろ状況が悪くなってないか」

「僕は大丈夫ですけど」

「ベイビィポケモン達に包まれてる俺はどうなる」

頭やら腕やらにポヨポヨする物が当たって、嬉しく思わない日が来るとは予想していなかった。

「すみませーん！」

「大丈夫ですかー！」

女の子の二人組だ。片方が黒のオカッパ、もう片方が茶髪のツインテ。明らかに年下っぽいので範囲外。

コウキに対応を任せる。

「この子達、貴女達のポケモンですか？」

「は、はい！ 少し目を離れた内にいなくなっちゃって……」

「ブイッ」

「あがががが」

噛み付くな！ 俺は噛む玩具じゃねえ！

「あれ？ この子……」

「ブイ？」

「誰のポケモンですか？」

「え、貴女達のポケモンじゃ？」

「私はププリン、ブビィ、ピンプク、ソーナノのトレーナーです。ほら、みんな戻りなさい」

四つのボールを手にブビィ達をボールに戻すオカッパ少女。

「エレキッド、ムチュール、ピィ、ルリリはあたしのです。戻りなさい、もう遊びの時間は終わりよ？」

またまた四つのボールを手に取りルリリ達をボールに戻す。わら

わらと騒がしかった俺の周りも随分静かになった。

「……ってイーブイ!?!」

「マジで!?!」

確かに頭がほんのりと暖かい。毛皮的な意味で。

「誰のだ?」

「その子は野生のイーブイですよ」

「よしコウキ! 捕獲しろ! 図鑑にまだイーブイは登録されていないはずだ!」

「はいっ!」

スパパーン

二人同時に張り倒された。ジョーイさんにハリセンで。

「しっかり聞いて下さい。確かにその子は野生ですが、ウチの大事な一員なんです」

「ブイー」

俺の頭を土台に、ジョーイさんの胸に飛び込んだイーブイ。難なくキャッチして、言葉を続けた。

「怪我をしたポケモンを見つけたり、救護を手伝ってくれたり、技の“ねがいごと”で危ない状況のポケモンを救ってくれた事もあるんです」

へー。あのイーブイ、ねがいごとが使えるのか。

「でもその子野生なんですよね？ その二人みたいに、ゲットしようとしたトレーナーはいなかったんですか？」

オカッパ少女の疑問。このシンオウの過酷な条件において、イーブイが生息する場所はない。

風の噂で聞いた、四天王二人がエーフィとブースターを使っている事を耳にした程度である。

「……いたわ。でも、絶対にこの子はゲットだけはされないの。そういう欲望を持つトレーナーには敏感なのね。そういったトレーナーの前には、……絶対に姿を見せないの」「ゲット欲望を持つトレーナーその1!」

「その2です!」

スパパーン

またハリセンが閃いた。地味に痛いぜ。コウキは当り所が悪かったのか、頭を押さえている。帽子被ってる分、俺よりダメージが少ないはずだが。

「あなたたち本気でゲットする気ないわね？」

「ゲットできるならしたい……が、別の地方に足を運べばどうにもなる問題だし」

頭を押さえているコウキが、「ちよっ……僕、別の地方まで行く体力は……」と呟いていたが無視する事にした。

ジョウトのコガネシテイのマサキさんに事情を話せば、一匹は譲ってくれるしな。

「あなたたちにそういった欲望がないからイーブイは戯れたのね」

戯れて頭に噛み付くのはどうかと思う。たくっ、この地方に来て頭を噛み付かれるのは二回目だぜ。一回目はトゲチックと遭遇した時のズバット。

「まあそれはそれとして夕食食べよう、コウキ」
「そうですね」

早く夕食を摂らねば限界近い腹の虫が胃を喰い破りそうだ。

▼▼▼

「ご馳走さまでした」

「ご馳走さまー」

「ブイー」

何故いる。

「ブイツ」

「頭に乗るなー」

「怒る気ないですね、カイトさん」

噛み付かれさえしなければな。

俺はポケモンと美女美少女には優しいんだ。

「ブイー」

ペシッペシッと尻尾が後頭部を軽く打つ。……どうして？

「遊んで欲しいみたいです」

「遊び道具なんて——」

いや、あれがあつたか。

「それー取ってこーい」

「ブイー」

「ああ！ それきちようなホネじゃないですか！」

まあ換金アイテムだけど、暇潰しにはなりそうだし。

「ちよつといい？」

「あれ、ジョーイさん」

「イーブイは隣りの子に任せて、あなただけ来て貰える？」

夜のお誘いキター（。。。）……と思つたが、違うようだ。とても深刻そうである。

「いや、俺がイーブイの面倒見てるんでコウキに——」

「ラッキー、連れて来て」

「ラッキー！」

無理やりかい！

▼▼▼

「仮にも公務員が拉致とかいけないと思う」

「任意同行です」

「任意か。ならば帰る」

「かわら——」

「話を聞かせて下さい」

この町のジョーイさんをもう決して口説くまい。

「あの子……臆病な性格だね。私やラッキー以外に懐くのは珍しいの」

コウキすげー。

あれか？ 人畜無害そうな顔してるから？

「全然臆病には見えない気が」

俺に噛み付いたし。

「言ったでしょ？ 余り人前に姿を見せないって」

「でも、それはゲットしようとする奴限定じゃ……」

「根が臆病だから……少しでも悪意を感じれば絶対に姿を見せないわ」

コウキはともかく、俺はいろいろ悪意の塊なのに。

「だから——あの子の事を傷つけないようにね」

▼▼▼

「ブイ」
「ぐふっ」

出合い頭に“たいあたり”はないだろう、たいあたりは。

「カイトさん、明日の早朝に発つ予定です。そろそろ部屋に戻りましょう」

「だな」
「ブイ」

付いて来るイーブイ。

「おい、部屋の前まで着いて来ちゃったぞ」
「自分で何とかして下さい」

最近コウキが冷たいっ！

「ブイ〜？」

「お前はこっち、俺こっち」

「ブイブイツ」

部屋の中が俺、部屋の外がイーブイと言う事を示したのだが、拒否された。

「ブイ〜……」

「コウキ」

「なんですか？」

「眠いからイーブイ部屋に入れるぞ」

「理由が適当ですが構いませんよ」

「そうか」

手持ちでないのに、イーブイが俺を慕う理由はなんだろう。慕われる理由が全くないのだ。今日が初対面だし。

「ブーイ」

「ま、細かい事はいいか……寝る」

ベッドに入り就寝。枕元でイーブイが丸くなったのを確認し目を

閉じた。「ブイ」

ペシッペシッと叩かれ、起床。外敵を警戒する為に、早起きなのかもしれない。

ただ――

「俺の頬に齒形が付いてるんだがねー、イーブイさんよ」
「ブイ」

「開き直った！ ポケモンで開き直った奴初めて見た！」

本当に臆病な性格なのか疑いたくなる。実はやんちゃだったりするんじゃないだろうか。

「カイトさん……ナナカマド博士を口説かないで……zzzz」
「口説かねえ！ 天地がひっくり返っても男は口説かねえよ！」

なんて恐ろしい夢を見ているんだ！

「取りあえずコウキ起こすか……」

これ以上俺とナナカマド博士の×××な光景を寝言で語られては、気分が悪くなる。

▼▼▼

「痛つつ……殴って起こさなくてもいいじゃないですか」

「水か毒で起こしてやつても良かったんだが？」

「すみません、僕が悪かったです」

コウキが頭を押さえている。硬い拳の一撃で悪夢から覚醒させて
やったんだ、感謝されても足りないくらいだ。

「それじゃ、朝食を摂りに行きましょうか」

「だな」

「ブイ」

▼▼▼

ポケモンセンター（食堂）

例の如く朝食を摂り。イーブイと遊びながら少し時間を潰し、出
発の時刻となった。

が、しかし――

「ブイ」

「あだだだだだ」

爪を立てるな！ 痛いから！

「はーなーれーろー」

「ブーイー」

「あだだだだだだ」

さっきからこの繰り返しである。全く離れようとしない。

「……よしーブイ、このきちょうなホネを取ってこーい！」
「ブーイー！」

何か動く物に刺激されるんだろうか、俺の頭から飛び降りきちょうなホネを取りにダッシュ。

「よし！ 今だコウキ！」
「は、はい！」

これ以上時間を食うと、今日中にクロガネシティに着けないからな……あばよ、イーブイ。



ホネを啜えて戻った場所に、あの人はいなかった。

してやられた！ 頭はそう理解して直ぐに追おうとするが扉が開かない。私の身体の大きさでは人間達の利用する『じどうどあ』が反応しないらしい。

扉を引つ搔いても、切なくなつて鳴いても、誰も答えてくれない。弱い私を守ってくれる——そんな感じがしたから、あの人の側は安心出来た。臆病な私でも、全然怖く感じなかった。

「イーブイ……」

この『ぽけもんせんたあ』と言う場所に、いつも居るピンクの人の隣りのラッキーは、私にとっても優しくしてくれたから大好きだ。

ピンクの人も私に優しいから大好き、だからお願い。

開けて！ 開けて！ あの人を追いかけるの！

「ラキッ」

ラッキーはダメだと言った。野生から離れ過ぎた私では、野生ポケモンに太刀打ち出来ない。

「イーブイ、あなたは彼についていけないの。彼はポケモン捕獲を生業とする……あなたも捕まえられたら……怪しい研究所で生体実験されるかもしれない」

せ、生体実験……。薬漬けにされたり、生きたまま身体の一部を切り取られたり、×××な事されたり。こ、怖い……。。

「だから、彼の事は諦めましょう？」

「……ブイ」

私はただうなだれるしかなかった……。



「ジョーイさん、今頃イーブイ説得中だろうなー」

「そつえば、イーブイを諦めさせる為にどんな捏造を？」

「俺がポケモンハンターで、残虐非道な科学者にポケモンを売っている話をするように言っておいた」

「……絶対に諦めますけど、良かったんですか？　かなり不名誉な事です」

「所詮嘘だしな、俺の経歴を洗えばそんな事影も形もないし」

あのイーブイのしつこさは並で無いから、怯え竦ませるぐらいの話じゃないと効果ないし。

「さ、クロガネゲートを抜けてさっさと行こうぜ」
「はい！」

第五話／エネルギー漲る場所

クロガネゲートを抜け視界の端に広がるズリ山の数々、ここクロガネシティは石炭の生産量が群を抜いて多い町である。

「まずはポケモンセンターに向かいましょう」
「だな」

クロガネゲート内でコウキがバトルを挑まれたりしたので、コウキのポケモン達は結構なダメージを受けてしまった。まずはポケモンセンターに行くのが道理だろう。

「ジョーイさんを口説かないで下さいね」

フツ……俺が約束を守るとでも？

「もし口説いた場合は、ナナカマド博士に全てを話して減給です」

給料＞彼女。これ鉄則。何事も金が無いと始まらない。ここはコウキに従うしかないようだ。

▼▼▼

クロガネシティポケモンセンター

「ようこそポケモンセンターへ」

毎回疑問に思うのだが、ジョーイさんのこの台詞はポケモン協会によって決められた、定型文なのだろうか。全員が全員同じ言い方・声量で話す所が、何故か恐ろしい。双子とか親戚とかの域を超えている統一具合だ。

「ポケモン達をお願いします」

「はい、お預かり致します」

むむ……このジョーイさんは、コトブキシティのジョーイさんよりスカート丈が1ミリ短い！ って何で俺、こんな無駄な観察眼持ってるんだろ……。

「では、二泊の御予定ですね？」

「はい」

二泊？ ポケモン受け取って、コウキのユンゲラーのテレポートで帰る手筈じゃ？

「コウキ、何で二泊もする必要があるんだ？」

「クロガネシティ北部に出現するワンリキーとポニータが未捕獲なので……」

この後ポケモンを受け取りに行つてからと明日、一日半あればどちらも捕獲出来る自信があるのだろつ。さすがはナナカマド博士の右腕（他称）である。

「じゃ、宿泊の手筈も整えたし、博物館に行こうぜ」
「はい」



クロガネ炭鉱博物館

「ナナカマド博士の助手をしている方々ですね？ 話は伺っており
ます」

受付カウンターに置かれる、二つのモンスターボール。中にはずがいのカセキとたてのカセキから甦ったポケモン、ズガイドスとタテトプスが入っている。

これをマサゴタウンまで持ち帰るのか……安全上の措置とは言え面倒だな。

「じゃあ——ユンゲラー、お願い！」

「それでいいのかよ!？」

安全上の措置は!？　ここまで来た意味は!？

ユンゲラーにモンスターボールを持たせ、レポートさせるコウキ。

数分後、『御苦労』とナナカマド博士の筆跡で書かれた紙を持って、ユンゲラーが戻って来た。安全上の措置って……俺達が受け取るまでかよ。

「ありがとうございます、ユンゲラー。僕はこれから捕獲に向かいますけど、カイトさんはどうします?」

「確かに何かしていないと暇だな……」

コウキの見立てでは捕獲は明日中まで掛かる、つまり丸一日暇を潰さなければならない。

「それなら——クロガネジムに挑戦してみたらどうですか?」

ジム戦——ハウエン地方で手に入れたストーンバッジやナックルバッジがあるから別に……と思ったんだが、他に暇潰しになりそう

な事もない。これは当然の選択だ。

「挑戦……してみるか。クロガネジムに」

▼▼▼

クロガネシティクロガネジム

『そこできあいだまです!』

ドカアアアアン

目茶苦茶嫌な予感……。

『イワーク戦闘不能! よって勝者

「ジムに挑戦の方ですか?」です』

黒服のお兄さん……やっぱりシンオウのジムにも居るんだな。

ジョーイさんやジュンサーさん同様、何故全てのジムでこうも瓜二つなのだろう。

「あ、はい。ジム戦希望です」

「ではここにお名前と希望の日時を御記入下さい」

黒服さん、アドバイスもすればジム戦の受付もこなしている。ジムの中での地位がどの位置にあるのか気になるが、今回はそれを探る為に来た訳ではない。

【名前……マサゴタウンのカイト】

【希望日時……明朝九時】

こんな所でいいだろうか。

「はい、承りました。では明日九時までに起こしてください」

さて、今の内に逃げ——！？

「久しぶりですね」

そう久しぶりでもない気がする、というか会いたくなかったよ畜生！

サーナイトを連れたニット帽少女が俺の肩を掴んでいた。「奇遇

ですね、ポケモンジムで貴方と会っなんて」

俺は会いたくなかったがな！

美少女でも年下且つキツイ性格且つ腹黒、つまり内面で外面とバ
ランスが取れた彼女の相手はどうも苦手だ。彼女には『黙ってれば
可愛い』と言う言葉が一番相応しい気がする。

「あ、ああ……本当に奇遇だな……」

ヤバい！ 世間話も言えないぐらい焦って来た！

「いやー……負けてしまったよ。あれ、キミは？」

ニット帽少女の後ろから、真っ赤な作業用ヘルメットを被った作
業服の青年が現れた。

眼鏡を掛けた爽やか系美男子……言つてて切なくなつて来た。

俺に視線を向けて首を傾げている事から、質問は俺に投げ掛けら
れた物。が、受付をしてくれた黒服さんが代わりに答えてくれた。

「お疲れ様です、リーダー。彼も挑戦者ですよ、マサゴタウンのカ
イトくんです」

「最近挑戦者が増えてるね……初めまして、僕はヒョウタ。このク
ロガネジムのリーダーをやっている。後、炭鉱の作業員の総督でも
あるよ」

「マサゴタウンのカイトです。よろしく願いします、ヒョウタさん」

握手を躲す。が、何故かヒョウタさんは俺の腕を執拗に強く握りしめてくる。

「キミは彼女とどういう関係かな？」

このままでは痛いだけなので、相手よりも強く握り返す。

「あなたは……【触れぬ紳士】（意識：ロリコン）か？」

「そんなものと一緒にしないで欲しいね。僕は【ロッククライマー】（意識：貧乳フェチ）さ」

納得。

「俺は【崖】（意識：貧乳）には興味ありません。それに彼女は――単なる知人です」

ヒョウタさんの握る力が弱まった。分かって貰えたみたいだ。

「さて、ジム戦だったね。明日は忙しくなりそうだから、今からじ

「やダメかな？」

「あ、大丈夫です」

明日はコウキの捕獲に付き合えば暇潰しになるだろう。

「それじゃあこっちへ。対戦ルールは使用ポケモン2体による入れ替え制でいいかな？」

「はい」

「あの、私は見学をしてもよろしいでしょうか？」

「もちろん、いいよ」

弱みを握ろうとしているのか、正直見なくても良いんじゃないか、と言いたくなる。尤も、口に出したら彼女のクチートによる制裁が口を開けて待っているので、言わないけどな。

バトルフィールドにはまだ新しいクチートの歯形や、サーナイトの10万ボルトで融解したような痕跡が残っていた。

フィールドは岩、ヒョウタさんのエキスパートタイプに合わせての選択だろう。

「フィールドチェンジだ！ 岩のフィールドをノーマルフィールドに戻してくれ！」

「はい、ヒョウタさん！」

ジムにはエキスパートタイプの戦い易い……地面ならば砂、草なら草原と言った選択制のフィールドの他ノーマルフィールドも設置されている。

多い所で五種、少ない所でも三種はある為、連戦でも何ら問題はない。

「リーダー！ リーダーのポケモン達の回復も終わりました！」
「ありがとう！」

貧乳フェチのくせに人望あるなあ……と感心。人望が無ければジムリーダーなど務まらないだろうが。

ヒョウタさんがボールを受け取り、リーダーサイドへ入ったので俺もチャレンジャーサイドへ。

「ただいまより、ジムリーダーヒョウタ対マサゴタウンのカイトによりまず、バッジを賭けた公式戦を始めます。使用ポケモンは2体、道具の使用は禁止、但しポケモンに持たせる事は可能です！ 先攻はジムリーダー！」

ヒョウタさんがモンスターボールを中空に放った。中から現れたのは、頭部と背面が青色、他は濃い灰色と言う体色の頭突きポケモンズガイドスだった。

「さあ、キミの一番手は何かな？」「ルカ！」

緩い弧を描くモンスターボールから飛び出したのは、頼れる相棒ミカルゲ。弱点が無い事は、どんな場面においても絶大な安定性を発揮する。

但し、特性きもったまor技“みやぶる”“かぎわける”“ミラクルアイ”除く。

「へえ、ミカルゲか。珍しいポケモンを使っただね」

「そっちこそ、ズガイドスなんて珍しいポケモンを良く持ってますね」

「ハハッ発掘した化石を再生したら……ね」

試合前に軽口の応酬。一見無意味に見えてもこれは心理戦、一つでも多くの情報を引き出すのが狙い。

「試合開始！」

ズガイドスの脅威は、その攻撃力にある。防御面は限り無く脆いが。

「キミのミカルゲにはズガイドスの得意技、頭突き系の二つが無効にされてしまう」

“ずつき”と“しねんのずつき”の事だろう。

「だから……今回はこの技で行くよ！　ズガイドス“かみくだく”！」

ズガイドスが大きく口を開けて、ルカに肉薄。だが、その行動は遅い。

「ルカ“ふいうち”！」

ドカツ

ズガイドスの背後、死角である中空から放たれた紫弾を受け吹き飛ばされる。

「ふいうち……キミがミカルゲを使っている時点で警戒するべきだったな……」

ちなみにミカルゲのタイプ悪と一致しているので、先制技としては高威力の部類となっている。

「ズガイドス戦闘不能！」

「ルカ、よくやった！」

「ミョーン！」

ヒョウタさんがズガイドスをボールに戻す。切り札に据えて居るズガイドスが一撃だとは、予想していなかった事態だろう。

「いけっイワーク！」

岩がいくつも連なった体の岩蛇ポケモン、イワーク。防御面は優秀で、ズガイドスとは違い簡単には打ち破れない、手強い相手だ。

「今度は補助技で行こうかな……イワーク“ロックカット”！」

イワークの身体が少しずつ丸みを帯びる。ロックカットは“こうそくいどう”と同じく、素早さを一気に引き上げる補助技だ。先のふいうちを見て警戒したのだろう。

「かげうちだ」

ドスッ

イワークの真下から伸びた影の槍が、イワークの堅い身体に突き刺さった。

刺さった場所にヒビが入る程の大ダメージを負ったイワークは、その場に倒れ伏した。

「イ、イワーク戦闘不能！」

「馬鹿な……僕のイワークがふいうちよりも弱い先制技一発で倒れるなんて……！？」

ヒヨウタさんの視線は、キラーンと照明を反射したレンズに注がれていた。

「『ピントレンズ』とはやられたなあ……急所を突かれればさすがに防御が高くて大ダメージは防げないわけか」
「そうということです」

まさかピントレンズを持たただけで、急所を突くとは予想していなかったが。

「運も実力の内……だね。マサゴタウンのカイト、このヒヨウタを倒した実力を認め、このコールバッジを授けます」

コールバッジ、ゲットだな。「戻れ、ルカ」
「ミヨーン」

コールバッジをバッジケースに納め、ル力を納めたクイックボ―ルを腰に戻す。

「なかなかお強いですね」

出た！ 例のニット帽少女！

「ま、ハウエン地方でもジム戦はやったし」

「ピントレンズのように、運に頼る様な戦い方は余り好ましくありません。急所を狙わずとも、圧倒的な力で押し伏せればいいだけです」

それをやるのはキミぐらいだけだな！ ヒョウタさんもきあいだまを覚えたサーナイトと対戦するとは、想定外だったはず。いやジムリーダーなのだから、予想程度はしていたのかも。

「じゃ、俺はこれで」

「ええ、また会いましょう」

出来ればもう会いたくないけどな！

▼▼▼

ポケモンセンター（ロビー）

「ただいま」

「お帰りなさい、ジム戦の予約は済みましたか？」

「いや——勝って来た」

「え？」

呆けた顔をしているので、バッジケースを開けて見せつける。

「ほら、コールバッジ」

「ええ！？ い、一時間足らずでヒョウタさんに勝ったんですか！？」

「ピントレンズのお陰でな」

少女に会った事も含め、大雑把にジム戦の内容を説明。一部脚色（ノードメ勝利だがズガイドスの“かみくだく”とイワークの“いわおとし”を喰らったの反撃、と言う事にしておいた。

「そうですか……彼女と会ったんですね」

「どうやらヒョウタさんを瞬殺したみたいだ」

「瞬殺！？」

今更驚く事か。コウキを赤子の手を捻るぐらいに打ちのめした彼女ならば、それぐらい当然だろうに。それに——

「あれはきつと人間じゃない」

「……………」

「カ、カイトさん……………」

「俺の見立てなら前世はギャラドス、もしくはバンギラスだな。絶
対」

ブチッ

太いロープが断ち切れた様な音が。

「人間じゃない……………しかも前世がギャラドスですって……………」

膨大な殺気を感じて、後ろを振り向く。先程会ったばかりの少女
と再会。しかし彼女は大魔王へ変貌していた。

「コウキ！ 俺の盾になれ！」

「無茶言わないで下さいよ！？」

無茶なのか……………いや、確かに彼女の攻撃に対する盾となる勇氣は
莫大に必要なだ。

とゆーか、クチートとサーナイトまで距離を取っているんだが。
少女の手持ちである彼女達には、少女の恐ろしさが心身共に刻み込

まれているのだろう。

「死になさい！ クチートかみくだく！」

「噛み砕かないで！ 逝く！ 逝つてしまふ！」

クチートの顎力は並じゃない。挟まれたら、技名通り噛み砕かれてしまふ！

「ポケモンセンターではお静かにお願いします」

ジョーイさんの注意のお陰で、クチートと少女の注意が逸れた！

「よしコウキ！ 夜の方がポニータの火も目立つから、捕まえに行こうぜ！」

「えっでもまだ夕食が——」

「そんなの後回しだ！ 行くぞ！」

「あつ待ちなさい！」

待てと言われて待つものか！

ポニータが居るのは確か——クロガネ北部の草むらだったな。

▼▼▼

「ピッピ、うたう！」

ピッピの健やかな歌声に睡魔に誘われ、足を折るポニータ。

「今だ！ モンスターボール！」

眠ってしまったポニータにカプセルボールがぶつかり、内に封じる。

眠っているのは抵抗も出来ずに、アッサリとポニータは捕獲された。

「ポニータのデータセーブ完了です」

「ワンリキーも捕まえたし、戻ろうぜ」

「はい。あ、用事は全て済みましたから、明朝にクロガネシティを発ちましょう」

「当然」

何の為に捕獲に付き合い、ジム戦も済ませたか。あのニット帽少女がいる、この町を少しでも早く出る為である。

「それにしてもお腹減りましたね……」

「夕食摂らないで来たからな……」

このままでは餓死……はないかもしれないが、行き倒れしそうだ。
さっさとポケモンセンターに戻って、遅い夕食を摂るとしよう。



ポケモンセンター（食堂）

「さて、腹も一杯になったし……シャワー浴びて寝るか」
「明日も早いですし」

ガシッ

「少しこちらに来て頂けますか？」

般若の形相をした少女に肩を掴まれ、俺は死を覚悟した。昨日
はコウキが咄嗟にレポートを使用したお陰で、ギリギリ彼女から
逃れる事が出来た。

さすがに部屋の特定やドアぶち破りはなかったので、彼女にも一
片の常識が残っていたと言うことか。

「コウキ、荷物は纏めたな？」

「はい」

「それじゃあ朝食を摂って、出立しようぜ」

「あ、でも……」

「ん？ いいから早く来いよ」

「……後悔しないで下さいよ？」

「何言ってるんだ？」

▼▼▼

ポケモンセンター（食堂）

「おはようございます、御二方」

「後悔した！ 凄く後悔した！」

「だから言っただじゃないですか……」

彼女がトレーナーなら同じ所に泊まってる可能性大だったのに……

…俺の馬鹿！

「昨夜の事は水に流そうと思います」

彼女に何があったんだ！？ あ、一晩寝てスッキリしたのか。

「但し、私の【お願い】を聞いて頂ける場合ですが」

お願いの所を強調した！　これは暗に必ずやれと言われてるのと同じだ！

「ソノオタウンまで、同行して頂けませんか？」

▼▼▼

うん、従うしかなかった。クチートの恐ろしさを体感済みである身体が反射的に、やらせて！　と叫んでしまった為に白い目で見られた。

意味が違つと弁明する暇は、与えられなかった。生恥を周知の物としたクロガネシティには、もう絶対に行くまい。

▼▼▼

コトブキシティ

クロガネゲートを抜け、203番道路を素通りし、難なくコトブキシティに戻って来た。

ここから彼女をソノオタウンに送る為に、204番道路へと赴く訳だが……。

「それではひとまずポケモンセンターに行きましようか」

「こ、このままソノオタウンに行った方が早く着くよなあコウキ！」
「そ、そうですね！ ソノオタウンに向かうなら、このまま行けば日が暮れない内に着けますね！」

「ソノオタウンでは元々一泊する予定ですので、ポケモンセンターで昼食を摂ってからで構いません」

イーブイの事があるので、ポケモンセンターに入れない俺とコウキ。いや、実質入れないのは俺だけでコウキはギリギリセーフか、こんな所でコウキの優しさを感じてしまう。

「仕方無い……奥の手だ」

「奥の手って……まさか」

「……変装で誤魔化す！」

▼▼▼

コトブキシティポケモンセンター入口

「カイト……カイト」

「なんだ、コウキ……コウ様」

「僕が女装する必要あったんですか」

「馬鹿野郎、男のままじゃどんな変装だってバレるだろ！」

コウキは女顔だから、ウィッグを着けた今は完全な美少女（no

トスカート）、俺はサングラスに黒のスーツとクロガネジムに居た黒服と瓜二つの格好。

パツと見、貴族のお嬢様とボディガードに見えるはず。

「何をしているのですか、貴方達は……」

「いえ、何でもございませぬ。行きましようか、コウ様」

「ええ、分かりましたわカイ」

「……私だけ取り残されているのは気のせいでしょうか」

▼▼▼

ポケモンセンター（ロビー）

「ようこそポケモンセンターへ」

「ポケモンの回復をお願いしますわ」

「お願いします」

コウキとニット帽少女がポケモン達を預けているのを、側で見守る。

「ブイ」

来ちゃったよ。

「ブイ……？」

疑いの目。

「ブイ」

少し期待した表情。

「ブイ……」

少し残念そうな顔。

このままなら、イーブイ百面相が見れそうだ。

「行きますわよ」

コウキに促され食堂へ。イーブイは……ついて来ない。よっしゃあ！ 変装成功だ！

第六話／進化ポケモンの話

ポケモンセンター（食堂）

「それで、貴方達が変装しているわけを聞いてもよろしいですか？」

「まあ事情が色々あるんだが」

「簡潔に話さない」

「はい」

彼女にイーブイに妙に懷かれ、イーブイ自身の為に置き去りにした話を話した。

「話した通り、コウキには最低でもシンオウ地方に生息する全てのポケモンを、この図鑑に記録すると言う目標がある」

「カイトさんは保護者的な意味で着いて来て貰ってます」

そこはせめて付き添いにしといた方が良くないか？ 保護者だと何だか幼稚な感じがするし。

「シンオウ地方全土を回る、当然危険な所にも行く。そんな所にか弱いポケモンは連れて行けない」

「最終進化系のポケモンに襲われたりする可能性もありますから」

テンガン山に行った時のユキノオーとかドータクンとか。

「……伺った限りでは、『イーブイの為』と無理やり理由付けしている様にしか聞こえません」

「そんなこと——」

「コウキ」

「……はい」

「続けます。イーブイの為と言いながら貴方達は厄介事を回避する為にイーブイを置き去りにした。これは偽善でしかありません」

「偽善なんかじゃ——」

「コウキ、抑えろ。彼女の言葉は正論だ」

「……はい」

すぐカツとなるのも分かるがな。コウキとしては本当にイーブイの為を考えての事だったのだ。俺と違って。

「しかもイーブイとは何度か戯れたそうですね。その時点でイーブイが貴方を慕っている事には気付いていましたね」

「ああ。妙に懐かれたとは思った」

「それがイーブイなりのアピールだったんです。臆病な彼女が気を許した事こそが最大のアピール……貴方に連れて行って貰いたいと言う気持ちの現れだったんです」

ゲットを嫌うイーブイからゲットを求められるとはな……おかしい状況だ。

「少し、用事が出来た。待っていてくれ」

▼▼▼

ポケモンセンター（ジョーイの私室）

コンコンとノック音。はい、と清らかな女声が返答し見慣れたピンク色のワンピースに白いエプロンを合わせた格好が目眩しい。サングラスを取って挨拶をする。

「どうも」

「……何しに来たの？」

「はじめを付けに」

「……話を聞くわ」

招かれたジョーイさんの部屋は随分と簡素な物で、ベッドや机と椅子、クローゼットがある他は何も見当たらない。

「イーブイに付いて来るに値する実力があるか確かめさせて下さい」
「どうするつもり？」

「俺のルカ——ミカルゲとバトルをさせます」

「あの子を傷つける様な事は許可出来ません」

「ルカには一切技を使わせない。そしてイーブイがルカに一撃でも当てられれば……連れて行きます」

「正気！？ あの子はノーマル技しか使えないのにゴーストタイプに技を当てるだなんて！」

「天敵にもある程度の柔軟さを発揮出来なければ……危険な事態に遭遇した時何も出来ません」

「だからって……！」

「イーブイに選択肢を二つ、ルカと戦う、俺について来ないを突き付けます。貴方はそれを見守って貰いたい」

「ダメです！ そんな事は絶対に——」

「ラキッ！」

「……ラッキー？」

「ラキッラキラキッ！」

「……貴方はイーブイの意思を尊重したいのね？」

「ラキッ！」

「分かったわ。イーブイの意思を尊重して、全ての選択をイーブイ自身に任せるわ」

▼▼▼

「イーブイ」

そう呼び掛けた時の反応は何と言えはいいのやら。

恐れ半分嬉しさ半分と言った微妙な感じで少しずつ距離を詰めて来る。

「ブイ……」

ジョーイさんから聞かされた話を思い出して警戒しているのは一目瞭然。ならば悪人と思わせた方がやりやすい。

「ルカ！」

クイックボールから飛び出すミカルゲ。事前に全ての事項を話して置いた、特に『技を使わない』の所を重点的に。

「ブ、ブイ？」

「まずはお前に謝らなければならない。正直言ってお前は厄介だった、だから置き去りにした」

「ブイ……」

耳が少し垂れシュンとなっている。反省しているようだが、手は抜かない。

「慕ってくれたお前を置いて行った事は悪いと思ってる。すまん」「ブイ！」

尻尾を振り振り。気にしてない、の意だろうか。もしくは、戻って来たから許してあげる、みたいな。

「お前に選択肢を与える。俺に付いて来るか、付いて来ないか」
「ブ、ブイブイ！」

この様子なら付いて来る気まんまんだな……。

「但し、付いて来るつもりならこのルカとバトルだ」「ブ、ブイ？」
「バトルするんだ。このミカルゲと」

困惑しているイーブイに再度告げる。だが、理由が分からないのか戸惑ったままである。こうして見守るだけでは時間の無駄なのでルールを告げる。

「お前がこのルカに一撃でも与えれば付いて来てもいい、時間は今から二時間」

ノーマル技しか使えないレベルのイーブイにゴーストタイプのルカを出したのは、イーブイを完全に諦めさせる為。それが俺のけじめだ。

俺の事を嫌な奴だと思い心底嫌うように。僅か二時間でノーマルタイプ以外の技を覚えるのだって不可能だ、技マシンでも使わなければな。

「二時間後に俺はこの町を出る。精々頑張るんだな」

嫌な奴を、演じる。イーブイに恐怖を与える存在なのだと、そうでもしなければこのイーブイは本当に付いて来てしまう。

辺りを見回して腰掛ける。ここはポケモンセンターの中庭、トレーナーのポケモンを遊ばせたり傷ついた野生ポケモンを慣らす為に使われる場所。イーブイお気に入りの場所だと言う事で、ジョーイさんに頼み貸し切りにしてもらった。二時間の間だが。

「ブ、ブイ！」

やる気になったのだろう。

地面から少し浮かんでいるルカを威嚇しつつ、一旦距離を取る。そして助走を付けながら身体全体を使つての——たいあたり。

スカッ

もちろん、ゴーストタイプのルカにその技は効かない。イーブイの身体はルカをそのまますり抜ける。

「ブ、ブイ!？」

臆病な性格であるイーブイの事だ、自分から戦うのはこれが初め

てだろう。しかも初対戦の相手が天敵のゴーストタイプ、相性と言う物を理解していないイーブイに勝ち目はない。

「ブ、ブイブイ！」

今度は後ろ足で砂を巻き上げる。これは万が一見つかった時に逃走手段に用いていたのか、随分慣れた手つき（やっているのは足だが）である。

“すなかけ”は命中率を下げるがダメージを与える効果はない。よって一撃の判定には入らない、イーブイがこちらを伺うが表情を崩したりはしない。

「ブイ……」

これでもダメだと悟り、再び助走を得る為にルカから離れるイーブイ。これは……、

「ブイブイ！」

さっきよりもやる気十分、距離も十分と言った感じで無くと空気を切り裂きながら疾走し始めた。

——“でんこうせっか”！

そう知覚した瞬間にイーブイの身体はたいあたりした時同様ルカをすり抜けた。でんこうせっかが使えるレベルまで育っていたとは予想外だった、がノーマル技では意味がない。せめて“かみつく”が使えるくらいまで努力していたら、一撃与えられたのにな。

「ブイッ！」

「何！？」

すり抜けたと思ったら、壁を蹴り再び反転、背後からルカに襲いかかる……が、やはりすり抜けてしまう。一瞬ヒヤツとしたがノーマル技が効くはずもない、慌てる必要はないのだ。

「ブ、ブイ……」

たいあたり、すなかけ、でんこうせっか。そしてジョーイさんの言ったねがいごとは回復にしか使えない。

意味がないとイーブイ自身認めたくないが分かりつつあるのだろう、何度もルカにたいあたりやでんこうせっかを仕掛けるが、技のキレも勢いも無くなりつつある。

「……ブイ！」

何か閃いたのか？

反転、背を向けて走り始めた。ル力はその場から動かない、動かない様に指示済みだ。

イーブイは……空気を切り裂いて疾走中。でんこうせっか発動中だが、一体何をするつもりだ？

「ブイッ！」

でんこうせっかで勢いの付いた突進。それが中庭に植えられている一本の木に命中。芯を捉えたのか木全体が大きく揺れ、成っていた木の実がいくつか地面に落ちる。青い果実様な不思議な色合いの木の実、オレンの実だ。

それを啜えて、ル力の前へと戻るイーブイ。

ま、まさか……“しぜんのめぐみ”を使う気なのか！？ しぜんのめぐみと言う技は持っている木の実によってタイプや威力が決まる。今イーブイがオレンの実を持っている状態でしぜんのめぐみを発動すると、毒タイプの技として効果が出るのだ。

それは不味い！

半減とは言え一撃の条件に当てはまってしまう。やはり条件が緩過ぎたか……。

「ブイッ！」

投げた！？

スカッ

そして通り抜けた!?

いや、攻撃じゃないから当然だけど！ 冷や冷やしたじゃないか！

「ブイ……」

木の実投げただけで効果が出るなら“なげつける”なんて技はいらなくなるじゃないか。もっと合理的に考えてだな……いや、見守る事に徹するんだっけ。口を出してはいけない。

余りにもツツコミ甲斐のある行動だったせいで魂の部分から反応した気がする。

「ブイ……」

せっかく思いついた方法もダメだったせいかな落ち込むイーブイ。

ル力に一撃当てるのに“わるあがき”^{パワーポイント}と言う方法もあるが、たいあたりやでんこうせっか、すなかけはPPが多く全て使い切る前に時間が来るだろうし、イーブイが疲れて戦えなくなる方が早いに決まってる。

だからこそ、“イーブイから嫌われる”と言う目的が果たせるのだ。

俺の様なトレーナーではなく、イーブイの事を第一に考えられる様な奴がいいに決まってる。

俺にはル力を始めとした他の持ちポケの事もあり、イーブイだけ

に愛情を注ぐ事は出来ないだろう。

だからイーブイをかわいがってくれるトレーナーを、イーブイ自身がここで待つ方が良いのだ。

「イーブイは……どうですか？」

ジョーイさんだ。イーブイが気になり、休憩の合間にやって来たのだろう。

「見ての通り、まだ一撃当てられてません」

「そう、ですか……」

懸命にでんこうせっかやたいあたり、時には砂を巻き上げ攻撃を仕掛けているが全く意味を為さない。時間が経つのは早い、すでに30分が経過していた。

「カイトくん」

「……なんですか」

「イーブイがこのセンターに来た時の事、……聞いてくれる？」

「……はい」

▼▼▼

まだ私がこのコトブキシティポケモンセンターに着任したばかりの頃よ。

ラッキーはそれなりに経験を積んでいたけれど、私はまだ看護学校を卒業仕立てのひよっこだった。

いろいろな不慣れだったけれど、ラッキーのお陰で段々慣れて来たある日だった。

「ラキラキッ！」

ラッキーの慌てた声が聞こえたの。それで行ったら……。

「ルクウウ！」

野生のルクシオにいいように弄ばれている小さな身体。生存数が少なく主だった生息地も不明な稀少ポケモン、イーブイだった。

偶然、ルクシオの縄張りを侵してしまったんでしょう。それは野生の摂理。でも見過ごせなかった。

でも私やラッキーでは、野生のルクシオは止められない。

誰か近くのトレーナーは——そう探した時に、ルクシオが唸り声を上げて別の方向を威嚇し始めたの。

「野生のルクシオ……ね。弾け……」○○『」

ルクシオが威嚇している少年が投げたボール。ボールから紫色の

ポケモンが現れ、ルクシオを弾き飛ばしてすぐにボールに戻ってしまった。

「ル、ルクウ……」

かなりのダメージだったんでしょね、そのルクシオは脇目も振らずに逃げて行ったわ。そして、トレーナーは私に行ったの。

「イーブイ……か。ジョーイさんですね？ この子をよろしく願いします、今は時間がないので……失礼します」

帽子を目深に被っていたから顔は分ず、ポケモンの正体も分からなくて。数少ない情報でナナカマド博士に調べて貰ったのだけれど……その子の素姓が分かるはずなかった。

イーブイの容体は確かに危険だったけど、ラッキーの技術とイーブイの生命力のお陰で一命は取り留めた。けれど、ルクシオの件がトラウマとなつて臆病になつてしまったのね。イーブイはそれから……本当に極僅かな人間やポケモンの前にしか姿を現さなくなつた。いつもは中庭の隅でじっとしているんだけど。

貴方には何かを感じたみたいね……そういえば、どことなくイーブイを助けたトレーナーに似ているかも。

「……………」

分かってるわ、そんなことがあるはずないって。
雰囲気似ている人なんていくらでもいるもの。
ただ、イーブイを連れてってくれる人があの時の子だったら……
って思ってしまうのよ。

▼▼▼

……ど、どうやって説明しよう。
正直に話しても、話さなくても痛い目に遭いそうな気がしてならない。

「そ、そそそそろそろタイムリミットか」
「……ブイ……ブイ……」

吃ってしまった。バレてはないよな？

このまま時間切れで去ってしまいたい衝動に駆られる……が、それは真剣に取り組んだイーブイの気持ちを踏みにじることになる。

あの小さな身体はどこにそんな力が残ってるのだろう。

たいあたりやでんこうせっかの連発で身体をあちこちを酷使している。立っているのも辛いはずなのに。

諦めずに闘志を燃やしている。臆病な性格など影を潜めたかのよう
うに。

「ブイ……！」

ル力を射抜く視線に弱さは存在しない。強さを備えたもの。

「ブイーツ！」

「カイトくんあれは！？」

イーブイの口許に白い光が収束する。

まさかこの局面で新技を覚えたのか！？

「ブイブイーツ！」

白い光がより強く輝き出す。比例して大きさもビー玉程度から“シャドーボール”に匹敵する大きさまで成長。

「ブイーツ！」

成長した光は一気に弾け、ル力を吹き飛ばした。

「“めざめるパワー”……イーブイの諦めない心が新たな才能を開化させたのね」

「……………」

ヤバイ。冷や汗がドツと湧き出て来た。
どどどっしょっ、さらに言い出しにくい雰囲気……。

「ミヨーン」

「ブイ!？」

ルカはすぐに戻って来た。大したダメージもなさそうなのでクイックボールを取り出し、一旦ボールに戻る。
よし、落ち着くんだ。ヒッヒッファー、ヒッヒッファー。

「ブイ」

足下に来て忙しく尻尾を振るイーブイ。
すごいでしょ、的な感じだろうな。褒めてもらいたくてもうが
ないと言った様子である。

うう……… 純粋な視線が痛い。

「イーブイ、よく頑張ったわね」

「ブイ!」

「ほら、カイトくん」

「……………」

「ブイ」

……覚悟を決めなければ。
持ったままのクイックボールを握り締め、展開した。

「弾け、『ルカ』！」

あの日、あの時と同じセリフを紡ぐ。

「ミヨーン！」

「あの時の紫色のポケモンって……ま、まさか……カイトくん、貴方が……」

ある事実気付いたジョーイさんの言葉に、繋げて続ける。

「あの日、イーブイを助けたのは……俺とこのミカルゲ……ルカです」

「ミヨーン」

イーブイもジョーイさんも呆然としている。

「戻れ、ルカ」

証明の為だけに何度も出し入れした事を心の中で謝罪し、ボールを腰にセットし直した。

「な、ななな何で黙っていたの!？」

「ブイブイツ!」

「い、痛っ……苦しい……っ」

口あんぐりでアングリーな一人と一匹。

「黙ってたわけじゃないんです……ただ……」

「……あ、ご、ごめんなさい。何か理由があるのよね……」

「イーブイを助けたことを完全に忘れていて」

「イーブイ、覚えたばかりのめざめるパワーの練習台ができたわ」

「ブイ」

「待って! 理由があつたんだよ! あの日は、コトブキテレビで開かれていた『ドキッ 女だらけの水着トリアスロン』の収録現場を観に行く途中で――」

「フルパワーでいいわ」

「ブイブイ」

状況が悪化してる!?! 何で!?!

「カイトさーん! そろそろ出発の時間で――何があつたんですか?」

待っていて、と言っておいたコウキとニット帽少女が迎えに来て、この状況に啞然とした。

何で命の危険に晒されてるかぐらいは聞けよ。とにかく、この事は言って置かないと。

「コウキ」

「はい？」

「旅の仲間が一匹増えた」

「ブイ！」

コウキ沈黙。ニット帽少女、イーブイに向かって少し微笑んだ。

「ええーっ!？」

「賑やかになりそうですね」

イーブイのめざめるパワーで吹き飛ばされ、後頭部を地面に強打。これがイーブイなりの罰なのか、直後に俺の腹に飛び乗るイーブイ。

「……イーブイ、これからよろしくな」
「ブーイ！」

第七話／鮮やかに花薫る町

「ソノオタウンに着いたようですね」

少女の言葉にオレンジ色に染まったソノオタウンが視界一杯に広がった。昼もちろん綺麗なのだろうが、この時間帯も白花が朱色を帯びたりしてとても美しい情景である。

「ブイ！」

「ピッピ！」

「チック！」

俺がイーブイ出してたら、コウキがピッピを出して、ニット帽少女がトゲチックを出して——ノーマルタイプ同士すぐに仲良くなった。

まあ、少女とはこの町でお別れなのだけど。

「まずはポケモンセンターに行つて、ポケモン達を回復させましょう」

コウキの意見は最もなのでそのままポケモンセンターへ向かう。ソノオタウンに来るまで、コウキが何度かバトルを挑まれた為にコウキのユンゲラーやハヤシガメは傷ついている。ポケモンセンターに向かうのは当然だ。

▼▼▼

ソノオタウンポケモンセンター

「ようこそポケモンセンターへ」

「結婚して下さい——」

「コメントパンチ」

「つばめがえしです」

「ごはあっ」

ピッピとトゲチックから強烈な一撃を貰い横に吹き飛ばされた。
あたた……腰骨が曲がったらどうする！

「ポケモン達の回復をお願いします。戻ってピッピ」

「私もお願いします、ご苦勞様ですトゲチック」

「はい、お預かり致します」

「理不尽過ぎる！」

そもそもコウキ達に俺の生き甲斐を邪魔される言われはない！

「あー……まだ腰と顎が痛い」

「ブイ〜？」

「心配してくれるのはイーブイくらいだよ……ほら、ボールに戻りな」

イーブイを戻し俺もボールを預ける。

「ここまでありがとうございました。私は部屋の方で休ませて頂きます」

「ど、どういたしまして」

よし、監視の目が一つ消えた！

「それじゃあ、僕達は夕食を摂りましょう」
「おー」

実は結構限界だったんだ。コウキナイス！

▼▼▼

ポケモンセンター（食堂）

「夕食摂ったら眠くなって来た」

「僕はバトルで疲れたので早く寝たいです……」

ソノオタウンまで来たのはいいが、この辺りで捕獲していないのは——ブイゼル、カラナクシ、パチリスだろうか。

「お前は部屋に戻って寝てろ。明日は出来ればハクタイの森を抜きたいんだから、捕獲で手間取っては困る」

「随分と強行日程な気がするんですけど……」

「実は今度、ハクタイシティで美少女コンテストが開かれるらしいんだが——」

「僕は先に部屋に行って寝てますね」

やれやれ、異性に興味が無いなんてコウキもまだまだ子供だなー。



205番道路

ポケモンを引き取り、意気揚々と繰り出す。カラナクシ、ブイゼルは水タイプ、パチリスは電気タイプなので草タイプを使えば楽勝なのだが。

まあ、今回もルカに頑張って貰うとしよう。

「……何だあれ？」

ハクタイの森へ進む為に掛かっている橋の前に、銀色の服を来た青い髪のおカツパ男が居た。

足下には全体的に濃紫の体毛、腹部と頭部から背中にかけて白い毛が混じったスカンクポケモン、スカンプーが。

臭うぞ……スカンプーの出す臭いじゃなくてな！

まあ、俺には関係ないし。

「さーで、まずは……お！ カラナクシ発見！」

取りあえずポケモンを捕獲しておく事にした。

▼▼▼

ルカの“おにび”で火傷をしているパチリス。そしてそのパチリス目掛けて――

「いけっダークボール！」

ダークボールがパチリスを捉えボールの中にパチリスを封じる。事前に弱らせておいたお陰ですんなり捕獲、ボールはその場から姿を消した。

「お疲れ、ルカ」

労いながらルカをボールに戻す。パチリス捕獲完了……と。

「ここで何をしている」

うわあ……さっきのオカッパだ。スカンプーを連れたオカッパ
野郎。仮称をオカッパとしよう。

向こうは随分こちらに警戒心を向けている。いや、俺からしたら
このオカッパの方が警戒すべき人物なんだが。

「ここで何をしている」

もう一度繰り返される。今度は脅しを含んだ言い方だ。

「答えないか、ならばここで――」

死ねっ！ が妥当な所か。

「スカンプーに懷かれてしまえ！」
「プー!？」

なにい!？

「ゆけっスカンプー! あいつに懷け！」
「プー! プー！」

スカンプー抗議中。まあいきなり見知らぬ人間に懷けと言われても困惑するだけだよなー。

「いいから懷け！」
「プー！」

そりゃトレーナー以外に懷きたいなんて普通は思わないだろ……。

▼▼▼

「プー」
「なん……だと……？」

本当に懷いたじゃねえか! どうするんだよ!

「スカンプーを手名付けようとハクタイの森へは行かせん！ 今、ハクタイの森はワレワレギンガ団が調査している！ 調査と言っても、ソノオタウンの奥の花畑でポケモンを捕まえているとか、発電所のエネルギーをこっそり奪おうとしているとか、オマエには関係ない！」

え……重要情報ばらさなかったか？ このオカッパ。
よし、箇条書きで纏めてみよう。

- ・このオカッパはギンガ団なる物に所属
- ・ソノオタウンの奥、通称ソノオの花畑でオカッパの仲間がポケモンを捕まえようとしている
- ・この先にある谷間の発電所のエネルギーを狙っている
- ・ハクタイの森はこの組織の調査中で立ち入れない

戦闘フラグ3つも同時に立てるなあーっ！

俺の身体は一つだけなんだぞ！？

ハクタイの森は放つとけば退くだろうし、谷間の発電所も名前は素晴らしい（胸的な意味で）が興味ないし関係ないでスルー。
つまりソノオの花畑に向かえばいいわけか。

「確かに関係ないので帰る」
「そうしなさい」

帰ると分かった途端、オカッパの言葉遣いが礼儀正しい物に。邪魔をしない奴には意外と優しいのか。

ソノオの花畑は徒歩でそう何分もかからない。しかも夜であの銀色服を着ている連中だ、絶対に目立つだろうし。

▼▼▼

ソノオタウン

さて、ソノオの花畑はこっち……か。

「何をしているのですか」

何で居るの！？

ニット帽少女、部屋で休んでいたのでは？

「嫌な予感がしたので」

超能力少女か？ 俺の行動を第六感で感じ取るとか。

「少し聞き捨てならない情報を得たんでな」

「聞かせて下さい」

「銀色の服を着た連中がソノオの花畑でポケモンを捕まえようとしているらしい」

「なんですって!？」

首が!？ 首が千切れっ……!

「すみません、取り乱しました。一体何処でその情報を？」

「馬鹿な銀色服がノリで喋ってくれた」

ニット帽少女が頭を抱えてるけどどうしたんだ？

「どうするつもりですか？ まさか一人で——」

「まあ……な。偽善だけど、見過ごせない事態だし」

俺、コウキより強いし！

……そ、そんな白い目で見るとなよ!? これでもクロガネジムは
圧勝——

「運が良かっただけでしょう」

その通りでございます。

「……花畑はこの先だ、行つて来る」
「待ちなさい」

止められた。彼女の目はこちらを突き刺すように刺々しい。

「生半可な力では……退ける事は敵わない集団ですよ？」
「ま、お兄さんに任せときなつて」
「キモイです」

何だこの。

「貴方だけでは無理です」

断言されるとキツイ物がある。

「だから、私も行きます」「さあ、その『あまいみつ』をワレワレ
ギンガ団に渡すのです!」

先のオカッパと同様の容貌である二人組が、ミツハニーが集め製品化された甘い蜜を持った壮年の男性へ詰め寄っていた。

さて、ここは慎重に背後から回り込んで……あれ？

ニット帽少女は？

「何をしているのです！」

「INEEEEE!、と思ったら、ITAAAAA! って出てる!?」

背後から回り込んで影討ち（技に非ず）と言う俺発案の素晴らしい作戦はどうした!？

「お、おいコイツなんだよ？」

「痛い目に遭わせてしまえば良いのです」

「そ、そうだな！ いけっスカンプー！」

「行くのですズバット！」

スカンプーとズバット。毒タイプ大好き集団なのか、このギンガ団と言う輩は。

「行きなさいクチート！」

ダブルバトルの格好になってるが、どう見ても2対1。理由は簡単、俺がポケモンを出してないからである。

「は、鋼タイプとは卑怯な！」

「ワレワレの毒攻撃が効かないではありませんか！」

……このギンガ団ってのは馬鹿の集団か？

（ルカ、出番だ）

クイックボールからミカルゲ出現。但し見つからない様に俺の真隣り。

（いいか、彼女のクチートに合わせてくれ）

（ミヨーン）

同時に仕留めればクチートが被弾する事はない。

「クチート、スカンプーにかえんほうしゃ！」

「クチ！」

（ルカ、ズバットにかけうちだ！）

（ミヨーン）

夜中に紅蓮の花びらが舞う。

それにギンガ団二人が目を奪われた瞬間、紅蓮に焼かれ煤けて倒れるスカンプーと真下からの一撃で地面に落ちるズバット。

「こ、この子供強いぞ!？」

「焦るななのです。一旦発電所に戻って体勢を立て直すのです!」

ギンガ団の二人組は慌てた様子でスカンプーとズバットを戻し逃げて行った。

(ルカ、戻れ)

ミカルゲをボールに戻してふとした疑問が頭をよぎる。

マグマ団・アクア団のしたっぱ然り、ロケット団のしたっぱ然り、何とか団とかに所属する団員は揃って逃げ足が早い。

まさか採用条件に逃げ足の早さとかないよな？

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ、助かったよ」

どうしよう、出るタイミングを見失った。

「もう出て来ても良いですよ」

最初からそういう作戦だったとも言いた気な口調だが、一つ突っ込ませろ。

作戦を無茶苦茶にしたのはキミだとな！

口に出したらヒドい目に遭いそうなので、敢えて言わないが。

「よつと」

「おお！？ 木の間から人が！？」

おっさん驚き過ぎ。

「私のボディガードです」

それはソノオタウンに着くまでの話だったはずだ。

「そうかそうか、ありがとう。キミ達のお陰で助かったよ！」
「礼には及びません」

お嬢様ぶるなあ！ 猫被りめ！ この猫被りめ！

ガラッ

奴等が逃げて行った足跡の続く所に何かが落ちていた。
何かの力ギだろうか？ 一応拾っておく。

「追いますよ」

「イヤです」

「クチート、か——」

「待って！ かえんほうしゃもかみくだくもかみなりのキバも止めて！」

「では行きましょう」

「はい……お嬢様」

おっさんに対する誤魔化しもあるから、こんな感じでいいだろう。
とゆーか、まもる以外のクチートの技、全部頭文字が『か』なせいで、最初を聞いただけではどんな技が来るか判断できない。この少女、意外と策士か？

「発電所に向かいます」

そういえば逃げる時に発電所が云々行ってたっけ。

オカッパが話した情報の中にも発電所のエネルギーを狙っている、とか言うのがあったな。

つまり……発電所が奴等の拠点になってるのでそこを取り返せば良いんだな。よし、

「俺は帰る」

「クチート、逃がさないで。サーナイト、発電所までテレポートです」

「あがががが」

クチートに片足噛まれてるせいで動けないし痛いしで。

「着きました」

着きましたじゃない！

……一回これは立派な犯罪（誘拐）だと教えた方が彼女の為なのかもしれない。「ちなみにどうやって侵入するんだ？ カギ掛かってるみたいだが」

あ、さっき拾ったカギを使えば――

「クチートのかえんほうしゃで溶かします」

「ダメ！ それダメ！ 訴えられるから！」

主に発電所で働く人達に。

「カギあるから！ 溶かしたり壊したりするのは待って！」

閉ざされた発電所の扉。ポツンとあるカギ穴に拾ったカギを差し込み捻る。

ガチャン

開いた。

「行きますよ！」

「少しの偽善が何でこんな大事に」

発電所の扉を開けると侵入者を察知したギンガ団が勝負を仕掛けて来た。

「いけつニヤルマー！」

「クチートかみなりのキバ！」

俺は彼女の後ろに着いて行くだけで進めそうなんだが。

▼▼▼

谷間の発電所（奥）

「フフツやっぱり来たわね、マーキュリー」

「マーズ！ 貴方達は発電所のエネルギーで何をするつもりなの！？」

赤毛美少女と再会、ふむふむ彼女の名前はマーズ、と。ただいま記録しています、いきなり電源を切らないで下さい。

「大丈夫ですか」

「あ、ああ……しかしキミは？」

「通りすがりのトレーナーです」

捕われていた所長の様な人。いや所長なんだろうけど、やや臭う。汗臭いな。

「クチート！ かみくだく！」

「ズバット “あやしいひかり” ！」

シンジ湖での光景と重なる様な対戦が行われていたが、取りあえず所長さんを避難させて置こう。

「あ、こっちです」

「ああ」

倒したギンガ団（俺は倒してないけど）は睨めば退くので、所長をまず外に連れ出す。

『かみなりのキバ！』

『“エアーカッター”！』

外から見ると電撃が漏れてたり、窓ガラスにヒビが入ったりと壮絶なバトルが繰り広げられているらしい。

「じゃ、ソノオタウンまで真っ直ぐ行つてできればジュンサーさんと呼んで来て下さい」

「わ、分かったよ！ キミはどうするんだい？」

「彼女の元に戻ります、それが俺の使命だから……」

フツ、決まった。

「臭っ……青臭いってモノじゃないね」

おっさん、自分の体臭を棚に上げるな。
それと臭いセリフを言ったのは自分が一番理解してんだよっ！

▼▼▼

発電所の奥に戻るとバトルはまだ終わっていないかった。それどころか、熾烈な戦いとなっていた。

「ブニヤット！ 今度こそサーナイトに引導を渡しなさい！」
「逆に叩きのめしなさいサーナイト！」

うわぁ、どっちも――

「ドSじゃな」

何このじじい。

「マーズや、もうよいぞ。発電所からはたっぷりエネルギーを頂いたからな。天才プルートにかかればこの電力で……ムフフ」

「五月蠅いわね！ あたしはマーキュリーと決着を付けるのよ！ 最近仲間になった癖してあたしに命令しないでよね！」

じじい――プルートと呼ばれた爺さんはこのマーズとはどうやら仲が悪いらしい。

「命令しないから付き合ってくれ」

「アンタはどこから湧いたのよ!？」

失礼な。ずっと居たぞ。

「ジュンサーにも気付かれた……ここは退き時だ」

「くっ……マキキュリー！ この決着はまたの機会よ！」

逃走用ユンゲラーを出し、例の如く赤毛少女は消えてしまった。
あのじじいを連れて。

「サーナイト、テレポートです」

今回はかりはお願いします。

▼▼▼

ポケモンセンター（ロビー）

ロビーにテレポートで現れた俺達にを待っていたのはジョーイさんのお説教だった。但し、彼女はスルーで俺だけ。

「貴方は年上なんですから子供達を導くお兄さんとしてですね――」

ソノオタウンのジョーイさんはお説教好きな事が分かった。あ
ー、朝日が昇って来たー……。

まさか完徹正座をさせられるとは。ジョーイさん恐るべし。
眠い、とてつもなく。

ガタッ

「イブ」
「ブイッ」

ヒールボールから飛び出すイーブイのイブ。安易だが、分かりや
すいニックネームが俺の主義なんだ。

「誰だよ？ まだジョーイさんも起きてないのに」
「ブイ」

お前はボールの中でぐっすり眠っていただろうに。

「……何をしているのですか？」

なんだ、彼女か。

「見ての通り正座さ」

「まさか、あれからずっとですか？」

「まあな」

激しく眠いが。

「……もう行くんだな」

「はい。もう迷惑は掛けられませんから」

まあ、ギンガなんちゃらとか言うのにこれで関わらなくて良くなるわけか。

これなら当初の目的通りにコウキの凶鑑完成に専念出来ると言うもの。

「貴方に一つだけお願いがあります」

「出来る範囲なら何でも」

今はどの店も閉まってるから何かを買って来いとかはないだろうし。

「私と一緒に来て下さい」

いきなり無理な事言われたんだが。

この子には何か目的があるようだけど、それは俺やコウキとは違うようだし……。

一緒につてのは、やっぱり無理だな。

「スマン、それは無理だ。コウキの両親にアイツだけで旅をさせるなと強く釘刺されてる」

コウキは好奇心旺盛だからすぐに所在が分からなくなる、つまり監視する存在が必要だとコウキの親とナナカマド博士に言われた。それに俺が行っても足手纏いだし。

「そうですか……」

「それに俺みたいのが着いて行っても、役に立たないさ」

「そんな事は——」

「さあさあ行っただ行っただ。コウキにグチグチ言われるのは俺なんだから」

「どうしてですか？」

ありや、その理由は分からないか。

「理由は何であれキミは凶鑑を所有する三人目となった。凶鑑を所有する人間てのは不思議でな、意識せずとも連帯感が生まれて来るみたいだ」

僅かな間だったとはいえ、彼女との旅は楽しかったんだろうと思う。最初からこの町で別れる予定だったが、コウキなら凶鑑を俺に押しつけ彼女に付いて行き兼ねない。彼女の進む道にギンガ団と言う悪の気配が満ちているから。

「ブイ」

イブが甘えるように声を出す。その頭を撫でつつ、押し黙る彼女を見守る。

「……私の力だけでは無理な事態が起きたら」

彼女の眼は真剣で、鋭い視線をこちらに向けていた。

「貴方は私に力を貸してくれますか？」
「ブイ！」

イブ、先に返事をするんじゃない。

「出来る限り力を貸しますよ、お嬢様」

「……ありがとうございます」

皮肉に取られるかもしれないが、そんな返答に彼女は笑顔を浮かべポケモンセンターから出て行った。

「ギンガ団……か。似過ぎだ——マグマやアクアの奴等にな」

第八話／昔を今に繋ぐ町

「ハクタイシティに着きましたー」

「……………」

「カイトさん？ いきなり黙り込んで、どうしました？」

「あら」

太陽の光を反射して輝くブロンドと対照的な真っ黒なスーツの上から同色のコートを重ね着している。

「し、シンオウリーグチャンピオンのシロナさんですか！？ さ、さささサイン下さい！ し、色紙とペンはここに！」

「きみの名前は？」

「ふ、フタバタウンのコウキと言います！」

「そう。それじゃあ…………コウキくんへ…………シロナ…………つと。これでいい？」

「は、はい！ 一生の宝物にしますー！」

緩やかな動作でベルトのクイックボールを外す。それを金髪美女——シンオウチャンピオンシロナへ向けた。

「ルカ、出て来い」

「ミカルゲ、出番よ」

俺のクイックボールとシロナのモンスターボールが宙を舞う。中から同種のポケモン、ミカルゲが姿を現し。

「「あくのはどう」！」「」

全く同じ指示を受け、全く同質の技を繰り出し。闇の波動は拮抗しながら爆散した。

「な、何なんですかいきなり！？」

「変わらないようね」

「そっちこそ」

くっ……この女だけには会いたくなかった。

「コウキ行くぞ」

「えっ！？ でも……」

「押し止どめて、ミロカロス」

シロナが追加で投げたモンスターボールが開き、扇上に広がったきらびやかな尻尾を揺らす慈しみポケモン、ミロカロスが立ちはだかった。このミロカロス、平均6・2メートルだがシロナのミロカロスは明らかにそれよりも長い。7メートル越えしてるのでは。

こんなのが通せん坊していたら、重量級ポケモンを使いでもしないと突破出来ない。

「ルカ、お前じゃ突破できない。ゆっくり休んでくれ」

労ってルカをクイックボールに収納しベルトに付け直す。大きく溜め息を吐く事で敵対の意思がないことを示した。

「ご苦労様ミロカロス。変な事で呼び出してごめんなさいね?」

「ミロオー」

姿形だけでなく声までも美しいミロカロス。さすが世界一美しいポケモンは違う、持ち主と違って。

ミロカロスをボールにしまったシロナはこちらを向き、

「協力」

「嫌だ」

「チャンピオンの権力を行使するけど?」

「権力を無駄遣いするなよ」

「協力しなさいこの熟女マニア」

「嫌だと言ってるだろこのシヨタコンチャンピオン」

シヨタコンと聞いてコウキがビクツと肩を震わせた。

「ぼ、僕は先に言ってますね!」

「あつ待つて——」
「やめろ」

身の危険を感じたコウキを捕まえようとしたシロナの肩を掴み、その場に押し止どめる。これだからシヨタコンって性癖は嫌だ、年端も行かない少年に襲いかかるうとするなんて。

「で——ギンガ団とやらについてか？」

その言葉で全てを悟ったシロナは短く相槌を打って、ポケットから四つ折りの紙を取り出した。

「話が早く進んでいいけどその通り。最近シンオウ地方各地でギンガ団員の怪しい行動が目撃されている」

「格好も十分怪しいが」

「茶化さないの。どうやらこの町の自転車屋の御主人、ポケモンをギンガ団に奪われたみたいで……一人で乗り込んだみたい」

「はいはい。その人を助けつつギンガ団撃破が今回の目的かそうですか」

「何か腑に落ちない言い方だけどいいわ。さ、アジトを潰しに行きましょう？」

「そんな、『さ、ホテルに行きましょう？』みたいに言われても寒気と吐気がするだけで」

「頭がち割らりたい？」

「よし行くか」

「全く……もつと真面目に行動出来ないかな？」

「お前が言っな」

即興のデコボココンビ。あーあ、シロナと行動するなんて予想外もいいとこだよ、全く。「さて……と」

目の前に聳える左右の壁にトゲトゲが付いたビル。シロナ曰くギンガハクタイビルに自転車屋の御主人だかは乗り込んだようだ。無鉄砲と言っか何と言っか、どことなくジユンを思い出す行動力だ。

「さあ、行きましよ……！？」

シロナが途中で言葉を切った。入口である自動ドアが開き中の様子がありありと見て取れる。

挟れた床、焦げ付いた壁、濡れた電子機器に気絶したギンガ団員十数人。ちょうど彼女——ニット帽少女の手持ちとタイプが一致する。

「先客だな、とおーっても恐ろしい」

「知り合いなの？」

「一応。そこまで親しくな「きゃあああつ」えっ。こんな女らしい悲鳴が彼女から聞けるなんてここは地獄の一丁目か？」

「馬鹿言ってないで早く進まないと！」

シロナの先導で倒れた団員を避けながら進む。シロナは遠慮無く

踏んづけてるけど。

ガッ

段差に躓いて顔面から床に叩き付けられた。足音はどんどん離れて行く。シロナの奴、俺を放置しやがった。

「何をしているの！」

「あらあら、シンオウチャンピオンが何の御用？」

「その子を離さない！」

鼻血を拭きながら聞き耳を立ててしていると、聞き捨てならない情報が入って来た。

「別にポケモンを出してもいいけど……出した瞬間、スカタンクが“どくどく”を吐き掛けるわよお」

「くうつ卑怯な……！」

「何とでも言いなさい！ アハハハハ！ あんたがポケモンを出さないなら甚振り放題ねえ。スカタンク、その女にかえん——」

「なんて胸のデカさだ……！」

「誰よあんたあ！？」

「ホウエン地方出身のカイトです」

「あらそう、それは御丁寧に……ってやらせんじゃないわよお！」

ギンガ団の連中は皆ノリが良いのだろうか。それはさておき。

「やっぱり捕まってたのはきみか」

「油断しただけです……本来ならジュピター如きに遅れは取りません！」

「言ってくれるじゃない……スカタンク！ こいつらにどくどくを……」

ドサツとジュピターとニット帽少女に呼ばれた女の横に倒れ伏すスカタンク。

「ご苦労様、ガブリアス。カイトが引きつけてくれたお陰で倒すのに10秒もかからなかったわ」

悠然と佇むシロナとその相棒、マッハポケモンガブリアスが低く唸りを上げていた。

「分が悪過ぎる……！ マーキュリー！ これに懲りたらこれ以上あたしらの邪魔をしないことねえ！」

パンッ！

ジュピターが床に何かを叩き付けた瞬間、膨大な量の煙が部屋に

充滿する。

「煙幕！」

「ゴルバット！ “そらをとぶ” よぉ！」

ゴルバットへの指示が聞こえ、煙幕が晴れた頃にはジュピターの影も形もなかった。

「逃がしてしまいました……」

「で、シロナ。自転車屋の御主人見つかったか？」

「いいえ。ここに来るまで見掛けなかったわ。隠せるような場所もないし……」

「その方でしたら隙を見て脱出して頂きました。もちろん、ポケモンと一緒に」

「そこを狙われたのか」

「恥ずかしい話ですが……その通りです」

「全然恥ずかしくないわ。むしろ、胸を張っていい事なのよ？」

「張る程の胸が無いじゃないか」

「貴方には地獄すら生温いようですね……」

ニットボウシヨウジョコワイヨー……ニットボウシヨウジョコワイヨー……。 「単刀直入に聞くけど」

カランとコップに入った氷が冷ややかに音を立てた。

現在ポケモンセンターの食堂にて情報交換中。俺の前にシロナが

座りその横にコウキ、俺の横にニット帽少女と四人掛けの席に座っている。

シロナの強い希望で決まった席順だが、ガブリアスに脅されたらどんな男でも頷かざるを得ない。コウキもな。

「ギンガ団について知ってる事、全部教えて欲しいの」

そう彼女に強く問い掛ける。マーズやジュピターにマーキュリーと呼ばれていた彼女に。

「お話す事は……出来ません。これは私の問題です」

「貴方が話してくれるだけで、グンと情報量が増えるのよ」

「……ごめんなさい」

「お願い！ 私はシンオウ地方を守りたいの！」

さつきからこの繰り返しだ。今までの事から推論するに、確実に彼女とギンガ団には繋がりがある。シロナもそれに気付いたみたいだが……焦り過ぎだ。交渉つてのは落ち着くのが大前提、さらに彼女に情報提供等の強要はチャンピオンと言えど、ポケモン協会が定めた規律に抵触する。

「シロナ、ちょっと来い」

「嫌」

「ふざけてる場合か」

二人をその場に残しシロナと共に席を立ち上がる。
ここから先はあの二人に聞かせるべき話じゃない。

「ミカルゲ、サイコネシスで私たちの思考を繋げて」

執事のように控えているミカルゲが指示を受け、念の力を俺とシロナに働かせる。

思考の中継、サーナイトやフリーディン等のエスパーポケモンの得意技であり、盗聴されないメリットがある。

『——それで？』

『俺が得た情報はアカギと言う名前、ギンガ団がハクタイの森を調査していた事、谷間の発電所からエネルギーを盗んだ事。これぐら
いか、幹部格はマーズ・ブルート・ジュピターと呼ばれていた』

俺が持ち得る情報全てをシロナに伝えたと、シロナは渋い顔を
する。

『既知の通り、ハクタイの森には虫タイプや草タイプが多く生息しているの。森の洋館と言う幽霊スポットではゴースやその進化系が生息箇所ね』

『ああ。寄っては来なかったけどな、コウキが異様にビビってたから』

『あら、コウキくんは幽霊が怖いんだ。カワイーな』

『話が逸れかけてるぞコラ』

『……こほん。それで森の洋館にはゴース種以外にも1体だけ別のポケモンが居た事が確認されている』

『同じゴーストタイプの……ロトムか』

そう、森の洋館の最奥に存在したテレビ。館事態が打ち捨てられてから、経年劣化しているはずなのに。そのテレビだけは不気味に明滅していた、そこから急に飛び出して来たのが……プラズマポケモンのロトム。

以前シロナに館の調査を頼まれ、踏み込んだ時の遭遇。初めて見るポケモンだったもんで、思わずゲットしてしまった。ロトムはシロナを通じて学会に提出され、ポケモンとして認証されたいらしい。らしいと言っているのは、俺はその頃ハクタイシティでのミスコンを満喫し、ホウエン地方に帰っていたからだ。『一部だけど……ギンガ団の目的が分かったわ』

シロナの漏らした呟きに、当然の如く驚いた。今の話の中に関連性を持った話題は……っ！　そういうことがよっ！

『ギンガ団としては膨大な電気エネルギーが必要だった。ロトムの噂を聞き付けて、ハクタイの森……ううん、森の洋館を調査していたんでしょね。プラズマポケモンと呼ばれるロトムの持つ電気エネルギーを狙って』

『しかしロトムはすでに俺が捕獲済みだった……だから谷間の発電所を狙ったわけか』

ただの馬鹿な集団ではなく……そこまで考えられていたなんて。

『ギンガ団は表向きには皆の為に新エネルギーを使いましょう……
って言葉を謳い文句にしている会社よ。社長……いえ、組織のボス
がアカギなの』

『あの美少女に盲信されている野郎か……！』
『話が逸れてるけど』

おつといけない。悔しさが口から漏れていたようだ。

『私はこれからもギンガ団について調べてみるつもり』

『はいはい、勝手に頑張っておくんなせ』

『何を言ってるの。貴方にも来て貰うのに』

……はい？

「ミカルゲ、もういいわ」

真面目の根源と言わんばかりの表情で、シロナはミカルゲをボ
ルに戻した。

こいつ、サラッと重大な事思わなかったか？

「何で俺が」

「チャンピオン権限を使うけど？」

「残念俺はハウエン籍だから余程の大事件でも起こさない限り治外法権だ」

「ついて来て」

「嫌だ」

「しょうがないなあ……守備範囲外にこんな手は使いたくないんだけど」

何の話だ——そう言いかけた途端、自分の目を疑った。あのシロナが、シヨタコンで甘い物に目がないシロナが、目を潤ませて豊満な胸を左腕に押し付けて来た。

「手伝って……欲しいな？」

色気で引き込もうってか。身体だけは無駄に育って——俺とシロナ、たった3歳しか変わらないんだが。

「何気色悪い事してんだ」

「私の色仕掛けが効かない……！？」

「ポケモンだって天敵相手に誘惑されても警戒するだけだぞ。何を言いたいかと言うと」

今だっ！ 自由な右手で腰のヒールボールの開閉スイッチを押す。

「イブ！ かみつけ！」
「う、受け止めてルカリオ！」

こんな所でバトル勃発。ヒールボールから飛び出したイーブイとイブは命令通りシロナに飛び掛かるが、シロナのボールから飛び出した刺客によっていなされる。

イブも空中でくると一回転、俺の足下に着地した。いつからこんな芸当ができるようになったのか、後で聞いてみよう。

イブは長い耳を大きく震わせ、尻尾をピンと立てて相手の動きを伺っている。

同時にシロナのポケモン——青と黒の体色かと思いきや胴のみ薄い黄色をしている。両手の甲や首のやや下からは白い突起が飛び出し、後頭部からは計四つの房が垂れている。

波動ポケモンルカリオのフォルムは人間に似ている、あちらもイブの動向を計っているだろう。『波動』の読めるルカリオは、無意識に相手の動き方を読んでいるに等しい。

今の応酬をせずとも分かっていた事だが、シロナのルカリオと俺のイブの間には圧倒的な差がある。このままバトルを続けるのは得策ではない。そもそもこんな所（ポケセン廊下）でバトルを始めたらジョーイさんから大目玉を食らうのは間違いない。

「戻れ、イブ」
「ブイ！？」

有無を言わずにヒールボール内にイーブイを収納した。レベル換算にて20は差がある、イブに負け戦をさせていい道理はない。

「俺は行かない。旅を楽しみたいんだよ」

「無理やり連れて行く、と言ったら？」

やれやれ、何で俺に執着するんだろうね。彼女と言い、シロナと言い。単に雑用が欲しいだけの癖して。

「クチートお願いします！」

「頼むよハヤシガメ！」

俺の左右から投擲された二つのボール。中から現れたクチートと木立ポケモンハヤシガメがルカリオと俺との間に立ちはだかった。

コウキの初ポケハヤシガメ。レベルは他の手持ちより高く、物理攻撃及び物理防御に優れたパワーファイター。

彼女のクチートについては語るまでもない、ギンガ団幹部のポケモンに渡り合う実力をその身に宿しているのだ。

「シロナ」

「私はこの地方を守る！それがチャンピオンの役目で——私の気持ち！」

「俺の意志は無視すると」

「それでシンオウ地方を守れるなら——無理にでも連れて行く！」

シロナの覇気は凄まじい。その鼓舞を受けてルカリオも構えを取る。このルカリオは例え2対1でも負けはしない。その事を俺は知

っている。

「そうか、なら」

ルカとイブが疲れているだろう、この現状。幸いにも、ルカリオは鋼タイプ持ちでそこまで素早くはない。

「シロナの恥ずかしい失敗談をいくつかこいつらに教えるでしょう。実はな、今は真面目なチャンピオンを装っているが、あいつと初めて会った時なんか」

「きやああああ！！ それだけは言わないで！」

「分かった分かった、言うのは止める。だから俺を連れて行く話も無しな」

「うっ」

「俺は今コウキと旅をしているんだ。偶然とは言え知り合った彼女の手助けも吝かではない、だがシロナ」

情けなど掛けずに問答無用で切り捨てる事にする。

「真夏のあの日！ 俺のアイスクリームを横取りしたお前だけは許さねえ！ タイプだと思って最初は我慢したさ！ だがな……それを利用し俺の財布をスツカラカンにしてくれたのはどこのどいつだったかな？」

「うう……それは言わない約束……」

「黙れ！ 何が『お姉さんと遊ばない？』だっ！ お前が一方的に

食ってばかりで支払いを俺に押し付けただけじゃないか！」

シロナは黙ってれば美人だ。だから初めて会った時、俺も騙されただ。上記のセリフを甘い声音で囁かれてな。

「あ、あの時はお財布を忘れちゃったのよ？ それに凄く暑くて…仕方なかったの」

「だからってスッカラカンにするまで飲み食いするか！？ だから体重が一気に3キロも増えたんだよ！」

「2.5キロよ！」

「体重増えたのは事実じゃねえか！」

「増えてない！ 成長しただけよ！」

「その年で成長？ 何処が」

「せ、背とか！」

「大して変わってないだろ」

「……とか」

「聞こえないな」

「……ああもう！ 胸が大きくなったって言うてるの！」

「栄養が頭に行かなかったわけか」

「ち、違っ」

「何も変わらないだろ。無駄乳空っぱ頭め」

「うっ……うっ……」

嫌な予感MAX。

「ルカリオ、サイコネシスでお前の主人の口にチャックしろ。主

人の名声を貶めたくないんならな」

「ル、ルカツ！」

「んゝゝっ！」

俺が言葉で負した場合、大概『うわあああああん！！！！』と泣きじゃくるので今回は先手を取らせて貰った。

毎回泣かれる度に隠蔽工作に走る四天王&俺が不憫でならない。

「コウキ、お前は先に戻ってな。俺はこいつ泣きやませないと四天王に制裁食らうから、ちよっと思って行く」

「はい、分かりました」

「御一緒しても構いませんか？」

素直に従ったコウキと違い、ニット帽少女はシロナの変貌に興味を持ったらしい。別に減る物でもないし、いいか。

「現シンオウチャンピオンの違う一面が見たいなら是非」

第九話／チャンピオンの素顔

ポケモンセンターの中庭。落ち着いたシロナ、無表情の仮面を被ったニット帽少女。その二人の間に、俺は腰掛けている。傍から見れば、両手に花だと言う輩もいるだろうが、両方共薔薇の花である。何が言いたいかというと、関わりと痛い目を見る。

「私ね、昔から神話とか歴史とかについて勉強するのが大好きだったの。今もチャンピオンやりながら考古学者やってるし」

神話、伝説。それらについて調べたければミオ図書館に行けばいい。あそこの蔵書量はシンオウでもリーグ本部の書庫（一部の人間しか入れない）を覗けば随一だ。

そういや本部の書庫に入れる事もあって、シロナはシンオウチャンピオンになったのかもしれない。神話を語るこいつの目は、本当に輝いているから。

「そのカイトはね、私の知らないジョウト地方やホウエン地方の神話について詳しくったの」

まあ否定はしない。エンジュジムのマツバヤルネジムのミクリに叩き込まれただけなんだけどさ、無理やり。

「初めて会った時はさっきのアイス事件なんだけどね。その時の力

イトから見た私の印象って最悪じゃない？ 取り成すの大変だったんだから」

「まだ天敵だと言ってるだろうに」

そう反論しても、シロナはくくつと含みを持たせて笑っただけだった。

そんな中、ニット帽少女が律義に手を挙げて質問の構えを取った。

「話を聞く限り気軽に話をされる間柄とは思えないのですが」

「うん、だから言ったじゃない？ 取り成すのが大変だったってね」

その答えに戸惑い、彼女から漏れた溜め息を肯定とも否定とも取らずにシロナは語り続けた。

「どう取り成したかは省くけど、いろいろあって普通に話をしてくれるレベルの友好度には回復した」

「ゲームみたいに言うなよ」

「こっちに来たのはジョウトのウツギ博士に頼まれたからとか、ハクタイのミスコンを見に来たとかいろいろ聞いた」

「ちなみにミスコンは昨日付けで終わってます」

「知ってるさ！ ミスコンの日にちを間違えたのは俺なんだから！」

ああ、見たかったなあ。きっとハクタイだけじゃなく、周辺の町の美少女とかも参加してたんだろうなあ。

「ふとした事かな、カイトが神話に詳しいって知ったのは」

「四天王ゴヨウとの話を盗み聞きされたらしくてな。ホウエンのレジ三体が居た遺跡同様、この地方にある三つの湖にも何か伝説のポケモンが居るんじゃないか……って話をな」

「三つの湖……私と貴方が出会ったシンジ湖。トバリシティ・ノモセシティ間にある湖リッシ湖。シンオウ北部キッサキシティの横に位置するエイチ湖」

「私は教えてあげた。三大湖の守り神、エムリット、アグノム、ユクシーについてね」感情の神エムリット、意志の神アグノム、知識の神ユクシー。シンオウ地方の神話では、そう伝承されている3匹。さすがに伝説のポケモンは無理だと予めナナカマド博士に伝えがあるので、この三体含む伝説のポケモン達については各地の情報を集めてデータ化。それをポケモン図鑑に載せたらしい。

「シロナの情報提供もあり、キミらの図鑑にはエムリット・アグノム・ユクシーのデータが予め登録されているはずだ」

「それと引き換えに私はジョウト地方やホウエン地方の神話を教えて貰ったの。特にスイクン、ラティオス・ラティアスの話は大好きよ！」

「勝手に反芻してる」

「連れないな」

口を尖らせたシロナは外見とは不相応に子供っぽい。しかも自覚が無いから質が悪い。

と、この話に対する興味をそられたのかニット帽少女が図鑑を弄り始めた。貪る様に図鑑の説明文を読み取る彼女の瞳は実に真っ直ぐ。研究者にでもなるつもりなのか。

「カイトさんっ！」

静かな時間を壊しに来たと思えないコウキがやって来た。息を切らせるコウキ及びシロナ、シロナの方は性的な意味なので軽くはたいて置く。

「何かあったのか？」

「急いで来て下さい！」

「何で俺が……とか言ってる場合じゃ無さそうだ。兎に角案内しろ」
「はい！」

コウキに先導され、中庭、廊下、ポケセン出入り口と進み、案内されたのは。

「何じゃこりゃ」

ハクタイジムにわらわら纏わりつく、大量の赤い物体。一言で伝えるなら、ずばりノワキの実。うん、ただの芋虫ポケモン、ケムツソだ。但し数が異常。

「いや、悲鳴が聞こえてこの状況を把握した後すぐにカイトさんを呼びに言ったので……」

あ、今のは独り言で返答を求めてなかったから気にしないでいい。
そもそも俺を連れて来て何がしたいんだよ？

「えっ？ 困った時はカイトさんを頼れって両親とナナカマド博士
が……」

だいたい予想の範囲内だ。たださすがにこの事態はそう簡単に何
とかなる状況じゃないんだけどな。

ひーふーみーよー…… 目視で確認しただけで20〜30くらい。

こう言った場合、ポケモン協会の派閥に所属する捕獲専門組織又は
ポケモンレンジャーが颯爽と現れて事件を解決してくれるのが普通
なんだけど。まだかー？

「カイト！」

真面目な顔つきのシロナとやや焦った表情のニット帽少女がやつ
て来た。シロナよー、ポケモンレンジャー的な何かはまだか？

「来れないの。シンオウリーグでは、ホウエン地方みたく各町にレ
ンジャーを常駐させる予算なんてないの！」

いきなり現実的な話かい。今度からシンオウリーグじゃなくて、

貧乏リーグと呼ぶかなってそうじゃない。

「じゃあ、どうするんだ？」

スウッとシロナが大きく息を吸い込む。キリツと表情を引き締め、吐いたセリフは、俺を驚愕させるに値する物だった。

「シンオウリーグチャンピオン、シロナが命じます！ ポケモントレナーカイト、今すぐこの事態を収拾しなさい！」　こんな事にチャンピオン権力を行使していいのだろうか。そんな疑問が脳裏を掠めたが、この状況を解決するのが先だろうね。全く、シロナの奴は問題を他人任せにする所なんて初邂逅から全く変わっていないな。

「さつさと沈黙化と行くか。今日は出し入れが多くですまないが、頼むよ。ルカ、イブ！　お前達の力を貸してくれ！」

腰のクイックボール、ヒールボールを素早い手付きで取り外しケムツソの集団に向かって投げ付ける。中から要石に繋がれ地面から少し浮いている封印ポケモンミカルゲ、尻尾をピーンと立ててケムツソを威嚇する進化ポケモンイーブイが飛び出した。

「ルカはおにびをばらまいてじわじわ弱らせろ！　イブはでんこうせっかで攪乱だ！」

指示を受けた2体が同時に動く。ルカは自分の周囲に大量の青白い火の玉を作りだし、炎の苦手なケムツソ達を牽制する。その間を最高速に達したイブが走り抜け、統率の乱れ及び指揮系統の混乱を狙う。これだけの数だ、群れのボスが居るはず。

「イブ、砂を巻き上げる！ ルカ、あくのはどう！」

イブには暗にすなかけを命じ、ルカには普通に攻撃の指示を下す。生物は何であれ、目先の危機を回避しようとする。それは目の前のケムツソ達も同じ。ポケモンは人間の言葉を理解する、その逆は叶わないが。一匹の、他の個体より僅かに（10cmぐらい）大きいケムツソが、ミカルゲを拘束しようと糸を吐き掛けた。

イーブイの起こした混乱は嘘のように納まり、ケムツソ達はルカに向かって“いとをはく”集団行動に出た。糸は絹に見紛う程白く細い。このケムツソ達の進化系、『カラサリス』『マユルド』の繭にも使われる。当然それなりの強度を持ち合わせていて、一度絡み付いたら抜け出すのは至難の技だ。

が、ルカの寸前で糸の波は固定された。あくのはどう——そう指示を出した。ただ、それは仮初。本当に使用したのは、サイコキネシス。

「今だイブ！ あのケムツソに向かって、でんこうせっかだ！」

砂を巻き上げる事で自分の位置を眩ましたイブ。ヒョコツとケム

ツソの集団中から姿を現し、一気に加速。スピードを利用した体当たりでリーダーケムツソを弾き飛ばす。

「たくっ——こんな捕獲方法、初めてだ！」

そう毒づいて空のモンスターボールをあるだけケムツソ達に投げ付けた。低レベルだろうケムツソ達は直接攻撃を受けずとも、火傷により弱っていた。モンスターボールでも面白いように捕まる捕まる。転送先であるナナカマド研究所の惨状は想像したくないが。

「ルカ、サイコキネシスはもういいぞ」

みょーんと無機質な鳴き声が聞こえ、滞空していた系の波が落下する。芋虫ポケモンが排出する系は放置すればそのまま自然分解される為、さして問題はない。問題なのは、

「ケムーっ」

群れを失ったと言うのにたった一体で俺、ルカ、イブを威嚇するリーダーケムツソ。お尻の毒針を向け、唸ってる姿にはプライドの高さが伺える。このままゲットして研究所に送ってもいいんだが、この状態だと博士や助手の方々を毒針で刺す恐れがある。「ブーっ！」

ゲットした時から大して時が経っていないと言っのに強気なイーブイ。全身の毛を逆立てて威嚇する姿はゲットされる前の逃げ回っていた時とは別物だ。一応主人である俺を守ろうとしているのは分かるのだが。

「イブ、ちよいと下がってな」

「ブイツ！？」

「ルカ、イブと遊んでやってくれ」

ミカルゲに対してトラウマでもあるのか、『遊んで』の部分聞いた途端イブは逃げ出した。それを追いつくか追いつかないかギリギリのスピードで追いかけるルカ。ひとまずあの二匹は放って置く。

「ケムーっ」

相変わらず威嚇を続けるケムツソ。うーむ、どうするか。そう思案した時、間の抜けたぐーと言う音が聞こえた。目の前から。

「ケ、ケムーっ」

ああ、そういう事ね。えーとあれはどこだったかな？ 大切な物を入れた所の……奥の方。あった、ポロックケース。シャカシャカと振って中から出たのは立方体のお菓子。原料は木の実で、ホウエ

ン地方ではコンテストでのコンディンション調整に使われる。金色に輝いているのはブレンド名人と呼ばれる人と一緒に作ったからなんだけど、その話は割愛。

数個零れ出た金色ポロツクに対し、くんくんと鼻がひくついている。いや、お前の毒針と違って毒とか入ってないから。

「……ケムケムケムケムっ」

食べた。バリボリバリボリと凄い勢いで平らげた。

「ケムーっ」

「あー、まだあるから心配すんな」

贅沢な奴め。そう思いながらもポロツクケースを振ってポロツクを取り出す。今度飛び出したのは青いポロツクに空色ポロツクが飛び出した。それを残さず食べ切るリーダーケムツソ、そのサイクルを何度も繰り返しポロツクケースが若干軽くなって来た頃。

「ケムー」

随分と刺々しさのなくなったケムツソは何故か俺の肩に乗っていた。いや、気付いたら肩に這い登られていたんだよ。まずはシロナに文句を言いたい所だが、それより先にポケナビを取り出してエントリーコール機能呼び出す。相手は当然ナナカマド博士。

『カイト！ このケムツソの大群は——』

「そいつら全員腹を空かしてるのでたっぷり餌を与えて下さい。多分食ってない期間が長いと思うのでふやけさせたポケモンフーズが適切かと」

『だから説明を——』

「よろしくお願いします、ナナカマド博士」

そのままブチツと強制的に通話を切り、ポケナビの電源も落とす。これで再度連絡して来るだろうナナカマド博士を黙殺できる。転送されたケムツソ達についても、これで大丈夫だろう。

「事態は収拾したよ。シンオウチャンピオンさん」

嫌味たっぷりに吐き捨てた。ミカルゲとイーブイの戯れ合いを横目にシロナの出方を伺う。依然として涼しい表情で何とも思っていない感じが腹立たしい。シロナにバトルを挑んで分らせるか？ 馬鹿馬鹿しい。負け戦を仕掛ける程愚かではないさ。

「はあ……これで貸し五な」

「ええ。返せる時に纏めて返却予定よ」

「テンガン山周辺の生態系調査、ズイの遺跡調査、キッサキ神殿の調査、森の洋館調査。で、今回の事件と」

「報酬はしっかり払ってるのに」

「シンオウ地方中を駆けずり回らせたあげく、報酬がミカルゲのタ

マゴでたまるか」

「えっ？」

割り込むようにコウキが声を上げた。驚いて思わず声が出たみた
いだが、驚く部分なんてあっただろうか？

「か、カイトさんのミカルゲって……まさか」

「ああ、言ってなかったか。シロナに渡されたタマゴから孵ったん
だ、俺のルカは」

そろそろイブが追いつかれそうなので、両者に戻るよう指示を出
した。息を切らしてるイブを抱き上げ、ルカは俺の背後に回って未
だイブを脅かし続けている。

「もういいんだ、ルカ。ボールの中で休んでくれ」

クイックボールにミカルゲを収めた後、同じようにイーブイもヒ
ールボールに終ってベルトに戻した。残ってる問題は——右肩のケ
ムツソ。落ち着いたし、さっさとゲットして研究所に送るか……。

「よし、ケムツソちゃん。お前もナナカマド研究所へレッツゴ

ー」

「ケムっ」

「へっ？」

ピカーンと俺の右肩が光る。正確にはケムツソが光っているのだが。うによーんと縦に伸びたら結構長いケムツソは、楕円形の繭に引き籠もってしまった。変態（俺に非ず）したケムツソ、いや白繭のポケモン。名をカラサリス、蛹ポケモンでケムツソの進化系だ。

「この子がカラサリスですか」

ニット帽少女は物珍しそうにカラサリスを眺め、図鑑を開いた。

『カラサリス』

さなぎポケモン

高さ

0.6 m

重さ

10.0 kg

ケムツソの進化系。糸を木の枝に巻き付けている。糸に付いた雨水を飲みながら進化の時を待っている。

「虫ポケモンは進化が早いって言うけど」

「ここまで早いなんて思いませんでした」

いくら何でも早過ぎやしないだろうか。ゲットする前に進化とか初めて見た。それにしても結構ずっしり感が、スーパーで売ってる

10kgの米を持ち上げたような。それが一番近い。

「取りあえず、ゲット——」

「サリッ」

いきなりカラサリスが跳ね飛び俺にたいあたり。ちょうど顎を直撃し、あまりの痛みにモンスターボールを取り落とす。

「……ったー。何すんだこの米俵」「ガブリアス。カイトにかえん——」

「ストップ、俺が悪かった」

米俵呼ばわりがシロナの癪に障ったのは明白。手に掛けたボール中のガブリアスに、かえんほうしゃを喰らっては骨も残らないのは明白。たいあたりしながらきつちり手の上に着地したカラサリスへの復讐を誓い、誤魔化す為に撫でる。

「本当にそういう事だけはやめて。ポケモンを軽んじる者はこのシロナの逆鱗に触れたと同意」

むしろガブリアスの“げきりん”なのでは——そうつつこめはしなかった。俺も命は惜しい、わざわざシロナの逆鱗に触ろうとはしない。

と、シロナの右腕から呼び出し音。それはつい最近ジョウトで発

売されたポケギア（正式名称ポケモンギア）の最新型。しかし青でもピンクでもなく、シロナのトレンドカラーである黒塗り。また高い金を出して特注したのかよ。

「ゴヨウね」

『チャンピオン。例の件、調査終了しました』

「分かった。すぐに戻る」

俺は何も聞いてない。例の件なんて聞いてない——よし、聞いてないな！

奇行の目立つ俺を横目にシロナはモンスターボールを展開。ぽちやりとして見目は愛らしいが能力は凶悪。トゲピーの名残である赤と青の模様がお腹に浮かんだ祝福ポケモン、トゲキッスヘシロナは飛び乗った。

「それじゃ。また機会があったら会いましょう」

「はい」

「は、はい」

冷静に返答するニット帽少女と、上擦り声で返事をするコウキは端から見たら対照的。コウキの盲信もいつか辞めさせないとな……こいつに近付かせるのは性的な意味で危ないし。

「それとカイト」

「嫌だ」

「まだ何も言っていないのに」

「何も言わずに帰れ」

「今度は有無を言わせずに手伝わせるからそのつもりで」

「おいっ!？」

シロナの傍若無人な態度に堪え切れずつつこもつとした。が、既にシロナの姿はない。トゲキッスの“しんそく”を使ったらしい。

「よし、シロナもいなくなった。お前、落とし前をどう付けるつもり——あれ？」

手中のカラサリスは何処へ。シロナと駄弁ってる内にどっかに行つたのだろうか。

『グッドタイミングです。このままジム戦をして来ます』

『あ、うん。頑張つて』

『サリッ』

『ポチャー?』

『サリー』

『ポチャー!』

空気になりつつある自分を慰めながら俺もハクタイジムへと向かつたのである。

第十話／映える緑のポケモン使い

「やっと来ましたね」

一応ポケモンセンターで回復してからジムに入ったら、呆れた様子のニット帽少女が迎えてくれた。その横のサーナイトはぱちんとウインク。主人と違い茶目っ気溢れているようだ。ラルトス系統だからいいものの、ルージュラだったらトラウマになり兼ねない。

それにしてもおかしい。彼女なら既にジム戦を始めていようものだが、どうやら俺を待っていた様子。サーナイトは出ているのにバトルは始まってない。そもそもジムリーダーどころかジムトレーナーもいない。黒服さんも。

「サーナイトにも探らせているのですが、こう行ったポケモンジムには念波を妨害するよう設計されているようです。悪タイプの無効化を参考にして」

なるほど、と今更ながら納得してしまう。エスパーポケモンを犯罪に利用する人間は少なくない——カントー地方を蹂躪し、ジョウト地方のラジオ塔を乗っ取ったロケット団が良い例だ。奴等はスリプ種・ケーシィ種の“さいみんじゅつ”レポートを始めとするわざを用いてあらゆる悪事を成した。それを見咎めた後にリーグチヤンピオンとなる一人の少年に潰された。その話を聞いた時、いくら悪がはびころうと最後は滅びる運命なんだと悟ったものだ。

「それじゃ別方面で攻めてみるか。イブ、頼む」

捕獲戦の疲労を感じさせないくらい元気に飛び出したイーブイの頭を撫で、音による索敵——要は聞き耳を立てるように命じた。逃げ回っていた時に得た能力、とまでは言えないがイブは気配の察知に秀でている。

サーナイトの特殊な探知でダメなら——普通に『音』で探すのも方法としては有効。

「ブイツ！」

「見つけたか！ ルカ、あくの——」

「サーナイト、10まん——」

イブの尾が矢印代わりに前方の木の陰を示した。ボールからの出現と同時にミカルゲは闇色の球を創造。同刻、サーナイトは両腕に弾ける放電帯を織るように纏わせ、彼女の両腕は金に見紛う程明るく輝いた。

「わーっ！ 待った待った待ったーっ！！」

イブの示した場所から現れたのは——明るい茶髪の女性。黒のアンダーウェアの上に濃緑色のポンチョ、オレンジ色の半ズボンを身に着けている。ジムリーダー……なのだろうか。それにしても。

「貴女に惚れまし」

「サーナイト、対象変更です。この人に最大出力で10まんボルトを」

黄金色の閃光が俺に迫る——容赦ないな畜生！

接触したら痛いじゃ済まない。何より焦げ臭くなつての退場は肉体にも精神にも大ダメージは必須。

「ルカ、軌道修正だ。10まんボルトへあくのはどうを撃ち込め！」

闇波動と光雷が混じり合い爆風が生まれる。育てに自信のあるルカのあくのはどうをタイプ不一致技で相殺したサーナイト。多分、俺が思っていたよりレベルが高い。恐らくはルカと同格。そこまでサーナイトを鍛えた彼女の手腕にも舌を巻かざるを得ない。「ストップ！ あたしのジムで壮絶な戦いは辞めて！」

やはりこの茶髪女性がジムリーダーか。しかも口調やテンションからしてシロナと同じ匂いがする。再度口説くのは止めよう、俺の命的な意味で。

「貴女がジムリーダーですか。何故そんな所に隠れていたのですか？」

ハクタイジム内は木、花、草とびっしり生えておりジムリーダー

の得意とするタイプが簡単に読める。草タイプのエキスパートであるのは間違いない。

「挑戦者来ないからジムの皆と隠れんぼしてたの。そしたら途中で眠っちゃったみたいで、飛び起きたらいきなり殺気を向けられて。わざを撃たれそうだから慌てて出て来たわけよ」

俺達は言葉を失った。ジムリーダーはこんないい加減で——良いのだろっ、協会が認めている限りは。命綱無しの細道渡りをやらせるジム、氷で覆った床を利用してスケートやらせるジム。暗中を手探り状態で進ませるジムに回転扉で進路を制御するジム。聞く所によれば、カントータマムシジムもこのジムと同じような様相らしいし。

「ジム戦をお願いします」

「いーよ」

「じゃあ俺も」

「ダメ。うちは基本的に一日一人。あたしが一戦で燃え尽きちゃうタイプだからね」

理不尽過ぎる。フエンジムのアスナも熱かったが、目の前の女性程常識が欠落してはいなかった。仕方なく、明日の予約を入れて帰ろうか思案していると。

「でもわざわざ来てくれたのを帰すのもね。そうだ、ダブルバトル

にしない？ あたしは二匹、きみとその女の子で一匹ずつ。勝てば両方にバツジあげるよ」

うーむ。俺としては嬉しい提案だけど、彼女とのタッグも（一応）始めてじゃないし。でも足を引っ張りそう、当然俺が彼女の。

「分かりました」

「あれ、いいのか？」

「これから一緒に旅をするのです。息を合わせる良い練習になります」

「……………はい？」

え、一緒に？ この子が？ 何で？

しかし浮かぶ様々な疑問押し殺した。止めなければ、詮索する事を。手伝つとシロナの前で宣言したのを利用された、そうとしか思えない。ただ前言撤回する程、俺のプライドは小さくないのだ。彼女の言には従うべきである。

「分かったよ。旅の間コウキ共々よろしくな」

「はい」

笑うと可愛い——年相応の笑顔に一瞬見惚れてしまった。

ニット帽少女が何を背負っているのか、大したものを背負わない俺には分からない。けど、巻き込まれない程度に彼女を助けるくらいいけないさ。この笑顔の代金ぐらいにはね。

「いくぞルカ！」

「いきますよサーナイト！」

気合いを入れる為にポケモン達を鼓舞。まずは確実にこのジムリーダーに勝って――

「ちよつと待ったーっ！！」「ストップ！ そのサーナイトにミカルゲ見るからにレベル高そうだからダメ！」

「は？」

思わず間の抜けた声が出る。ジムリーダーが挑戦者のポケモンを制限していい規約なんかあっただろうか――って冷静に考察する場合じゃない！

「いくら相性悪くてもレベルが同じくらいなら許せる！ けど圧倒的レベル差は許せないのよ！ 一方的な戦いはあたしのポケモン達に失礼でしょ！」

シロナよりネジが抜けた人間なのは確定した。俺のルカ及び彼女のサーナイトで倒せるレベルのポケモンしか持っていない事も。相手は草タイプだ。サーナイトの高い特攻から繰り出される特殊攻撃、ルカのやや高めの物理攻撃力。どちらでも苦戦はしないはず。

「それとも、強いポケモンを使わないとあたしに勝てない？」

ははっ。こんな安い挑発に乗る馬鹿なんていないさ。とつとレベル差で片付ける――

「……いいでしょう。下がちなさい、サーナイト」

「乗った！ 挑発に乗っちゃった！」

「そうこなくちゃね！」

「ポツチャマ、貴方の出番です！ ほら、貴方もミカルゲを戻して下さい」

「レベル差で……圧倒すればいいのに」

年齢通りの子供っぽさに微笑みたくなるのと同時に激しい不安が浮かんで来た。わざわざ草タイプ相手に水タイプを出す、それは彼女の自信の表れなのは分かってる。

力無くル力をボールに納め、足下で尻尾を振っているイブを抱き上げた。捕まえたばかり、イコールイブのレベルは高くない。“かみつく”が使える辺りレベル30前半が妥当な所である。

「バトルフィールドはこっちよ」

「行きますよポツチャマ」

「ポツチャマ！」

ジムリーダーに続くニット帽少女、それに続いてペチペチ歩くペ

ンギンポケモンポツチャマ。俺達は今までジムの入口で小競り合いをしていたので、ジム戦を行うには移動しなければならない。コウキもカラサリスを抱えて付いて来た。何処に行ったと思ったたらコウキが連れてたんだな。復讐はいろいろあつて疲れたから止める、感謝して欲しい。

バトルフィールドはジムのほぼ再奥。標準的な草原フィールドだった、当然モンスターボールを意匠したラインを引いても見えない代わりに、そこだけ草が植えられておらず土肌が覗いている。ラインの石灰を使わない、何とも草タイプのジムらしい様式だ。

聞き及んだカントータマムシジムのフィールドもこのような様式だと尊敬する。ジムリーダーが正面なら感嘆する。

「チェリム、ロズレイド！」

「あれがチェリムにロズレイド……」

観客としてバトルフィールド横のベンチに座ったコウキが驚嘆する。ロゼリアを進化させる『ひかりのいし』は滅多に市場に出ない故にひかりのいしで進化させるポケモンを所持しているトレーナーは少ない——シロナもロズレイドは持っていたはず。さらにトゲキッスもひかりのいしで進化した姿。彼女のトゲチックもひかりのいしさえあればいつでもトゲキッスになることだろう。

「絶対に勝ちますよポツチャマ！」

「チャマ！」

「いくぞイブ！」

「サリッ」

サリッ……？ ブイーとイブは俺の腕の中で小さく鳴いた。あれ？

「ただいまよりバッジを賭けた公式戦を始めます！ チェリム＆ロズレイド対ポッチャマ＆カラサリス、始め！」

なんだってんだよおおおお！！！！「先手は取らせて貰うわ！ ロズレイド、ポッチャマにマジカルリーフ！ チェリムは“にほんばれ”よ！」

「ポッチャマ！ バブルこうせんで撃ち落として下さい！」
「……………言う事聞くなり糸でも吐いとけ」

ジムの天井付近に裂け目が出来たかと思うと両側にスライドし――
――燦々と太陽が照り付けて来た。なる程、とことん草タイプが戦い易い造りになっているようだ。同時に相手のサクラポケモンチェリムの姿が変わる。ネガフォルムと呼ばれる蕾の状態からポジフォルム、つまり花開いた状態へ。更にチェリムの特性『フラワーギフト』までも発動し、相手のロズレイド及びチェリムの物理攻撃力・特殊防御力は増強される。

そして真っ向からぶつかる泡の連弾と魔法の葉刃。幸いにもにほんばれ発動前に出された技なのでギリギリ相殺だ。晴れた今となつては特殊技でごり押しされ負ける未来しか見えない。

「チェリー！？」

「ロゼッ！？」

あれ？ ロズレイドとチェリムに見覚えのある糸が絡み付いて…
…。

「アシスト感謝します！ ポツチャマつばめがえし！」

助走を付け跳んだポツチャマが空気を切り裂いてロズレイドに突っ込む。飛行タイプの必中技、どうやらわざマシンで覚えさせたようだ。

「ロズレイド！ マジカルリーフよ！」

「遅いです！ いとをはくで身動きの取れない今、反撃は出来ません！」

虫ポケの吐く糸は粘着性に富んでいて、もがけばもがく程絡み付く。ロズレイドとチェリムは抵抗を試みじたばたしているが、それは逆効果でしかない。抜けだす為に暴れる二匹にジムリーダーの指示は届かない。防御も満足に出来ずロズレイドは弾き飛ばされた。

「カラサリス、たいあたり」

毬のように弾んでチェリムとの距離を詰めるカラサリス。弾む旅にカラサリスの身体は加速し——弾丸の如くチェリムに突進した。ロズレイド同様弾き飛ばされるチェリム。フラワーギフトは特殊防

御を高め物理防御に関しては素の状態、つまり。

「もう一度つばめがえし！」

「もう一度たいあたりだ！」

同時に追撃の指示。同時に跳ね上がった二体は弾かれ地に伏したロズレイドとチェリムに狙いを定め、加速度を利用したつばめがえし&たいあたりを喰らわせた。ロズレイド、チェリム共に防御は平均以下。が、それを下回る攻撃力のポツチャマ及びカラサリスで到底仕留められるとは思わなかったが――

「ポツチャマ、つばめがえし！」

三度主人の指示を受けペンギンポケモンは起き上がったとした桜ポケモンに突進。チェリムの軽い身体は宙を舞いジムの側壁に叩き付けられた。

そのまま擦り落ちるチェリムは目を回し、二度つばめがえしの直撃を受けたロズレイドも立ち上がる事はなかった。

「チェリム、ロズレイド戦闘不能！」

審判の宣告によって勝利は確定した。まさかカラサリスで……とゆーかこれはポツチャマの戦績だな。ポツチャマ万歳飛行技万歳。と、審判はクロガネジム同様黒服さん。カラサリスが勝手に出場

した衝撃で気付けなかったが。「あっちゃー……そっちのイーブイ
じゃなくてカラサリスが出て来たから勝ったと思ったんだけどな！
これじゃ制限付けたあたしがバカみたい」

「何を今更」

言つとくが喧嘩を売ったのは俺じゃない。審判をやった黒服さ
んである。当然目の前のアホっぽいジムリーダーの怒りを買ひ、チ
ョークスリーパーを掛けられている。あ、落ちた。

「全く失礼ね……。はい、これがフォレストバッジよ」

俺と彼女に一つずつ、同じバッジが授与される。イブを抱えたま
まで受け取れるはずもなく、一旦彼女に二つ受け取って貰ひイブを
ボールに戻してから改めてバッジを手にとった。これでシンオウ二
つ目のバッジゲットだ。

「ん？」

「あつ」

ピカーン。突然背後から眩い閃光が襲った。数十分前に体感した
あの光——進化の光だった。光が強いのは当然、今回は二匹同時な
のだから。ポツチャマの倍の身長を獲得したペンギンポケモンポツ
タイシは体格が立派になり肉弾戦でも活躍するだろう。

その隣り、カラサリスから羽化した蝶々ポケモンアゲハントがゆ
っくりと滞空していた。ゲットもせずに連続進化とか初めて見たん

だけど。いや、ゲットしてからの連続進化を見たわけじゃないが。
ニット帽少女は図鑑を自分のポツタイシに、コウキはアゲハント
へと向けて開いた。

『ポツタイシ』

ペンギンポケモン

高さ

0.8 m

重さ

23.0 kg

ポツチャマの進化系。どのポツタイシも自分が一番偉いとする為
群れを作る事は不可能だ。

『アゲハント』

ちようちよポケモン

高さ

1.0 m

重さ

28.4 kg

カラサリスの進化系。見た目に依らず攻撃的で花粉集めの邪魔をす
ると細長い口を突き刺してくる。

「ポツタイシ。これからもその調子で頑張らましよう？」

「ポタイッ！」

「頭が重い」

「ふぁん？」

「そんな『やぁん』みたいなノリで鳴かれても。ヤドンじゃあるま

いし」

「ふぁーん」

頭に乗るなと言つても言う事聞かない。ゲットしてないし、バトルの時とは勝手が違って困る。とりあえずアゲハントをどうしようか考えていると。

「いいじゃないですか。その娘も連れて行けば」

「手持ちが一杯。そもそもゲットされてくれな——その娘？」

「見れば簡単に分かる事でしょう？ その子は女の子です」

確かに羽の模様は♀のそれだった。や、ホウエンに居た時はケムツソ捕まえなかったからいまいち分らないけどな。さて、手持ちの性別比が2：5になってしまったわけだが。二体しかない♂とはこれからも愚痴を語り合おう。女に囲まれた男って意外とストレスが堪るようだから。

第十一話／心が触れ合う場所

「レリックバッジ」

「ゲットです」

自転車を借りてサイクリングロードを下り、207番道路を直進し、テンガン山内部を突き進み辿り着いたヨスガシティ。ここではギンガ団の連中も事件を起こしてはいないようで、俺とニット帽少女はヨスガジムに挑戦。そしてストリート勝ち、どう見てもミカルゲとクチートで完封です本当にありがとうございます。

ちなみに妙齡の美女だったので口説いたらハヤシガメのエネルギーボールを喰らった、シンオウジムリーダーは半分が女性なので残り二人に大期待。

「ふぁーん」

「ブイ」

コウキの頭を止まり木代わりに使っていたアゲハントのリサ——カラサリスの一部を擦っただけだ、気にすんな——が定位置こと俺の頭に再び乗り一足先にジム戦を終えた彼女の膝上で丸くなっていたイーブイが飛び付いて来た。ジム戦はルカで完封したので、イブにもましてやりサにも出番はなかったのである。ルカ、イブと順に収納しボールをベルトに戻した。俺の頭に掛かる負荷はいつ減るのやら。

「ブイゼル“みずてつぼう”！」
「モウカザル“マツハパンチ”！」

ジムを出てすぐの所でバトル勃発。オレンジ色の毛並みが映えるブイゼルの胸部に拳が突き刺さった。ヒトカゲ種同様尻尾先に火を灯したやんちゃポケモンモウカザルである。

「ブイゼルッ！」
「よっしゃあ！ オレの勝ちだな！」

緑のマフラー。白とオレンジのボーダーシャツ。特徴的なクロワッサンヘアー。モウカザル。それぞれの断片的な情報が一人の人物を構成する。

「ジュン！？」
「おー？ コウキじゃねーかつ。それにカイトも一緒かよー……………」
「…誰？」

コウキ、俺と順に視線を巡らせ最後にニット帽少女で止まる。その言葉に今まで名前を聞いていない事に気付く。知ったら後戻り出来ないような気がするんだけど。

「名乗りたくありません。特に貴方達のようなだらしのない人には」「んだとーっ!？」

「どうどう、落ち着けジュン」
「オレはポニータかよ!？」

相変わらず気性の激しい奴だ。親に似たんだろうか。コウキとジュン、足して2で割れば丁度良いかもしれないな。

「そういえば、貴方『達』ってどういう事なの？」
「それは……」

コウキの疑問に「貴方」とまずはジュンを指差すニット帽少女。ジュンは語尾を伸ばしたり雰囲気からだらしないと思われがちだがかなり几帳面なんだよな。コウキとジュン、二人の本質はほぼ同じだと俺は思う。おとなしいコウキと荒々しいジュン、ただ性格のベクトルが反対なだけだ。

「そして貴方」とニット帽少女は俺に指を突き付け——俺え!？
「貴方は女性に対してだらしなさ過ぎです。もっと真面目に行動して下さい」

年下に説教喰らうとか年上の威厳皆無じゃないか。俺の周りにいる子供は年上（主に俺）に対する扱いがなってないな。あーあ、ホウエンに帰りたくなって来たぜ。意図せずジュンを加えたコウキ一行は取りあえずポケモンセンター食堂にて近況を語る事となった。俺とコウキが図鑑完成の為に旅を始めた事、ジュンがヨスガジムに挑戦しに来た事等他愛のない雑談を続ける。

そういやコウキの図鑑を見て気になっていたんだが、ジュンはジュンなりにポケモン図鑑を完成させようと捕獲していたようだ。三つの図鑑は連動中、ジュンが捕まえた場合コウキが捕獲する必要はなくなる。図鑑を埋める為に意図して捕獲を始めたのはつい最近らしいけどな。各地を飛び回るジュンが図鑑完成に協力してくれるのなら、これ程心強い事はない。

「ま、それは置いてよー。久しぶりにバトルしようぜー」

「えーっ……僕は研究者志望だからバトルは得意じゃないし……」

「んじゃあお前！」

「お断りします」

「仕方ないかー……カイトでいいぜー！」

「そんな頼み方だと断るぞ」

しかし断った所でジュンは退かない。コウキは気遣い、ニット帽少女は最初から眼中にない様子。そういや正面にジュンの相手をした事はなかったな、確か。

いつも持ちじゃないくて研究所のポケモンでお茶濁してたし。ジュンって乗って来ると性格変わるし。

▼▼▼

一同ポケモンセンター外のバトルフィールドへ。公式戦同様均した土に石灰でラインを引いてあるだけの質素な物。バトルをするには十分だけどな、ただ都会だけあってフィールドは一つだけ。土地をそんなに確保出来ないからだろうが。

「ポニータ戦闘不能！　又オーの勝ち！」

ちなみにこういう所にはそれなりにバトルに精通した人間が集まるので自分から審判を買って出してくれる人も多い。今審判をやっているのは初老を迎えた……“ベテラントレーナー”の方だろう、多分。こういった場所からトレーナー同士の交流が始まって行く、美少女が見ている事を願うフィールドに足を踏み入れる。

「形式は」

「3対3のシングル勝ち抜き戦だーっ！」

ジュンが予め決めていたルールを審判に告げる。鷹揚に頷くと俺とジュンにポケモンを出すよう指示して来た。さーで、いつものように先発は弱点無しと言う素晴らしい耐性のミカルゲで行くか、それとも。

「リサ」

「ふぁーん？」

「戦ってみるか？」

「ふぁーん」

意味合いとしては……否定だろうか。戦いたくないわけじゃない、ただ相手が分からないから今は様子を見たい、そんな感じかね。そ

れなら、ハクタイジムでもヨスガジムでも出番のなかったイーブイで行こうか。

「疾れ、イブ！」

「いつけえ！ モウカザル！」 モウカザルVSイーブイ。相性の関係上、イブは圧倒的に不利なのは明確。しかし勝ち抜き戦の為入れ替えは出来ない。さっきのバトルを見たが向こうはイブの弱点を突けるマツハパンチを覚えている。それ以外にモウカザルの自力習得技で警戒する必要があるのは“かえんぐるま”“ちょうはつ”くらいか。但しナナカマド博士の授与したポケモンは自力習得しない技——ポツチャマならあくび、ナエトルならばかぢから、ヒコザルなら“かみなりパンチ”と言った技を教える、当然警戒しなければ。

「まずはモウカザルVSイーブイ！ 始めっ！」

「モウカザル！ マツハパンチだ！」

開始の指示と共にジュンは先制攻撃の指示を出す。予想通りのマツハパンチ、だが距離の空きを無視してはいけない。いくらイブが格闘技に弱くモウカザルが素早かろうと、

「“かげぶんしん”」

「ブイツ！」

指示を受け二、四、六と順調に残像を増やすイブ。モウカザルの

拳は残像一体を貫いて地面に命中する。はい、隙が出来た。

「めざめるパワー！」

ちなみにめざめるパワーは使用するポケモンの潜在能力に応じてタイプが代わる。ルカにヒットした時点でノーマル・格闘・エスパー以外なのは分かっているんだけどな。調べるには残り単色14タイプに当てる必要があるのになかなか面倒だ。

残った五体の残像から放たれるめざパ。集まった光が一気に発散してモウカザルを襲撃する。

「その場でかえんぐるま！」

咄嗟に身体を丸め縦回転しながら炎の鎧を纏うモウカザル。残念、あの鎧を貫くにはそれなりのパワーが必要だ。分散攻撃のめざパじや細かく砕かれて消滅させられてしまう。

「そのまま分身も掻き消せっ！」

防御から攻撃に転じるのも早い……が。めざパその物が囷だと言う事も覚えた方が良い。

「イブ、でんこうせっか」

分身に紛れていた本物のイブが飛び上がる。それに反応して本体を追尾するモウカザル。

その可愛らしい見た目に反してイブはスピード・スタミナ共に一級品。ゲット時にスタミナの強さは確認済みであり、逃げ回ってたせいかスピードも並のポケモンより遥かに速い。サンダース・エーフィのどちらかに進化するのが適しているのだらう、その所は本人の意思に任せるけどな。

「モウカザル！ かえんぐるまじゃ追いつけない、マッハパンチに切り換える！」

炎の鎧を自ら解き、一気に加速するモウカザル。物理先制技は瞬間的にスピードを高めると同意、同じく先制技を使用しているイブに追いつくにはそれが手っ取り早い。だが――

「すなかけ！」

でんこうせっかの１ステップ。後ろ足が少量の土を掴む事で砂が舞い上がり接近していたモウカザルは困惑して足を止めた。同時に砂に紛れ込むイブの姿は俺でも把握出来ない。

「止まるなモウカザル！ マッハパンチだ！」
「遅い。めざめるパワーからでんこうせっか」

砂煙の中から小さな光球が連続して飛び出しモウカザルにクリーンヒット、体勢が崩れた所に特性できおुरりよく+今までの加速を利用した突撃が決まった。運動エネルギーをそのまま伝えられたモウカザルは地面をバウンドしながら転がり最終的に目を回す。

「モウカザル戦闘不能！」　めざめるパワーがモウカザルの急所を捉えたのは幸運だったな。イブにも今の一戦は良い戦闘経験になっただろう、相手によつては続行も良いかもしれない。が、ジユンの性格を考慮すると。

「……戻れつ、モウカザル。いけつ、ヘラクロス！」

「ジユンのバトルスタイルはいつもと同じだ」

「どういう事ですか？」

「ジユンのバトルスタイルは強力な物理技で圧倒する事。特に近接戦闘が大好きなんだよ。モウカザルにヘラクロス、どっちも技のインファイトが使えるし戦闘分類としてのインファイト（近接戦闘）も得意なんだ」

モウカザルを収納し代わりに出て来たのは紺色の堅い甲殻で覆われた1ぽんツノポケモンヘラクロス。攻撃力が高い事で有名。コウキの語った通りインファイトも使えるが他にタイプ一致“メガホーン”もヤバイ。特にエスパークタイプや悪タイプが喰らうとシャレにならず一撃戦闘不能も有り得ると言えばどれだけ恐ろしいか分かるだろうか。確定でイブにはヘラクロスの相手は無理。

「イブ」
「ブイツ」

軽い調子で声を掛けると、分かっているとも言いたげにイーブイも鳴き返した。そしてトコトコ俺の足下に擦り寄って来る。審判のベテラントレーナーは冷静に判断を下す。

「イーブイ戦意喪失、よってヘラクロスの勝ち！ きみ、次のポケモンを出しなさい」
「はい。イブ、ゆっくり休みな。ルカ、頼む！」

足下に擦り寄るイブをヒールボールに納め、入れ違いでクイックボールを投げる。飛び出した封印ポケモンは要石に繋がれながら静かに浮遊する。ヘラクロスの特性がこんじょうの場合おにびによる火傷でパワーアップするので簡単には使えない。と、なると――

「ヘラクロス対ミカルゲ、始め」
「ヘラクロス先手必勝のメガホーンだ！」

ヘラクロスが背中の中を羽を広げて飛翔する。角先に力を集中しルカへ突っ込んで来る。先制技を使わない場合、ルカの役割は『とにかく相手の攻撃を一度受ける』事に尽きる。その威力や自分と相手に掛かる負荷をトレーナーである俺が見極め、ルカの行動を補足する。

「あくのはどう」

タイプ一致の強力物理技だが堅く育ててあるルカには大してダメージはない、とも言い切れないのがヘラクロスの怖い所だ。反撃とばかりに螺旋する闇の波動を撃たせるが格闘タイプであるヘラクロスは余裕でその攻撃を跳ね除ける。サイコキネシスを使わないのは――たまにはルカも大暴れさせてやりたいからさ。

「もう一度メガホーンだ！」

一度退くも再び特攻体勢のヘラクロス。迎撃指示を出していないので当然先と同じくダメージを受ける。崩されるにはまだ時間がある、しかし。

「いたみわけ」

二匹は接触状態、二回強力な物理技を受けたルカと半減したあくのはどうを受けたヘラクロス。HPにはそれなりに差が開き――今のいたみわけによってそれが均一化されたのだ。

ヘラクロスはいきなり体力を消耗したせいか羽を動かす事を辞めてしまった。当然そのまま落下する。

「ゴーストタイプは真つ向勝負よりもこついうトリッキーな戦術が基本さ」

「頑張れヘラクロス！ メガホーンだ！」

閉じ掛けた瞳に闘志が再び宿る、次にメガホーンを受けてもルカなら耐えるだろうが……ここは一思いに。

「かげうち」

ヘラクロスは——自分の影より生まれた漆黒の槍に貫かれ宙を舞う。衝撃を殺せずヘラクロスは目を回していた。

「ヘラクロス戦闘不能！」「いけつムクバード！」

ジュンが投げたボールから三体目であるむくどりポケモンムクバードが出現。ノーマル技は無効だから飛行技をメインに攻撃して来るはずだ。逆にこちらのゴースト技も無効だ。条件としてはほぼ同じ……か。

「つばさでうつ」！

特性『いかく』を発動させる事でルカに隙を作りそこにすかさず翼を叩き付ける。飛行技なのは読み通り、特性のいかくも想定内だ。

残念だがヘラクロスの体力を頂いたルカはたった一撃で倒れたりはない。

「反撃だ。あくのはどうで撃ち落とせ」

「かげぶんしんだ！」

「おにびで牽制」

次から次へと指示が飛ぶ中、ルカは主力技を放つのを諦めたようだ。それもそのはず、素早く分身を生み出したムクバードにあくのはどうが当たる気はしない。そこで一度に幾つも発生する青白い浮遊火で分身を一体ずつ消して行く。本体を割り当てるのは造作もなく、ムクバードは迫るおにびを掠りながらも避け続ける。さて、そろそろ決めるか。

「あくのはどう」

再三あくのはどうを命じ螺旋しながら漆黒の波動がおにびを回避した所のムクバードを直撃した。いかくで攻撃力は落とされたが特殊攻撃力は健在と言うわけだ。

「ムクバード戦闘不能！ ミカルゲの勝ち！」

目を回してボトリと地面に落ちたムクバードを確認し、勝負は決した。シロナのミカルゲとタメ張る俺のルカはそう簡単に負けはし

ないのさ。このカッコいい勝利シーンを見て誰か俺のファンになるわけないよな、畜生。

奥歯をギリリと噛み締めながらル力をボールに戻す。大人のお姉さんは無理だとしてもエリートトレーナー（女）辺りはアプローチ掛けて来るかと思ったんだけど……ってバトル展開しか見えないから良かったのかもしれないな。

ところでジウンが「絶対勝ってやる！」と成長フラグを暗喩しながら去って行ったのだが、どう見ても再戦する未来しか見えない。その時はまたお茶を濁してコウキに代わって貰うとしよう。ジウンのライバルが誰がどう見てもコウキなのだから。

俺は既にジョウト・ホウエンにライバルが居るのだから。正直これ以上ライバルはいらない、むしろ普通ライバルと言うのは数が必要なわけじゃなくて……互いに切磋琢磨出来れば一人で十分。だから人間の神様、いやポケモンの神様でもいい。一人で良いから俺に可愛い彼女を下さいお願いします。

「貴方は何に対して祈りを捧げているのですか」

呆れ顔がデフォルトになりつつあるニット帽少女。顔は美少女なんで呆れ顔でも可愛いんだけど。

「神様に」

「協会に行けばいいでしょう」

正論で切り捨てられると痛いです。俺の心がね。

「協会の神様は安っぽい願いを叶えてはくれないんだよ」

魂に傷を付けられる前に言い返す。彼女の言葉はそれなりにキツイのだ。

「ちなみにどんな願い事ですか」

「可愛い彼女を下さいと」

「アゲハント、“フラッシュ”です」

「ふぁーん！」

「目がぁ！　目がぁ！」

心でも魂でもなく、物理的に目が痛いっ！　学習した事、強烈な光は十分凶器になるらしい。ところで何でリサが彼女の言う事を聞いたのか、ポケモンは奥が深いね。野生状態で言う事聞く方が珍しいんだけどな！

第十二話／気儘に暮らせる町

ニット帽少女に睨まれコウキに泣き付かれたのでしょうがなくロストタワーをスルーしやって来た町、ズイタウン。名物は育て屋と町郊外の遺跡。簡単に言えば大した名物の無い町と言える。結論、さつさと次の町に行こうぜ。

「えー……遺跡で確認されているアンノーンは全種類捕獲したいんですけど」

「過労死させる気か」

「あはは。カイトさんはその程度じゃ死にませんって」

「そうですね。貴方のような軽薄な人間は贓物を撒き散らして誰にも気付かれず孤独死するのがお似合いです」

「……なあ、俺何か気に障る事したか？」

「いいえ。別にそんな事ありませんが」

発揮された毒舌はとても自然に彼女の口から滑り出た。やっぱり良い印象持たれてないんだなあ。今更再確認。

「遺跡には行かないんだ。もうポケモンセンターで休もうぜ」

「ジョーイさんに会いたいただけでしょう」

「……ははっ。とにかくポケモンセンターに行こうじゃないか」

「凶星ですか」

「凶星ですね」

子供らの突き刺すような視線が痛かった。

▼▼▼

「あーついたたた……二日酔いみたいに頭がガンガンする」

「頭痛程度で済んで良かったですね。彼女のサーナイト、かなりの高レベルですから本気でやられたら——文字通り殺られますよ」

「それは身に染みて分かったから自重するさ……」

口説きの定型句でジョーイさんをお茶に誘ってる途中でこの仕打ち。苛つきをポケモンを介して俺にぶつけないで欲しい。ポケモンを介さないでぶつけて欲しくもないが。

「この先はカンナギとトバリ、どっちに行く？」

「カンナギタウンにはズイタウンと同じで名物の様な物はありません。トバリシティに向かうのが妥当です。ただ」

「ただ？」

「少しだけカンナギ方面に寄り道して生息しているポケモンをゲットしたいんですけど……ダメですか？」

トバリ方面の出現ポケモンで未捕獲は……ウソハチ、マネネ、ラッキーか。カンナギ方面はアサナンやヨルノズクが狙い目か。

「ま、分担すれば直ぐに終わるだろうし彼女に迷惑も掛けないだろ」

迷惑掛けたらサイコネシスが飛んで来そうだから全速力で終わらせよう。きっとそれが正しい。

「カイトさん……」

唐突に耳に届いた不安げな声。世間知らずな普通の少年は両眼には不安の色を称えていた。

「僕達は彼女について何も知りません。名前すらも。彼女の正体も分からないのに——カイトさんは怖くないんですか？」

「怖い？」

「時折底知れない怖さを彼女から感じます。彼女が何を考えているのか分からない」

「ばーか」

コウキの頭を軽く小突いた。そう簡単に他人の考えが分かったたまるか、超能力者じゃあるまいし。

「名前も正体も彼女が自分から明かすのを待つ他ないだろうが。彼女にも彼女なりの事情がある、それを無理やり暴く必要なんてないだろ」

「で、でも……」

「でもモキャモメもあるか。コウキ、仲間を信じられないならお前

はそれ以上成長出来ないぞ。研究者としても、トレーナーとしても、視野を広く持て、何がお前の成長を促すか分からないからな」

「分かり……ました」

やはり子供は素直が一番だ。その後はアゲハントことリサと遊んで夕食までの時間を潰した。イーブイのボールがかなり振動してたが見て見ぬ振り。噛み付かれるのは御免だからな。翌日の朝食タイムで次の行き先がトバリシティと言う事でニット帽少女とも意見が合致。コウキは見聞を広める為に、俺と彼女はジムに挑戦する為に。次の目的地はトバリシティだ！

▼▼▼

と、格好良くズイタウンを発てたら良かったんだが……。

「びーちゅー！」

……ピチューの生息地はここじゃなかったような。

「随分と殺気立っているようですね、あのピチュー」

ここ210番道路に生息しているポケモンの中に電気タイプ、とつかピチューはいない。訳あって生息地を離れた流れ者とか？

「あんなに放電されると通るのは無理だね」

「近付く事も不可能でしょう。他のトレーナーも手が出せないようです」

「誰かが地面タイプで追っ払ってくれるのを待とうぜ」

相手のピチューは威嚇放電を続けているが地面タイプで対抗すればあつという間に決着が付くだろう。その後に通ればいいだけの事で、焚き火に手を出すような真似をする必要はない。人間取捨選択が大事なのだ。

「ふぁーん！」

「はい？」

「びぢゅ？」

「ふぁふぁーん」

「ちよっお前飛行タイプなんだから一撃KOに決まってるんだろ！止めとけ止めとけ」

野生なんだから俺の指示を聞かないのは当然だけど目の前でやられるのはどうも寝覚めが悪い。アゲハント種って基本潜在能力低いし、いくらピチュー相手とは言え相性が絶対的に不利なので勝てるはずがない。

つまりおとなしく俺の頭なりコウキの頭なりに停まってる、と言いたい所だがジーツと俺を見返す水色の瞳を無下には出来なかった。

「仕方無い……お前らは下がってな」

「カイトさん!？」

「分かりました。貴方のお手並み拝見と行きましょう」

「ちょっキミも何で簡単にカイトさんを送り出すの!？」

俺としてはニット帽少女の様にすんなり送り出して貰えると嬉し
いわけだが。コウキにそこまで気を回せつても無理な話か。

「あの方は旅の間貴方の護衛を任されているのでしょうか。ならば
この程度の事態に対応出来なければ護衛が務まるとは思えません」

ニット帽少女の辞書に買い被りって言葉は存在しないのだろうか。

「行くぞ、リサ」

「ふぁーん」

「びーっ!」

警戒放電、基技としての“じゅうでん”が終了した。

次に来る技が電気タイプなのは間違いない。

ピチューの両頬から電撃が迸りピチューの身体を包み始める。お
いおい、まさかアレは。

「飛べっリサ!」

「ふぁん！」

短く指示を飛ばしアゲハントを上空へ。同時に俺自身も転ぶように真右に避ける。

直後俺とリサの居た空間を突き抜ける電光が一閃突き抜ける。ピカチュウ種の専用技であり、電気物理最強威力を誇る大技——“ボルトテッカー”！

じゅうでんにより高められた電光は並の威力ではなかったよう。地面を深く抉りながらピチューは漸く止まった。ピチューと言えど今のが当たってたら文句無しの一撃KOだったな……。

「“ぎんいろのかぜ”だ」

「びー……ぢゅーっ！」

鱗粉を乗せた強風とピチューが発した電撃、“でんきショック”がぶつかり合う。未進化体であるピチューの身でリサと渡り合うとはなかなか能力が高いようだ。威力の劣るでんきショックでぎんいろのかぜを相殺するなんて。

「攻め方を変えるか、“しびれごな”を“ふきとばし”に乗せて放て！」

「ふぁーん！」

しびれごなは相手を麻痺させる効果を持った補助技、広範囲に散布する事でこそ真価が発揮される。

ふきとばしと言つ技は文字通り相手を吹き飛ばして戦闘を強制終了させる補助技、但しこの場合はしびれごなをピチューの逃亡範囲含めてばらまく役目を持つ。

「びつ……びつ」

しびれごなを直に吸い込んでしまったのか噎せ始めるピチュー。しびれごなは特性蓄電及び電気エンジン（例を上げるとサンダーズやエレキブル等）を麻痺させる数少ない補助技だ。ま、ピチュー含め他の電気タイプには”でんじは”が有効だからそっちの方が良いだろうけど。

「よし、後は」

「ゲットするんですか？」

「それしかないだろ。後はナナカマド博士に押し付ける」

「薄情ですね」

モンスターボールを取り出した俺にニット帽少女から辛辣な言葉が浴びせられる。別にゲットしなくてこのまま野生に返しても良いんだけど。麻痺したまま逃がしたら人でなしと罵られそうだ。

「良くやったりサ、少しばかりコウキの頭にでも停まってる」

「ふぁん」

滞空するアゲハントに軽く触れて告げる。指示通りにリサはコウキの頭にズシリと押し掛かった。

知ってるか？ アゲハントって以外と重いんだぜ。「かなり危険だから絶対に真似するなよ」

「何をするつもりですか？」

「離れて見ていれば分かるさ」

腰のボール全てとポケナビを放り込んだリュックもコウキに押し付けた。感電しても壊れる物はもう無い。

「よっこらせ」

「……び、びーっ！」

身体が痺れ動けないピチューを抱き上げた瞬間、抵抗の意を示す電撃が身体中を駆け巡る。

「落ち着けったら。お前がもう動けない以上危害は加えないからさ」
「びーっ！　びーっ！」

聞く耳持たずか。現在進行形で身体中を電気が駆け巡っているがボルテッカーやぎんいろのかげ相殺のでんきショックで体内に貯めておいた電気が底を付いたのか電撃はどんどん弱くなって行く。そうじゃなかったら幾ら俺でも耐えられない。

「んっ……？」

おかしい。ピチューがこんな所に居ること事態がおかしいと思っていたが。

尻尾の先が――『上』を向いていた。ピチューの尻尾は通常『下』を向いている。しかしこいつの尻尾は不自然に『折り曲げられて』上を向いていた。ピチューは電気タイプ、今までは自分の身体に微量の電気を流し痛覚を麻痺させていたのでは？

だが体内の電気が底を付いた為痛覚が戻って来た、だから急に喚き始めた。しびれごなで身体は動かせずとも痛みは伝わって来るから。

――今俺に出来る事は、こいつをポケモンセンターに運ぶ事だ！

▼▼▼

「ジョーイさん急患です！」

「きゅ、急患！？ 分かったわ！ 直ぐに診るから！」

受付カウンターの中から出たジョーイさんと共に診療室へ向かう。きゅっと、痺れて動けないはずのピチューに服を摘まれた気がした。

「ストレッチャーにそつと寝かせて！」

「はい！」

尻尾を負傷しているので横向きに寝かせる。服を摘まれたのはやはり気のせいだったな。

「酷い……この尻尾もだけど、分かりにくい所に打撲痕が集中しているわ」

「両耳の裏、右頬袋、それに首の付け根……」

「状態異常も重ね掛けされているわ。混乱と電気による麻痺が同時に」

「麻痺は兎も角混乱まで？ だからあんなに暴れていたのか……」

俺達が遭遇する前に別のトレーナーと争った様子はなかった。だとしたら野生ポケモンの線が強いが……。

「ラッキー！ この子を集中治療室へ運んで！」

「ラキッ！」

慌だしくストレッチャーを押して診療室を出る一人と一匹を見送る事しか出来なかった。

▼▼▼

状態異常の混乱を引き起こす技は“あやしいひかり”や“ちょうおんぱ”など、麻痺を引き起こすのは“でんじは”や“しびれごなど”。

ジョーイさんの言葉通りならば、あのピチューはアゲハントと戦う前からと混乱と電気技による麻痺状態だった事になる。だから暴れていたのか、麻痺と混乱により敵と味方の区別が付かなかったのだろう。

その時集中治療室の扉が開き、額の汗を拭いながらジョーイさんが出て来た。

「ひとまず、ピチューの容体は安定したわ」

「良かった……」

「良かった……ですって？」

瞬間、小気味の良い音と共にジョーイの右手が俺の左頬を捉えた。はたかれた、そう理解するのに数秒の時間を要す。

「何がぬけぬけと『良かった』よ！？ あの子の苦手な味の木の実を食べさせた拳句でんじはによる麻痺だなんて臆にしてもやり過ぎ。暴行の証拠も見受けられました。貴方を携帯獣保護法違反で通報します」

俺がピチューを虐待した人間だと誤解されてる！？

俺は人間の男は兎も角ポケモンや女性に手を上げた事は生まれてこの方ないっての！

何か身分を証明する物は——お、丁度良い所に。

「おーいコウキ！」

「カイトさん！　ずっと探して……何をしているんですか？」

「通報されそう。俺のアリバイって言うか身分証明してくれ頼むから」

「何をどうすればこんな状況になるんですか……？」

コウキとテレビ電話越しのナナカマド博士により事なきを得た。

全く、虐待したと疑われるなんて災難も良い所だ。

ちなみにコウキと分担して俺を捜していたニット帽少女には俺が虐待されましたさ。ちゃんちゃん。俺が途中でエスケープしたせいで時間を浪費した一行は旅立ちを明朝に延期。ピチューの容体も気になっていた所なので渡りに船だ。ただ放置したせいでイブ（イブイ♀）とリサ（アゲハント♀）がすこぶる不機嫌でイブはボールに引きこもり、リサはコウキの頭頂から俺を監視中。

あつはつは、その反応はザクザク心に突き刺さるから辞めて欲しい所だがもう暫くは継続するに違いない。構って貰えないから寂しいとは人間の子供と似通った所がある。ポケモンと人間の間に絆が生まれるのは、言語が通じず姿形も違う二種の本質が同じだからかも知れないな。

「ほーらイブ。拗ねてないで出て来いよ、ブラッシングしてやるから」

カタカタカタカタと揺れるボール。明確な拒否反応だった。仕方なく揺れるボールを腰に戻し次なる懐柔策を試みる。

「リサ、ピンクのリボンで可愛いお洒落してみなぶわっ」

問答無用のぎんいろのかぜで吹き飛ばされた。こっちも失敗かよ。ま、こういう時は放っとくに限る。

「ピチューの様子を見て来るぜ」

「了解です」

アゲハントの刺すような視線が背中に痛かった。

▼▼▼

ガラス越しのピチューは素人目でも今朝方よりかは回復したように見える。しかし苦手な味の実を与え、電気技で麻痺させ放置だなんて酷いトレーナーが居たものだ。そんな奴がポケモントレーナーを名乗るだけで虫酸が走る。貧乏リーグ基シンオウリーグに通報したるか。

「さっきはごめんなさいね、カイトくん。貴方の事は姉から聞いていたのに」

「姉？」

「コトブキシティのジョーイは私の姉よ」

「何ですと!？」

なる程ね……何処となく面影を感じるわけだ。ん？ 肉親って事は……。

「ちなみに出会ったジョーイを必ず口説く軟派トレーナーとして有名になりつつあるわ」

……少しばかり自重しよう。ジョーイさんの横のつながりで名前を広められると困るしな。

「ポケモンの回復お願いしまーす」

「はい、ちよつと待っててね」

回復希望のトレーナーが来たのでジョーイさんはパタパタとカウスターへ駆けて行った。それじゃ俺は進路の下見にでも行って来るかね、ピチューによる通せん坊もなくなったわけだし。

▼▼▼

210番道路は草丈が通常の叢の二倍近い事を除けば至極普通の道路だった。確かモーモーミルクを販売しているカフェもあったか？ トバリシティへは210番道路、215番道路と一気に突っ切る予定だから寄る暇はないだろうけど。

「うーん……！ やっぱり自然が近い町は空気も美味し」

チリンチリンチリンチリン！

「いつ！？」

な、何だあの暴走自転車の集団は！？ ひ、轢き殺される！？

「邪魔だっ！」

「どけっ！」

「進路に立つな！」

うへえ。罵詈雑言と砂煙を残し、自転車暴走族は210番道路方面へ。しかし少しすると猛スピードで209番道路に折り返して行く。

見た目は普通のエリートトレーナーに見えたのだが、頭のおかしい連中なのかもしれない。

▼▼▼

部屋に戻った俺を迎えたのはコウキ、ではなくリサを頭に乘せたニット帽少女であった。

どうやらコウキは時間の有効活用にとポケモンを捕獲に言ったら

しい。どうしよう、俺のアイデンティティーが危ない。話のタネにさっきの自転車暴走族を出した時に思い出したのだがキンセツシエイ・シダケタウン間にも自転車暴走族が居たっけ。サイクリングロードも近いし都会だからと言う理由で納得していたが似たような自転車暴走族が通過するズイタウンは都会とは言い難い。

何か共通点でもあったか？

バンツ

な、何だ！？ 一連の話を言い聞かせたらニット帽少女がいきなり机を叩いたぞ！？

な、何がお気に召さなかったのですかお嬢様っ！

「行きましょう」

「はい？」

「その集団は貴方が考えているよりずっと酷いです。止めるなんて甘い事は言いません」

「……つまり？」

「殲滅します」

俺に向けられたのはナナカマド研究所を訪れた時のような真つ黒な笑顔であった。「ズイタウンから出て行きなさい」

「ああん？ 何処を通ろうが俺達の勝手d（ry」

ドカーン

エリートトレーナーA（仮名）にサーナイトの気合球炸裂。

「お、お前！ ヒロシになにs）ry」

ドカーン

エリートトレーナーB（仮名）にも気合球炸裂。

「い、このアマ何しやg）ry」

ドカーン

エリートトレーナーC（仮名）に直撃。

「本気で容赦ないな……」

俺が付いて来た意味はあったのかなかったのか。絶対後者だ。ところで気合球ってゴーストタイプに無効化されたり。

「ヒロシイ！ テルウ！ アキヒトオ！ 畜生許さねえ！」

「サーナイト気合球です」

「させるかよオ！ 殺れエ、ジュペッタ！ シャドークロー！」

サーナイトの気合球は縫いぐるみポケモンジュペッタの登場で無効化され霧散した。登場したてのジュペッタは薄い右手に影を練り上げ爪を形取る。

サーナイトの弱点を突くには適切な一撃、ではあるが。

「クチート！ 噛み砕く！」

サーナイトの影からひょっこり顔を出したクチートが第二の口でジュペッタに食らい付く。

不一致とは言え耐久に優れないジュペッタは一撃KO、クチートにぺっと吐き出されると目を回していた。

本当に強いな……この強さは何処で身に付けたんだろう。サーナイトやクチートはハウエン原産、もしかすると俺の故郷ハウエン地方で修行したのかもな。ま、ラルトス種はシンオウにも生息するしシンオウ地方で修行したと考える方が普通だけど。

おっとジュペッタをKOされたトレーナーもサーナイトの気合球でKOされた。もう終わりか。ちなみに俺は二ツト帽少女がKOした連中を縛り上げているところ。まさか俺が連れて来られたのはこの為？ 悲し過ぎる。

「動くな」

「はい？」

エリートトレーナーD（仮名）を縛り上げている途中だった俺に背後から突き付けられた脅しの声。

突き付けられたのは声だけでなく——俺の首を一太刀で掻ける鋭利な鎌も付属していた。鎌の縁が緑色な事から、恐らく蠅螂ポケモンのストライク。

「おいガキ。こいつの命が惜しかったらそのサーナイトとクチート
をボールに戻しな」

「ふふっ……」

「な、何がおかしい！」

「私が、その人の命を、惜しく思うように見えますか？」

なにそれこわい。

「な、何——」

「サーナイト、十万ボルト」

うぎゃあああああ！！！！

自分が焦げる匂いを最後に俺の意識は消失した。

▼▼▼

「軽症で済んで良かったですね」

「サーナイトが加減しなかったら三途の川確実に渡ってたぞ!？」

微妙な力加減が出来る分ニット帽少女よりサーナイトの方が慈悲深いのか。いや、似た者同士だからどっちも質悪いな。

ただ林檎を剥いて貰えただけ有り難いと思うべきなのか？

ところであのエリートトレーナー集団（仮名）だがニット帽少女の通報で駆け付けたジュンサーさんに連れられ御用となったらしい。罪状は全員『ポケモン虐待』、ピチューを虐待したのも連中だと判明。

周辺調査で連中に虐待されたポケモンが数多く見つかった事からかなり長く刑務所に入る事となるだろう。

虐待されたポケモン達は全てが人間を恐れており、最近オーレ地方で研究が進められている“リライブ”なる物を応用した治療施設に送られる事が決定。ピチューもそこで治療される事になるだろう。

「いえ、それが」

「ん？」

「ピチューは混乱と麻痺で意識が混濁していた事もありトラウマにならなかったようです」

「そうか……」

人間を怖がらないのなら、野生に戻り新たなパートナーと巡り合えるだろう。ピチューのトラウマにならなかった事は純粋に喜ばしかった。

「ただ」

「……何か問題があるのか？」

「問題と言う程ではありませんが、その子ある人物の匂いを覚えてしまったそうで」

「……そいつが新しいトレーナーにならないとダメなのか。ま、大丈夫だろ、あの可愛さならどんなトレーナーでもイチコロさ」

「だ、そうですね」

「へっ？」

「ピッチュ！」

もそもそと俺の掛けていた掛け布団の中から現れる薄黄色の小鼠。

「運ばれる時に貴方の匂いを覚えたようです。可愛さにイチコロなんですよね？」

悪戯っぽく笑うニット帽少女とピッチュは何処までも小悪魔チックで。俺は無難に肩を竦めるしか出来ないのであつた。

第十三話／石に囲まれた空間

新たな同行者ピチューを加えズイタウンを発った俺達一行は210番道路に差し掛かっていた。

210番道路のトレーナーはニット帽少女のポツタイシとコウキのハヤシガメが無双、ポツタイシのレベルとハヤシガメのレベルはだいたい同じぐらいにはなつて来ているようだ。

途中カフェ山小屋によりウェイトレスを愛でながらモーモーミルクをこつくんして休憩する予定だったのだが、俺の邪な思惑を見透かしていたニット帽少女により実現する事はなかった。さすがにクチートに脅されれば誰だつて頷くはずだ。頭に齒形を残したくないならば。

215番道路は常に雨が降っている道だった。ニット帽少女が傘を持ってなくて俺と相合い傘、何て事が起こるはずもなく。三人用意していた傘を指して215番道路を越えたのだった。それにしても空手王が多かったな、秘密の修行スポットとかか？ 究明しようとは思わないが。

そうそう、俺が傘を出す時に荷物を整理していると使う予定の無い光の石が転がり出た。研究所で世話をしているマッスグマが拾つて来たのをガメたんだっけ。ニット帽少女の視線が光の石に釘付けだったのが今も忘れられない。

と、そろそろトバリシティに着くみたいだなー。

▼▼▼（トバリシティ／トバリジム前）

「トバリシティジムリーダースモモ、裸足の天才格闘娘……」

シジマのおっさんやトウキと違って格闘タイプを扱う女の子か。またル力で完封出来そうな予感。

「失礼します」

えっ、休ませてくれないの？

「貴方だけ勝手に休んでいればいいでしょう。但し明日にはトバリシティを發ちますから挑戦のチャンスは今だけです」

労りつて言葉はニット帽少女の辞書にないんだろうな、多分。誰が保護者やってると思ってるんだ、俺だよ俺。あ、詐欺じゃないかな？ ニット帽少女がジムトレーナーを撃破してくれたお陰でスモモと直に戦えるのは有り難かった。ただスモモがニット帽少女より年下な、下手したら幼女の部類に入りそうなツルペタ具合に絶望した。ツルペタ具合はニット帽少女と良い勝負とか考えていたらそれをサーナイトに読み取られニット帽少女にボコされた。相変わらず恐ろしい。

スモモの手持ちはやはり全員格闘タイプ、アサナン、ゴーリキー、ルカリオと言った面子。ルカリオは強敵、シロナが持っている事から考えてもな。格闘タイプとしての弱点が消えている代わりに鋼としての弱点はスルー、サーナイトの気合い球直撃で難なく勝利をものぎ取ったニット帽少女であった。

で、俺の出番が回って来た訳だけど。ルカで完封……の予定だったんだけどさ。

ルカリオのボーンラッシュ！ 急所に当たった！ 急所に当たった！ 急所に当たった！ 急所に当たった！ 急所に当たった！ 五回当たった！ ミカルゲ戦闘不能！ っていうこっちゃ！？ しかもさつき持たせてなかったのに拘りハチマキとかズルイだろどう考えても！

「さつきは不覚を取りましたがリミッターを外したあたしのルカリオはシロナさんのルカリオと同じぐらい強いですよ」
「リミッターって何ですか？」

一足先にジム戦を終えたニット帽少女の質問。

「あたしたちジムリーダーがエースとして使うポケモンは他のポケモンよりグリーンとレベルが高いんです。けどそれじゃ勝てないトレーナーが続出するのでポケモン協会から配備されたリミッターでレベルや能力を下降補正しているんです」

「ちなみにリミッターを外した時のレベルは？」

「少し前の測定結果はLv.66相当でした」

「帰る」

「まだジム戦の途中ですよ？」

「勝てるか！？」

「ヒョウタさんやナタネさん、メリッサさんは知らされていなかったみたいですけど。あたしを含めた残りのジムリーダーは——貴方に大して一切の手加減をするなとチャンピオンのシロナさんから厳命されています」

「あの野郎おおおお！！！！」

「落ち着いて下さいシロナさんは女性ですよ？」

「そんな細かい事はどうでもいいんだよ！」

何でわざわざ俺だけ攻略難易度上げるんだ！？ あいつバカなの？ 死ぬの？

ああ……ついて行かなかった報復ってか。あの野郎次会ったただじゃ済まさねえ。シロナへの復讐を心に深く刻み腰のボールを手にとった。

「ちなみに貴方限定でバトル形式は対一、ジムリーダーはリミッターを外したエースを使う事が義務付けられています」

「結局俺の負けじゃないか」

「今の戦闘は不意打ちに近かったのでカウントしません。どうぞ、別のポケモンを出して下さい」

「……ルカ、良く頑張ったな。ゆっくり休んでくれ」

ボーンラッシュ五回連続、しかも急所に受けたルカを労りクイックボールに戻す。

同時にスモモの方もルカリオを一旦ボールに戻し再び展開すると言う行動を取った。拘り鉢巻のデメリットを一旦キャンセルする為の事だと簡単に理解出来る。

「コウキ」

「はいー、ってわわっ」

「ルカ入りのボール、その回復マシンに入れてやってくれ」

「わ、わかりました！」

さて、ルカの回復はコウキに任せた。シロナへの怒りをぶつける意味で一撃で終わらせる。

「――迫る進化の時を待て、イーブイ！」「い、イーブイ!？」

「イブ、いけるな？」

「ブイッ」

モウカザルと言いルカリオと言い苦手な格闘タイプにぶつけてばかりだがそれがイブの良い経験になる。勝機もある事だし。

「ルカリオインファイト！」

スモモのルカリオが地面を蹴ってあつという間に接近。一心不乱に拳の連打をイーブイへと叩き込む。

「効果は抜群。拘り鉢巻による増強、更にインファイトはタイプ一致の大技です。私はシロナさんが貴方に期待する理由が分かりません。格闘タイプにノーマルタイプを出すようなトレーナーに……!？」

ルカリオの強力な連打を受けボロボロになりながらも、イーブイ

は強い意志を瞳に宿し立ち上がっていた。

「格下だと舐めて掛かると足を掬われるぞ。イブ、目覚めるパワー！」

イーブイの口許に集束するエネルギーの色を見て指示を出した俺も驚いた。何畝エネルギーの色が白から——オレンジ色に変わっていたのだから。

弾けたエネルギーは動揺し防御が甘くなったルカリオの全身に炸裂した。うーむ、こりゃ急所に当たったな。

「ルカリオ、戦闘不能！ よって勝者マサゴタウンのカイト！」

高らかに俺の勝利宣告。但し俺が直立の状態で聞いたと思ったら大間違い。勝利したイブに飛び付かれ座り込んでいるのだ。

「気合の襷、ですか」

スモモがバトルフィールド内に落ちていた黄色とオレンジの襷を拾い上げ嘆息。予想外の持ち物だったらしい。

「どんなに強力な技でも体力を最後の一滴で残すアイテム……これを考慮しなかったあたしの負けです。そしてトバリジムを勝ち抜い

た証、コボルバッジを進呈します」

これがコボルバッジか…… まあフェザーバッジを持つ俺に秘伝技空を飛ぶが使えるようになる副次効果は意味無し！

スモモがノリノリでバッジの効果を説明しているから言わないけど。

▼▼▼（トバリシティノ街中）

「いやールカもイブも大した事無くて良かったぜ。さすが格闘のプロとそのポケモン、加減の仕方が分かってる」

「みよんみよん」 「ブイー」

「ルカ？ イブ？ どうし——」

「あつ、カイトだ」

「逃げるぞルカ、イブっ！」

「あつ待ちなさい！ 追うわよガブリアス！」

「ガブー」

▼▼▼（トバリシティノポケモンセンター宿泊施設男性棟）

「それでシロナさんと鬼ごっこをしていたと」

「鬼はシロナじゃなくてガブリアスだったけど…… 最終的にドラゴンダイブで轢かれたし」

「ところでそのシロナさんは何処に？」

「食堂でアイスでも食ってんだろ。というかあいつもポケセンに泊

「まるし」

「え」

「安心しろ、夜這いに来たあいつからお前を逃がすくらいは出来る」
「僕の中のシロナさんのイメージが音を立てて崩れさって行きます」
「所詮四天王ゴヨウが作り出した対外的な仮面に過ぎない。むしろファンなら本当のシロナを知れて良かったんじゃないか？」
「変態はちよつと……」

おかしい。シロナに向けられた言葉の筈なのに、何で俺の心を深く抉るんだろうか。ああ、俺が変——って認めないぞっ！

俺がシロナと同レベルの変態だなんてっ！ 絶対に認めないからなっ！「……まさか本当に来るとは」

「てへっ」

「さて、ジュンサーさん呼ぶか」

「ま、待って！ それだけは……！」

男性棟から女性棟に行つて取り押えられるなら兎も角、その逆を実行するとは。本当にこんなのがチャンピオンで良いのかシンオウリーグ。

「んじゃ俺はこの犯罪者をシンオウリーグ関係者に引き渡して来る」
「えっ、か、カイトさん……一緒に居てくれないんですか？」
「あたしが一緒」

「黙れ犯罪者。コウキ、そんなに心配ならリサを置いてくから安心しろ。並の変質者なら返り討ちだ」

育てた俺もビックリな早さで強くなるんだもの。さすが虫ポケモン、成長が早い。

「ああん。コウキくと暑い一夜を過ごす計画が……」

マジでジュンサーさんに通報したろうか。

▼▼▼（トバリシティ／倉庫群）

「たくつゴヨウの奴人目に付かないからってこんな辺鄙な場所を受け渡し場所にしないでよ」

「あたしを危険物みたいに言わないでよ」

「険と物の間に人を入れる馬鹿」

「馬鹿って言った方が馬鹿なのよ！ バーカバーカ！」

「お前は聞き分けの悪い子供か！？」

というかさ。何でシロナがトバリシティに居るんだよ。チャンピオンなんだからリーグに常駐しているのが普通だろうが。

「ドータクン、ジャイロボール。エルレイド、サイコカッター」

「スカンプーが一撃だと！？ こいつまさか……」

「グレッグル！？ 四天王のゴヨウ！ 何でこんな所に居るんだ！」

「困った上司を引き取りに来ただけですが…… 未来ある少年少女からポケモン図鑑を奪う計画を聞かされては無視出来ません」

「に、逃げるぞ！」

「ああ、勝てるはずかない……」

慌てた様子の二人組がとある倉庫前から逃げて行った。銅鐸ポケモンのドータクン、刃ポケモンエルレイドを従えるシンオウリーグ関係者。いや、四天王最強の男。

「遅くなつてすみません。何やら不審な動きをしていた二人組を見掛けたので」

「なんだあいつら。姿は確認出来なかったが」

「『ポケモン図鑑を奪う』と言う言葉が聞こえたので肅正しましたが、倉庫の影を利用されたのが痛いですね」

ちなみにゴヨウに紫ワカメは禁句。キレたこいつはシロナでも押えるのがギリギリなレベルだから。四天王最強はいろんな意味で伊達じゃない。

「ほら」

「はい、確かに」

「あたしを物扱いするなー！」

さて厄介なシロナもゴヨウに押しつけたし。俺も帰って寝るかな。

「エルレイド。テレポ」

「ゴヨウ」

「はい、何ですかチャンピオン」

「少しまだ良いから待ってて」

「分かりました」

嫌な予感。こんな時は逃げるに限る！

「ゴヨウ」

「はい。エルレイド、リーフブレード」

テレポートを併用したゴヨウのエルレイドの接近に生身の人間が太刀打ちできるはずもなく。

エルレイドの分類名にもなっている伸縮自在の刃が俺の首へ突き付けられていた。

「避けないのですね」

「エルレイドは居合いの名手だ。下手に動いて怪我したくない」

「動かない事が正解、ですか。やれやれ、ポケモンの生態を完璧に記憶する頭脳と実力を見抜く眼は健在のようですね」

ゴヨウはわざとらしく肩を竦めると、エルレイドを自分の側に下がらせた。

「カイト」

「何だよシロナ」

「あたしと一緒に来るのはそんなに嫌？」

「嫌だと言っただら？」

いつもの様に軽い調子で返答。また怒るのは簡単に予想出来る。
こいつとの付き合いは短いわけじゃないからな。

「うえええええん！！！」

マジ泣き！？ ああもう何でこいつは……！

「シ、シロナ……落ち着けて」

「うえーん！」

はあ……ホントこいつは子供だな。大人になっても純粋な部分を
残している事は良い事でもあり悪い事でもあるのだが。

「シロナ」

「ぐすつ……」

「おいシロナ」

「なによ……カイトのバカ……」

何で俺が馬鹿呼ばわりされないといけないんだ。お前より頭の出

来は良いと思うが。

「お前この間問答無用で俺を手伝わせるって言ってただろ？」

「言っただけど……でも」

「何がでも、だよ。断っても無駄な事くらいとつくに理解している」

「本当？　じゃあ手伝ってくれる？」

「俺はコウキの旅に同行しているから一緒には無理だ。ま、道中での情報収集程度ならな」

「……いいわ。そこが妥協点ね」

泣きやむと同時にチャンピオンの仮面を被るとはやるじゃないか。これもゴヨウが懸命に演技指導したおかげだな。

「手伝って欲しいのはギンガ団についてよ。カイトは情報収集に専念してくれていいわ。その情報を元に私や四天王、ジムリーダーが動くから」

シンオウリーグ下に所属する八人のジムリーダーに四人の四天王に一人のチャンピオン。シロナによるとギンガ団対策本部をその内設立するとか、俺は絶対に入らないけどな！

「やっぱり無償……だよな」

コクリと頷くシロナ。やっぱり貧乏リーグチャンピオンだ。自分

から言い出したのだから報酬を要求するのもおかしいか。それに…
…上手くやれば赤毛美少女マーズと紫髪美女ジュピターのデータと
かも手に入るかもしれない。それを元に絶対に口説き落としてやる
ぜ！

「エルレイド。なんかムカついたからカイトにストーンエッジ」

「辞める馬鹿！」

「あたしはバカじゃない！」

「エルレイド、チャンピオンの命令は聞かなくてもいいですから」

「えーっ！？ ゴヨウのケチ！」

「そついう問題ではありません」

「そつだぞ阿呆」

「だからあたしはバカでもアホでもないったら！」

「それではこれで。エルレイド、テレポート」

「あばよマヌケ」

「覚えてなさいよーっ！？」

主の命令を速やかに実践したエルレイドによって迷惑な金髪は俺
の前から掻き消えた。漸く俺もポケモンセンターに帰れるな。

「イブ」

「ブイー？」

戸惑ってボールから出て来たイーブイを有無言わずに抱き上げ
る。

「今日は格闘タイプ相手に良く頑張った。ありがとな」
「ブイー」

えっへんと胸を張るイーブイに微笑ましくなり頭を撫でる。フワ
フワとした毛並みが心地良い。

「ルカ」
「みょーん……」

イーブイを抱いたままミカルゲを展開。昼間何も出来ずに倒されたのが堪えたのか、鳴き声に元気がない。

「ルカもありがとな。今回は俺の判断ミスだった……だからお前が
気負う必要は全然ないんだよ」
「みょん」
「だから次のジム戦も頼むぜ？」
「みょみょーん」

心無しかボールから出た時よりは元気になったようだ。上下左右
に伸縮するミカルゲを見れば自ずと理解出来る。

「あ……」
「ブイ？」

「みよん？」

「やつべ……リサとピチュー放置したままだ」

今更気付くも抵抗出来るはずもなく。強風と電撃に歓迎され翌日の朝まで床で寝る事になったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5352h/>

お騒がせ 트레이ナー 珍道中

2010年11月6日00時09分発行